
探偵たちの幸せな人生

咲蘭保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵たちの幸せな人生

【Nコード】

N6636W

【作者名】

咲蘭保

【あらすじ】

これは組織との戦いが間近に迫っている、というところからのお話。

メインはコ哀・新志ですが平和やその他の恋の行方を書いています。

とにかく哀ちゃん（志保ちゃん）最良なので、

新蘭派の人は避けられた方がいいと思います。

一心、蘭も幸せになる予定です。

組織VS探偵たち1（前書き）

コナンになってから一年後・・・

組織 V S 探偵たち 1

工藤新一が江戸川コナンになったあの日から一年が過ぎた。

組織がいよいよ動きだした。

そしてコナン達も待ち望んでいた決着をつけるため

密かに作戦をたてていた・・・

「じゃあ、この作戦で。決して油断しないように。」

「了解」「」

コナンと灰原、服部はFBIとの会議ではお決まりのある所に来ていた。

いよいよ組織との戦いがはじまる・・・

FBIの人たちとの会議も終わって

コナン達三人はジョディに車で阿笠邸まで送ってもらっている。

そんな中、服部が灰原に聞いた。

「なあ、ねーちゃん」

「なに？」

「ねーちゃんは怖ないんか？平然としてるけど」

「あら、平然としてるつもりはないけど焦るよりはマシなんじゃないかしら？」

それに私なんかよりあなた達のほうがビクビクしてるんじゃない？ 引き返すなら今のうちよ？」

「アホか。そらちょっとくらい 緊張してるけど」

今更引き返すようなめめっちいマネはせーへんで。 工藤とち
ごっ」

「おい！！服部。」

俺がいつそんな引き返すようなマネしたんだよ。

だいたい、今引き返したとしても現にあいつらはすぐそこまで
来てるんだ。もうあとは決着つけるだけだろ。」

と言ってコナンは服部を睨みつける。

ジョディはコナンの正体を知っている。

先日、コナンと灰原がFBIの一部の人たちに全て話したからだ。

これから命を懸けて一緒に戦う人たちには全てを話さなければ・・・
と思います

コナンと灰原の正体、アポトキシンのこと、灰原の姉である宮野明美のこと、

なぜ俺達が組織に命を狙われ決着をつけようとしているのかなど

・・・全てを話した。

今までの行動からして2人にはなにかある、と思っていたらしいが
その事実は予想以上に驚くべきことだったらしく、話を聞いていた
人達はしばらく

言葉を発することができなかった。

その沈黙をやぶるように灰原が言った。

「私は・・・私の作った薬は多くの人を殺してしまった。

本当はこんなところにはいけないということ、ちゃんと
分かっています。

この戦いが終わったら私はちゃんと処分を受けるつもりです。

でも、今回のことは私も行って決着をつけたい。殺されたお姉ちゃんのためにも。」

灰原はあのと看俯いていった。

姉のことを思うと気持ちを抑えられないのだろう。

灰原の肩が小さく揺れていた。

そしてコナンは思った。

.....絶対にこいつを守らなければ.....と。

FBIからの答えも灰原の気持ちを考え

戦いがおわってから今後のことを考えようと言ってくれた。

そんなことを考えているうちに車は阿笠邸の前に着いていた。

ジヨディにお礼を言って帰ろうとしたとき

「予定通り3日後に行くつもりだけど何かあったらまた連絡するか
ら」

と言ってジヨディも帰って行った。

そう・・・戦いは3日後。

組織 V S 探偵たち 1 (後書き)

初めての投稿です。

へたっぴな文章ですがこれからも読んでください。

組織 V S 探偵たち 2

先日の FBI との会議から 2 日たち

コナン達は博士の家で明日のために身体をやすめている。

コナンと服部までなぜかいる。

探偵事務所で休めばいいのに、と灰原は思ったのだが

蘭は空手の合宿、小五郎は町内会の旅行に行っていてしばらく帰ってこないし、

何より、3人で固まっているほうが何かあったとき動きやすいから、ということらしい。

10

灰原はいま地下室にいる。

アポトキシンの最終チェックのためだ。

（やっと工藤君を彼女の元に返せる。・・・ごめんなさいね。工藤君。

あなたと毛利さんとの大事な時間を奪ってしまって。でも、もうこれからは幸せに生きて。

お願いだから。私はあなたを死なせない。・・・

工藤君が私に言ってくれた言葉。「俺が守ってやる」

うれしかったわ。

次は私があなたを守る。何があっても。」

とうとうこの日がやってきた。

コナン達三人はFBIの車に乗って組織がいるという建物の前にいる。

そして・・・

「行くわよ」

ジョディの言葉でFBIと三人は一斉に動きだした。

組織の建物の中に入った。

薄暗くて気味が悪い。今にも敵が来そうで呼吸も乱れる。

それは三人とも同じようだった。

いたる所で銃声が聞こえてくる。

そしてある部屋に入ったとき・・・

聞きなれた、最も嫌なあの声が聞こえてきた。

「久しぶりだな。シエリー」

「ジン！！」

忘れてたくても忘れられないこの声。

何度も夢にでてきたこの顔、不気味な笑み。

それが現実となって今、灰原達3人の前に立っている。

恐怖で立っているのもつらい。

「無様な姿だ。小さくなってから俺達の様子を探ってたんだろっが

顔がひきつってるぞ。今になって組織を抜け出したことを

後悔してるんじゃないのか？だが、今更後悔しても遅い。

その様子だと隣にいるのは工藤新一だな。

お前も子供の姿になっていたのか。

そしてシエリーを匿って俺達のアジトへ乗り込んできた。そう
だろっ？」

「ああ、お前達と決着をつけに来た。

今、周りにはFBIが大勢いる。お前たちを牢屋にぶち込んでやるよ。」

「あんたら組織のメンバー、一人残らずなあ。」

「服部平次か。だが俺たち組織はそんなに簡単には殺られねーよ。

例え、名探偵と言われるやつだったとしてもなあ。

俺達が牢屋に入る前にお前たちをあの世へ送ってやろう。」

そう言っつて、ジンは灰原の前に拳銃を向けてきた。

そして灰原もジンに向かってFBIに持たされた拳銃を向けた。

コナンも服部も持っている拳銃をジンに向けている。

パン！！パン！！と音がなった。

苦しんでいるのは灰原でもジンでもなく……

コナンと服部だった。

撃つたのは組織のメンバー、キャンティとコルン。

気づかなかった……他にもいたなんて。

組織の2人はまだコナンたちを狙っている。

(フツ・・・シェリー。お前のその恐怖におびえた顔見たかったぜ。)

「シェリー。お前に人殺しはできないだろう。」

まだ、外の世界を知らない赤ん坊を殺しただけで、あんなにも自分を責め続けたおまえがなあ。」

「!!!」

「殺せないだろ。昔の男を。」

まあ、いい。先にこいつらの死を見とどけさせてやろう。」

ジンの表標的がコナンと服部に代わった。

そして、パン!!!パン!!!パン!!!

銃声なる。

「灰原ああああ!!!」

灰原はコナンたちを庇うようにジンの前に立った。

灰原が撃たれた・・・

だがまだ息はしている。

死んだのは・・・

ジンだった。

灰原が撃たれる直前、横から弾が飛んできた。

それがジンの身体に撃ち込まれ

最後の力で銃弾を放った。それがコナン達を庇った灰原にあたった。

ジンを撃ったのは、ベルモットだった。

「クールガイ、早くシェリーを連れて逃げなさい。間に合わないわよ。」

だが、コナンは腕を、服部は足を撃たれて灰原を抱えて逃げることは出来ない。

そんな時、何者かが現れた。

「その少女は俺が運ぶ。お前達は自分で行けるな？」

赤井秀一だった。

コナンがキャンティとコルンを目で探しているのに赤井が気づく。

「あいつらはさっき見かけたとき死んでいた。自決だ。」

俺が確認したから間違いない。

他の組織の奴らも死亡、またはFBIのもとにいる。

心配はない。とりあえず、出るぞ」

そう言って4人は外へ出た。

組織 V S 探偵たち 2 (後書き)

少しは前回よりも読みやすくなりましたかね？

組織つぶれてよかった・・・

まあ、あっさりすぎた気もしますが・・・

そこは気にしないでください!!

組織VS探偵たち3

コナン達は組織との戦いを終え、FBIの車で近くの病院に向かっている。

コナンは腕を、服部は足を撃たれてはいるが幸い自分達で動くことはできる。

ただ、灰原はジンに死ぬ間際に腹部を一発撃たれ、服から血が染み出している。

急がなければ、間に合わない。

(灰原、もう少しだ・・・死ぬなよ・・・)

灰原が手術室に入って3時間。まだ終わらない。

手術室の前にはコナン、服部、ジョディがいる。

そこへ連絡を受けた博士が走ってやってきた。

「新一、哀君は・・・哀君は大丈夫なのか？」

コナンはなにとも言えなかった。代わりに服部が答える。

「まだ、どうなるかは分からん・・・」

けど、こんなところで俺らがウジウジしとったってどーもならん。

俺らはあのねーちゃんが助かるのを信じて待つだけや。」

そういうと、服部は博士の手にあるものに気づいた。

「じーさん。それなんや?」

「これが・・・これは哀くんからの手紙じゃ。出発する前に入れておいたんじゃない?」

いつも車の鍵をしまつてあるところに入っておつた。

新一のぶんもあるぞ。

哀君・・・手紙のなかにまでわしの身体を気遣うことばかり書いておつて。」

博士は涙を目に浮かべつつ言った。

その博士への手紙の中にはたくさんの感謝の言葉と

博士には長生きしてほしいという言葉が書かれていた。

コナンも灰原からの手紙を開いた。

「工藤君へ」

工藤君がこの手紙を読んでいるころは私はもうこの世にいないのね……

でも、私は楽しかったわ。博士がいて、工藤君や吉田さんたちもいてくれて。

私にはもつたないくらいだった。

そして、あなたは毒薬を作っていた私を責めるどころか

私を守る、と言ってくれた。

ホントは生きて、罪を償わなければいけなかったけど

ごめんなさい。償う前に死んでしまっ

それと、完璧な解毒剤ができたから飲んで、彼女のところに帰ってあげて。

今まで本当にごめんなさい。

あなたの時間を奪ったこと、組織とのかに関わらせてしまったこと、

どれだけ謝っても許されないけど

本当にごめんなさい。

そして、今まで守ってくれてありがとう。

解毒剤は私の机の一番上の引き出しにはいつているわ。

これで身体も縮むことはないはずよ。

元の身体に戻ったら蘭さんを幸せにしてあげて。

じゃあね。探偵さん

灰原哀」

コナンはこの手紙を読んで涙がでた。

すると、手術中のランプが消え、医者が出てきた。

「手術は無事終わりました。命に別状はありません。

しばらく入院をして、安静にしているとまた今まで通り暮らせるでしょう。」

その言葉を聞いた俺達は安心して、涙を拭き、いすに腰掛けた。

「よかったなあ。工藤、じーさん!!」

あのねーちゃん助かって。ほんなら俺、安心したら腹減ってきたから

下の売店でなんか買ってくるわ。」

そう言って、服部は松葉杖をつきながら去って行った。

灰原の手術が終わり、コナンたちは灰原が目を覚ますのを待っていた。

しばらくして、灰原の目が開いた。

「博士！！灰原が目を覚ました！！」

「え……くどう……くん？博士？」

「大丈夫か、哀君。今先生を呼んでくるから、ちょっとまっとね。」

博士が部屋を出て行のを見送った後、コナンはハア、と息をついていすに座りなおした。

「大丈夫か？まだ痛むか？」

「ええ、まだ少しだけ……」

それにしても、まだ生きてるのね……しづといわね、私。」

「ああ、オメエはそう簡単には死なねーよ。まあ俺もただけだな。」

ジンに撃たれたオメエを赤井さんが車まで運んでくれたんだ。

俺も服部も撃たれて、灰原を抱えることは出来なかったし、助かったぜ。」

「そう・・・ちょっと待って。服部君も撃たれたって・・・」

この場にいない服部を灰原は心配したが、すぐにこの声を聞いて安心した。

「大丈夫や、ねーちゃん。俺は足撃たれただけや。ちょいと動きにくいけどな。」

ほれ、おにぎり買ってきたたで。工藤とじいさんのぶんも。」

はい、と笑顔でおにぎりを差し出す服部を見てコナンは聞いた。

「下の売店に行っただけにしては遅かったな。何かあったのか？」

すると服部が怒ったような顔になって

「何もなかったんや。何も・・・俺の好きな牛肉が入ったおにぎりがなかったから」

病院の外のコンビニに買いにいったんや。」

コナンたちは苦笑するしかなかった。

「それよりねーちゃん。身体なんともないんか？もう少しおとなしーしとかんとかなかなか治らへんで。」

コナンは思った。多分灰原も同じことを思っているだろう。

もう少しおとなしくしなければいけないのは服部、お前だろう・・・

と。

博士と医者が部屋に入ってきた。

検査の結果、今のところ問題はないということだ。

今日のこととこれからのことは明日話す、と決め、

博士は家に帰り、服部とコナンは自分達が入院している部屋へ戻り

それぞれ身体を休めた。

灰原哀の過去（前書き）

組織との戦いから一日後

灰原哀の過去

組織との戦いから一日たち、

灰原の病室には灰原、コナン、服部、博士、ジェームズ、ジヨディが集まっていた。

「哀ちゃん、もう身体は大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ。」

「それじゃあ、話をするとするか。」

まず、組織の生存についてだが、やつらはほとんどが自殺している。

組織のメンバーの一人一人がデータのようなものだからな。

やつらはそんなものを残すへまはしない。

ジンと呼ばれるやつはベルモットが撃った弾によって死んだ。

ウオツカの死亡も確認された。

ボスも頭を拳銃で撃ち自殺していた。

組織のメンバーだったベルモットはずいぶんと前にCIAの水無君と組んで

組織をつぶす作戦をひそかに立てていたらしい。

データはベルモットがコピーして今は我々の手元にある。

そして、そのベルモットは今FBIに保護されている。

彼女は以前に人を殺したことがある。いずれは警察のもとに行くことになるだろう。

では、今後のことだが、

FBIの一部の人間はしばらく日本に残ることにする。

まだ組織全員の死亡または逮捕が確認されたわけではないからな。

もしかしたら残党が残っているかもしれないな。」

コナン達はジエームズの話を黙って聞いていた。

そして灰原が口を開いた。

「私の処分はどうなるの？」

「哀ちゃんの処分はなしよ。あなたは直接、人を殺していたわけじゃないし」

それに、十分罪を償ったじゃない。

今回のことだって哀ちゃんがかばってコナンくんたちが助かつ

たわけでしょ？

哀ちゃんの助けなしでは組織をつぶすことは出来なかったかもしれないわ。」

「でも・・・直接じゃなかったとしても、多くの人を犠牲にしたのは事実。」

罪を償わないといけないわ。」

「じゃあ・・・哀チャンは亡くなった人たちの分まで精一杯生きて、幸せになる。」

こんな償い方でどうかしら。」

「そんなの、償いでもなんでもないじゃない。」

私は今でも幸せよ。私にはもったいないくらい。私にはこれ以上幸せになる権利はないの。」

そう言つて灰原は俯いた。

「ねーちゃん、アホか。幸せになるんに権利もクソもあるかいな。」

ねーちゃんは幸せにならなあかん。ねーちゃんのねーちゃんのぶんまで。

今が幸せやってゆつなら、もっともっと幸せにならなあかん。

これは権利やない。ねーちゃんの義務や。

みんな願つとる。あんたが幸せになるんを。

ここにおるFBIの人らも、じーさんも、俺も、工藤も。

ねーちゃんが幸せで笑ってくれたら俺らも幸せなんや。」

服部の言葉に灰原は涙をながした。

「私、もつと幸せになっていいの？」

「ああ」「当たり前やん」

コナンと服部は答えた。

「じゃあ、私達はそろそろ帰るから。もし何かあったら知らせてね。

それと、2人ともとの姿に戻ったらちゃんと連絡してね。

一回くらいは2人の本当の姿、この目で見てみたいし。

それじゃあ、またね。」

そう言つて、ジェームズとジョディは病室から出て行った。

2人に続いて博士も見送りしてくると言つて出て行った。

そして灰原とコナンと服部の三人になった病室は静まりかえつていたが

服部がその空気を壊した。

「なあ、ねーちゃんーつ聞いていいか。気いわるついたらすまんけど……」

あんどきジンつちゆうやつが言いよったこと……

あれどついうことや？赤ん坊がどつこのつもの……つて。」

灰原はなぜかコナンを一目見て、また下を向き、言った。

「私が組織にいたころ子供ができた。相手は……ジンよ。」

それを聞いてコナンと服部は目を見開いた。

灰原はそれに気づいているのか気づいていないのか分からないが、話を続ける。

「私はジンとの子なんて産むつもりはなかった。

産まれてきたつてどうせ私やおねーちゃんのように組織に入れられて

辛い思いをするだけ……

辛い思いをするのは私だけでいい……つて思った。

それに父親がジンだなんていやだった。

だけど、産みたいつていう気持ちも少しはあったの。

子供がそばにいればいつもの地下室でも孤独感はなくなるんじゃないかって。

どうするか迷っているとき私は倒れたの。それは精神的ストレスだった。

そして倒れた衝撃で子供も死んだ。

産まないつもりでいたのに、実際に死んでしまっただけからは

寂しくて、悲しくて、自分を責めた。

どうして守ってあげられなかったんだろって……

それと同時に私が殺した……っていう事実には耐えられなくなっ
って……

……それから何日か後に次はおねーちゃんが……」

「灰原、その先はもう言うな。言わなくていい。」

コナンは灰原の肩をつかんで灰原の言葉を遮った。これ以上、灰原に話をさせたくなかった。

ふと、病室の扉の方へ目をやるとそこには博士が涙を流して立っていた。

「哀君……なんで一人で抱え込んでおったのじゃ……」

「言いたくなかったんやろ。すまん、ねーちゃん。こんなこと聞いてもて。」

「なあ、灰原。俺はこれからもずっとお前を守るから。」

もう一人で抱え込むなよ。言いたくないことは言わなくていい。

けど、俺に出来ることがあるならちゃんと協力するから。

もう、我慢だけはするなよ。」

灰原は顔を上げて

「ありがとう。でも、もう大丈夫だから。」

そう言って優しく微笑んだ。その笑顔にコナンも灰原に微笑んだ。

(工藤……お前……)

服部のなかでひとつの疑問が生まれた。

灰原哀の過去（後書き）

服部の疑問とはなんでしょうか・・・

コナンの気持ち（前書き）

組織との戦いから一日後～二日後

コナンの気持ち

灰原の気が落ち着いたのでコナン・服部・博士は灰原の病室を出て行った。

博士は「それじゃあ、明日も来るから大人しくしてるんじゃよ。」
と言って自宅へ帰って行った。

コナンと服部は病院のベンチに座り、話している。

「あのねーちゃん、いろいろなもん抱えとつたんやなあ・・・」

あれは、誰かが守ってやらんと危ないで。ほんまに。」

「ああ。あいつは今までずっとがけっぷちを歩いてきたようなものだからな。」

くっそ・・・ジンは・・・あの組織はいつまで灰原を苦しめるつもりなんだよー!!」

コナンは怒りを抑えきれず、静まりかえった病院で叫ぶ。

「なあ、工藤。お前いつまであのねーちゃん守るつもりなんや?」

「はあ?いつまでって・・・そんなもんに期限はねーよ。」

それに、俺は今まであいつを守るって言い続けてきた。

だけど、実際は俺が灰原に守られてたんだよ。

組織との戦いの時、あいつは俺達をかばって撃たれた。

解毒剤だって、俺が蘭のもとに帰れるように作ってくれた。

いつだって守られてるのは俺のほうだ。だから、今度こそはあいつを……

灰原を悲しい過去から守ってやんねーといけなんだよ。」

「じゃあ、一生守っていくつもりなんか？」

「これからのあいつを守れるのは灰原の過去を知っていて、同じ境遇にある俺しかいねーよ。」

これまでは守れてなかったけどな。

今まで守られてきたぶん、俺がしっかり守る。」

「ああ、言い切ったで。お前のその自信はどっからくるんや？

大体、一生守るって、毛利んとこのねーちゃんはどつするんや。」

「蘭には……あ……」

「やっと気付いたか……さっきから工藤、あのねーちゃんのことしか頭になかったやろ。」

病室でもねーちゃんに『ずっと守る』とか言いよってからに……

今のお前は毛利のねーちゃんどっちこいねーちゃん、どっちを守りたいねん？」

「どっちを……って……」

「二股かける男は最低やで。」

（そんなこと俺だってわかってる……だけどどっちかを選ぶなんて……）

蘭は俺の帰りを待ってる。その姿をコナンの目でずっと見ていた。

でも、蘭には蘭を守ってくれるやつがたくさんいる。

灰原には……同じ体験をした俺しかいない。（

俺は……やっぱり、灰原を守らないと……」

「ちやうやろ？守らんとあかんやなくて、お前が守りたいんやろ？」

ずっとそばにいて支えてあげたいんやろ？

工藤、お前さっきのねーちゃんの話聞いて、嫉妬してたやろ？

あんとときの工藤の顔は怒りだけやなくて、悔しさもまじったように見えたからな。

お前が守りたい人は誰や？お前が好きなのは誰や？」

「……灰原。」

これは同情でもなんでもない。コナンの口は自然と動いた。

(俺の中でこんなにあいつの存在が大きくなってたなんて……)

いつからだろう。今回だけは服部に感謝だな。)

「よし！！よいゆうた。ほな、最後の決着つけにいこか。」

「は？もう組織との決着はついただろ？」

「ちやうちやう。ねーちゃんと決着つけんのや。」

あのねーちゃん、無駄に顔がいいからすぐ他の男に狙われんで。

子供の時からあんなにかわいい顔やったら元にもどつたら

どこからでも声かけられるんやろなあ。」

「クっ……」

「どつするん？告るんか、告らんのか。」

「……いや……今はまだできねーよ。蘭にも本当のこと話さな
きならねーし。」

「せやなー。まあ、工藤はそういうやつや。そういこととちゃんと

せな氣いすまんねんやる。」

「それより服部、オメエこそ和葉ちゃんとはどうなってんだよ。」

「和葉あ？和葉がどうかしたんか？」

(こいつ・・・まだ氣付いてなかったのか？)

人の気持ちは分かるくせに自分の気持ちはわかんねーのかよ！
！まあ、それは俺も一緒か・・・)

ハア・・・とため息をついた。

「どうしたんや、工藤？」

「いや・・・結局俺達は似たもの同士だな、と思ってよ。」

「似たもの同士い？？なんやそれ。わけわからん」

「まあ、気にするな。そろそろ戻ろつぜ。」

「せやな。まあ、明日は退院やし。今日は売店のツナマヨで我慢したるか。」

その後、2人は売店でおにぎりを買ひ、それぞれの病室に戻って最後の入院生活を過ごした。

翌日の朝

トントン！！

「灰原ーはいるぞー」

・・・返事がない。

(まだ寝てるのか?)

静かに灰原の病室のドアを開ける。

コナンの目に映ったのは少年探偵団の円谷光彦だった。

「あー！コナンくん！！」

シー、と人差し指を口の前に立て、小さな声でコナンの名前を呼んだ。

コナンも小さな声で光彦に尋ねた。

「どうしたんだ？こんな朝はやく・・・」

「今日は博士に連れられて歩美ちゃんと元太君とお見舞いに来たんですよ。」

心配で心配で・・・博士からさつき話を聞いて急いで来たんです。

歩美ちゃんと元太君は今、下の売店に行っています。

博士はコナンさんと服部さんの退院の準備を手伝ってくるとか
言っていましたけど・・・」

（準備くらい一人で出来るっつーの！！たく・・・子供じゃねー
んだから）

「それにしてもかわいいですねー灰原さん／＼／＼／

普段は大人びた綺麗な顔してますけど、寝ているときの顔は子
供っぽいですね。」

「はは・・・そうだな」

（確かにな・・・そういえば、光彦も灰原のこと好きなんだよな。

はあ・・・ライバルか。いくら実年齢が10歳くらい違ったと
しても光彦も男だからな・・・）

コナンと光彦が灰原の寝顔を見ていると

「あーーーーー！！コナン君と光彦君、だめだよ！！」

大きな声が病室に響いた。だが、幸い灰原は目を閉じたままだった。

歩美と元太と博士と・・・服部が入ってきた。

コナンの横で歩美が灰原を起こしている。

「哀ちゃん！！起きてー！！」

灰原が目をさました。

「ん……？吉田さん？？どうしたの？」

「今ね、コナン君と光彦君がね哀ちゃんの寝顔見ながらニヤニヤしてたんだよ。」

だから、2人が寝てる哀ちゃんの顔にマジックで落書きするんじゃないかと思って……」

（しねーよ、んなこと……）

すると上から

「へーニヤニヤねー！。何をたくらんどったんや？んー？ゆうてみ。坊主」

「なにもたくらんでないよ。平次にーちゃん。ははは……なあ、光彦……」

「ええ……ただ、灰原さんの寝顔がかわいくて見ていただけです。／／／／／」

その言葉を聞いて灰原はコナンだけをジト目で見た。

（はあ……なんで俺なんだよ）

「工藤、はよ告らんとほんまに他の男にとられてまうぞ。」

しかも、ライバルはめっちゃ身近におるやんけ。

あの光彦って坊主、めっちゃめっちゃねーちゃんのこと好きやっちゆうオーラだしてんで。」

この言葉はコナンにしか聞こえなかった。

「それより、コナンくんも平次おにーさんも哀ちゃんつれてどこ行つてたの？」

哀ちゃんが拳銃で撃たれて怪我するようなどこにつれて行かないですよ。」

私、すごく心配したんだから。」

「そうですね。僕も心配しました。」「俺もだぞ。」

コナンと服部は小学一年生に怒られた。

その光景を見て、灰原は笑っている。

「ありがとう。みんな。でも、あそこには私が行きたいって言って無理して連れて行ってくれたの。」

なんか、おもしろそうな建物だったから。

それに、2人はいろいろと私を守ってくれていたわ。

だからもう大丈夫よ。」

怒られていた2人は灰原のその優しさに感謝した。

「そうですね……でも、次は僕が命をかけて灰原さんを守りますから。」

「ふふつ。ありがとう。円谷くん。」

その笑顔と言葉に光彦は頬を赤らめた。

「そうですね。今度私になにかあったら円谷くんを守ってもらおうかしら。」

「お、おい……灰原……」

「なに？」

「あ……いや……なんでもねーよ。」

「そう」

コナンの腕が引つ張られ、耳打ちされた。

「小学生相手になにムキになってんねん。嫉妬は男の醜いことの本スト3にはいんで。」

（誰が考えたんだよ。そんな順位……）

服部だって和葉ちゃんが他の男の腕に抱きついただけでずいぶん嫉妬してたじゃねーか。）

そして、しばらくして

明日またお見舞いにくると言って、コナンと服部は退院し、

博士と少年探偵団たちと一緒に車で帰って行った。

コナンの正体(前書き)

組織との戦いから二日後

コナンの正体

「蘭ねーちゃんただいまー」

毛利探偵事務所に勢いよく扉を開けてコナンと服部が帰ってきた。

「ねーちゃんお邪魔すんでー」

蘭は一週間ほど空手の合宿、小五郎は町内会の旅行に行っていたので

コナン達が怪我をして入院していたことを蘭が知ったのは

2人が帰ってくる少し前だった。

「ちょっと、コナンくん！服部くん！どこ行ってたのよ？」

なんで銃で撃たれるようなところ行ったのよ。しかも哀ちゃんまで連れて。」

蘭が玄関まで走ってきた。

「あ……いや……」

「すまんねー、ねーちゃん。なんか変わった建物があったから

入りたくなっただんや。俺は探偵やからそっいうとこに興味あつてなー

そしたら、この坊主もあの灰原っちゅうねーちゃんも行くとか

ゆーから

仕方なく連れてったんや。その結果がこうなったちゅうわけ。」

「そう……。まあ、みんな助かっただけでもよかった。」

お茶入れるから、ソファーにでも座って待ってて。」

まだ、少し納得がいかないと言うような顔で、蘭はキッチンに行った。

「工藤、お前いつゆーんや？ほんとのこと……」

もう、組織もつぶれたし、ゆーてええんやないか？」

「ああ、とりあえずは蘭だけに話す。」

誰にも言わないように言ってからな。

まだ、組織の残党が残ってるかもしれねーから。」

「そか。ほんなら、工藤がねーちゃんに話すときは俺は出て行ってやるから」

ちゃんと話すんやで。あのちっこいねーちゃんのことも。」

「ああ、わかってる。ちゃんと話すよ。」

「ほな、お茶もろたら俺行くから。」

「え・・・今!？」

「早いほうがええやろ。はよせな毛利のおっちゃんも帰ってくるやろし。」

そついい終わると蘭がお茶をもってきた。

「はい、お茶。ところで哀ちゃんは大丈夫なの？まだ入院してるんでしょ？」

「あーうん。今はまだリハビリしてるけど、少しは歩けるようにもなったし」

あと三週間くらいで退院できるって先生も言ってたから大丈夫だよ。」

「よっしゃ。ほな俺出かけてくるわ。」

服部は急いでお茶を飲み干した。

「また、どこか行くの？」

「ちょっとな。和葉にも電話せなあかんし。ねーちゃんお茶ごちそうさん。」

「もう危ないところには行かないでよ？」

「分かってるで。じゃあ行ってくるわ。」

「行ってらっしゃい。」

服部の行動の早さにコナンは呆れたが、せっかく服部が気をつかって話す時間をくれたのだから話さなければ・・・と、前に出されたお茶を一口飲んで

落ち着いた声で話始めた。

「蘭ねーちゃん・・・ちょっと今回のことで大事な話があるんだ。」

「・・・なに？」

いつになく真剣なコナンの表情に蘭は少しとまどった。

「僕・・・いや俺の正体のことだが・・・これから言っことはまだ誰にも言わないでほしい。」

「う・・・うん。」

(どうしたんだろっ急に・・・コナンくんの正体?)

「俺は、工藤新一だ。」

「!?!」

(・・・どういうこと?)

「蘭と2人でトロピカルランドへ行った日、蘭と別れてから

俺はジェットコースターに乗ってたやつらの後を追った。

それで、やつらが何かの取引をしているところを俺は目撃してしまった。

その光景を見ると、俺は後ろから殴られ、気を失ってしまった。

そのときにある毒薬を飲まされたんだ。」

コナンはフウと一息ついた。

蘭は黙ってコナンの話を聞いている。

「そして、俺の身体は子供の姿になってしまった。その姿が今の俺だ。」

「・・・じゃあ、コナンくんは新一って事？」

「ああ。今まで黙ってて悪かったな。やつらは組織の秘密を知った者や計画を邪魔した者は

ためらいもなく殺す・・・そして、それに関わった人まで。

だから、俺は今まで自分の本当の姿を隠して過ごしてきた。」

「でも、私に話したってことはもう大丈夫なの？」

「多分な。さつき服部は変わった建物があって入っていったって言ったけど

本当は組織のやつらと決着をつけてきたんだ。FBIやCIAの人達と協力して。

それで、組織の大半は死亡し、残りのやつらも今は警察にいる。

「

でも、多分って・・・」

「それは、他に逃げたやつがいるかもしれないから・・・

今ジョディ先生たちが調べてくれてる。」

「そっか・・・じゃあまだ安心できないね。」

ねえ、私は今コナンさんの正体を知ったけど、服部くんやジョディ先生は前から知ってたの？」

「ジョディ先生はつい最近知った。服部にはだいぶ前にばれちゃまったよ。」

俺の正体を知っているのは服部、FBIの一部の人、博士、俺の両親、本堂瑛祐、

それと、灰原哀だ。」

「瑛祐くと哀ちゃんも知ってるの？」

「本堂にはあいつがアメリカに行く前に話した。最初から疑ってたみたいだが・・・」

灰原は・・・」

コナンはそこで躊躇った。本当のことを話していいのだろうか。

話したら、蘭は灰原のことを責めるんじゃないか・・・

「新一・・・どうしたの？」

(・・・やっぱ、言わねーとな。)

「あいつは・・・組織のメンバーだった。そして、俺が飲まされた薬を作っていたやつだ。」

蘭は驚いているが、コナンは話を続ける。

「だが、アイツを責めないでくれ。アイツは・・・灰原は悪くないんだ。」

灰原は幼いときに組織に入れられた。その組織には灰原の両親も姉も入っていた。

両親は灰原が子供のときに亡くなっている。

おねーさんは、組織によって殺された。俺達の前で。」

「！！俺達の前でって・・・どういうこと？それに哀ちゃんが子供の時って・・・」

「灰原のおねーさんは蘭も知ってる。前にこの探偵事務所に依頼してきた広田雅美さん。」

あの10億円強奪事件の犯人とされていた人だ。

広田雅美の本名は宮野明美。そして灰原の本名は宮野志保。

明美さんはあのおとき自殺したことになったが、実際は殺されていたんだ。

組織によってな。

それを聞いた宮野志保は組織を裏切った。

組織は裏切ったやつを生かしておかない。

だが、宮野は殺されずに、部屋に監禁された。

あいつはこれ以上組織のいいように使われたくない・・・

そこで、隠しもっていた毒薬、俺が飲まされた薬と同じものを飲んだ。

自殺目的で。

その薬を飲んだ結果、アイツは死なず、俺と同じように幼児化して組織から逃げたんだ。」

蘭はまだ整理できていなかった。当たり前だ・・・

身近な人たちの間で、自分達が知らないところで、そんなことが起こっていたなんて。

普通信じられないだろう。

ただ、コナンの姿をした新一はこれまでに見たことがないほど真剣な顔で話している。

信じてくれ、とでも言いたそうな顔で。

「私、まだよく分からないことも信じられないこともたくさんあるけど」

・・・哀ちゃんも、新一も大変だったんだね。

そんな哀ちゃんをずっと新一が支えてあげてたんだ。」

「いや、支えられてたかはわかんねーけど・・・少なくとも俺はあいつに助けられてたよ。」

組織との戦いの時も灰原が俺と服部を庇って撃たれたんだ。

女に助けられるってのは男として少し恥ずかしいけどな。俺はあいつに感謝してるよ。」

「哀ちゃんは、ほんとは何歳なの？」

いきなりの質問にコナンは戸惑った。

「え・・・えーと、18とか言ってたかな。俺たちのいつこ上だ。」

「そっかあ、それなら新一が哀ちゃんを好きになってもおかしくないな」

いよね。

新一がロリコンなんて情報入ってないし。」

「なっ……なんで俺が灰原のこと好きって知ってんだよ!」

「その言い方はやっぱり哀ちゃんが好きなんだね……」

蘭はコナンに少し寂しそうな顔を向けた。

「あ……いや、蘭……わりい……待っててくれ、なんて言うておいて。」

でも、それが俺の今の本当の気持ちだ。

アイツは俺が守らなきゃいけないんだ。

俺が守ってやんねーとあいつ自分のことを犠牲にしてまで人を助けるようなやつだから……」

「わかってるよ。哀ちゃんの話は新一が守ってあげて。」

それにね、コナンくんが新一って聞いたときから私の新一への想いは届かないってわかってたの。」

コナンは訳が分からないといった顔をしている。

「前に、博士と園子と少年探偵団のみんなで遊びに出かけたでしょ？」

そのとき、コナンくんは哀ちゃんのことばかり見てた。

そしたら、園子もそれに気づいてたみたいで

『あのガキんちょはあのこが好きみたいね。』

って・・・

それからしばらく2人のこと見てただけど何回も何回も

新一は哀ちゃんを見てたんだよ。

新一、気づいてなかったでしょ。自分が哀ちゃんばかり見てるって。

あれは恋をしているひとの目だったよ。」

それを聞いて、コナンは赤くなった。

「蘭、ほんとにごめんな。」

「もー！そんな赤い顔して言われたって、心から謝ってるように聞こえないよ。」

(俺、今顔赤いのか!?)

「じゃあ、これだけは聞かせて。新一は私のことどう思ってた?」

「俺は蘭のこと、本当に好きだった。」

コナンは蘭の目をみて正直に言った。

「私も！！新一のことは大好きだった！！」

これからは幼馴染として、親友として大好き。」

蘭は満円の笑顔で気持ちを言った。

話が終わりタイミングよく服部が帰ってきた。

「もう話終わったか？」

「服部くん！！」

「おめえ、聞いてたどろ。」

「はは、まあエエやないか。ずっと外で待たされて暇やったしな」

「オメエが勝手に出て行っただろが。」

「それより、工藤。エエ話と悪い話があるんやけどどっち先に聞きたい？」

「あ？悪い話って・・・！！もしかしてやつらか？」

「ちゃう、ちゃう。ほんなら、急がんとまずいことになるから悪い話から話す。」

さっき、俺がココに入る前に病院から電話があっただけ

あのねーちゃんがおらんくなっただけ。」

「「!!」」

「ねーちゃんのベッドには《すぐ戻ります》って書かれた紙があったらしいけど

あの身体で一人で歩くのは危険や。はよ見つけんと・・・」

「ああ。でも、灰原が行った場所は分かる。多分あそこだ。」

「あそこってどこやねん。」

「灰原のおねーさんが亡くなったところだよ。あの病院から歩いていける距離だからな。」

蘭は博士に電話して灰原の病院へ行ってくれ。服部、行くぞ。」

「分かった。」

コナンと服部はタクシーで灰原のもとへと急いだ。

カップル誕生

今、コナンの腕の中には灰原がいる。

数分前・・・

コナンは服部から灰原が病院を抜け出したことを聞いた。

灰原がどこへ行ったのか、思い当たるところが一つあった。

灰原の姉が亡くなった、あそこだろう。

コナンと服部はタクシーに乗り、

灰原がいると予想される場所へ向かった。

コナンの予想通り、灰原はそこにいた。

病院の入院着ではなく、いつもの灰原らしい服を着て座りこんでいる。

「灰原!!」

「!!!工藤くん・・・服部くん・・・」

コナンは走って灰原のもとへ走ってくる。

服部は松葉杖をつきながらゆっくりと・・・

「なんで病院を抜け出したんだよ。」

「なんでもいいでしょ。」

灰原はうつむいて言った。

その言い方が気にいらなくてコナンは灰原の顔を自分に向けた。

そこには涙を流している灰原の顔があった。

「おねーちゃんに、報告してたのよ。組織はつぶれたって・・・」

「灰原・・・」

「早く報告してあげたかったのよ。そうしないとおねーちゃんも安心できないでしょ。」

「こんなことするなんて私らしくないけど・・・。」

グイっ・・・

「!?!」

コナンは灰原の腕をひき、灰原を抱きしめた。

撃たれた腕が痛むが、今はそんなこと気にならない。

「ちよつと、工藤君!?!」

「灰原のことは俺がずっと守るから・・・だから、俺の傍から離れ

るな。」

「工藤くん、その気持ちはうれしいけどずっとは無理よ。」

もう、組織は潰れたんだし、次にあなたが守らなきゃいけないのは蘭さんでしょ？

私は大丈夫よ。あなたは蘭さんの傍にいてあげて。」

「無理だ。俺はもうお前から離れられねーよ。」

お前が好きなんだ。俺がオメエの傍にずっといたいんだよ。」

そう言うと灰原の身体がコナンの腕から離れた。

「あなた、何言ってるの？」

やめて。こんなところで冗談言うのは。あなたの好きな人は蘭さんでしょ？」

「冗談じゃねーよ。俺が・・・俺が好きなのは灰原だよ!!」

蘭にもすべて話した。俺のことも組織のこともおめえのことも・

俺が灰原のことを好きだったことも!!」

「・・・なんで!!あなたはもう元の体に戻るのよ!？」

戻ってから蘭さんに言うんじゃないの?自分の気持ちを。」

「蘭は俺が正体をバラしたときから工藤新一は自分じゃなく他の女が好きだって気づいてたらしいぜ。」

しかも、その他の女つてのが灰原だつてことも……」

「それじゃあ、蘭さんは……」

「蘭も、俺に灰原を守るのは俺しかいないって言った。」

それにお互い、今までの気持ちを正直に話した。

そして、これからは幼馴染として、親友として好きだ、つてな。

だから、オメエは何も気にしなくていいんだ。

灰原の気持ち聞かせてくれ。まあ、俺は振られてもお前を守るつもりだけだ」

「……蘭さん」

「だから蘭のことはお前が気にすることねーんだって……」

「そつよ、哀ちゃん。」

「えっ!?!」

コナンが振り向いた先には蘭が立っていた。

「蘭……なんでここに……」

「服部君に呼ばれたのよ。ここに来てって。」

服部は隠れて今までの話を聞いていた。

そして、蘭にここに来るように電話したらしい。

蘭が哀を引っ張ってコナンには話が聞こえないところまで行った。

「哀ちゃん。私、知ってるのよ。哀ちゃんがいつも新一を見てたこと。」

もう私のことは気にしないで、素直になっていいの。」

「でも……」

「私ね、振られたの。でも、悲しくなかった。」

それは、新一が好きになったのが哀ちゃんだったから。

新一が好きになったのが私でもなく哀ちゃんでもなくって

ぜんぜん知らない女の人だったら嫌だったかもしれないけど、

優しくて、かわいくて新一のことを誰よりも考えてる哀ちゃんなら

2人を応援したいって思うの。」

「私、優しくもかわいくもないわよ。」

「でも、新一のことを誰よりも考えてるってのは否定しないんだ。ほら、素直になって！」

「……でも……」

「でも、じゃないの。哀ちゃんが素直にならないと新一がかわいそうだよ。」

哀ちゃんも新一が好きなら好きって言わないと。」

「……いいの？」

「いいの！！私は新一よりも素敵な人見つけるから！！」

灰原は蘭にドンっと背中を押され、コナンのもとへ行った。

そして、

「私……これからも工藤くんの傍にいていい？」

と疑問形で告白の返事をした。

「当たり前だろ！！」

コナンは笑顔を灰原に向けた。

その笑顔を見て、灰原もクスッと笑った。

その笑顔にコナンが見惚れていると

「哀ちゃん、かーわーいー」

と言って蘭が灰原に抱きついていてる。

「おい！おい・・・」

「何？新一つたら私が哀ちゃんと仲がいいのに嫉妬してるの？」

「くっ・・・」

「凶星ね。いいじゃない。哀ちゃんは新一のものなんだから

こんなこともうできないでしょ？

じゃあ、新一と哀ちゃんは幸せになってね！私も素敵なお人見つけられないと！...」

「蘭、ありがとな。」「蘭さん、ありがとう。」

「お礼なんていらさないの。哀ちゃんを幸せにしてあげてよー新一。

哀ちゃんを泣かせたら、私が哀ちゃんを横取りしちゃうから。」

「それだけはさせねーな。」

「ふふっ。じゃあ、そろそろ病院に戻ろっか。病院の人たちも心配してるから。」

「ええ。」

「あああ、お前らうまくいったんか。それなら、もうエエ話の方は聞かんでええか。」

隠れていた服部がいつの間にかコナンたちの傍にいた。

「そういえば、お前なんか言ってたな。なんだ？いい話って・・・」

「そういえば？そういえばちゅーたか、今！！」

自分らがうまくいったからってどーでもいいんか！！」

「わりい、わりい。で、なんだ？」

「まあ、とりあえず帰ろーや。話は病院についた後や。」

4人はゆっくりと歩いて病院に戻った。

病院に戻ったとき、博士は灰原の病室で泣いていた。

そして、灰原の姿を見て、さらに声を上げて泣いた。

それから、灰原は病院の人たちにも謝って、おとなしくベッドに横になった。

オヤスミのKISS

「んで？いい話ってなんだ？」

灰原の失踪事件が解決し、落ち着いたところで本題にはいった。

病室にはコナン、灰原、服部、蘭、博士がいる。

「ああ。それがな、さつきFBIの人から連絡あつたんや。

工藤の携帯に繋がらへんかったから俺にとって・・・」

「あ・・・電源切れてる・・・それで？」

「もう、お前たちの正体話してええよつて。まあ、お前らに深く関わった人だけな。」

組織は完全に潰れたつて。海外のほうにおつたやつらも全員つかまっとるらしいで。」

「そつか、やつとだな。」

コナンはついに本当のことを言うときが来た、と少し不安そうだ。

「その前に・・・工藤もねーちゃんもいつもどるんや？」

みんなに本当のこと言ってから戻るか、戻ってからほんとの「
」と言つか。」

「そうだなあ・・・どうする？灰原？」

「私は、吉田さんたちにお礼を言いたいから、本当のことを言ってみるわ。」

「そうだ！それなら、みんなを集めて、コナンさんと哀ちゃんの正体話す。」

それから元の姿に戻ってみんなにお披露目っていうのはどう？」

「ええやないか、それ。そしたら話すんも一回でええしな。」

よし！！決定。それでいこーや。」

「おい！勝手にきめんなよ！！」

だが、この声は服部には聞こえてない。

蘭と博士に「場所はじーさんちでええか？」だとか

「いつにする？」とか聞いている。

コナンと灰原はその様子を呆れ顔で眺めている。

「あなたのお友達、あなたよりもうれしそうじゃない？」

「はは・・・そうだな。」

それより、灰原。オメエ、元に戻ったらどうすんだ？」

「まだ、はつきり決めたわけじゃないけどどこかに家を借りて、仕事するつもりよ。」

「え！？灰原、引越すのか？」

「ええ。これ以上博士のところでお世話になるわけにはいかないから。」

そこへさつきまで盛り上がっていた3人がやってきた。

「哀くん、まだわしの家に来てくれていいんじゃないぞ。それにまた、新一たちと学校に行けばよかるう。」

「そつだよ。哀ちゃんも一緒に学校いこ！新一もそのほうがうれしいよね！？」

3人はコナンと哀の話を聞いていたらしい。

「ああ。灰原も一緒にいこうぜ。高校は楽しいぞ。」

「博士がそう言うってくれるなら・・・」

・・・わかつたわ。高校のこととも少し考えてみる。じゃあ、博士。またしばらくお世話になるわね。」

「もちろんじゃとも。哀くんがいなくなったらわしも困るしのお。」

ふふつと灰原が笑った。コナンはその笑顔にまた、見惚れた。

(俺、この笑顔によえーんだよな。)

「工藤がねーちゃん的笑顔に見惚れてるときに悪いけど・・・場所はじーさんちでええか？」

コナンは服部を睨む。

(いつも一言多いんだよ！！見惚れてたのは事実だけど・・・)

場所、日時、誰をよぶのかが決まった。

そのことを確認してから服部が時計に目をやり、そろそろ帰るか、と言った。

そして4人は病室を去った。

エレベーターが来るのを待っているとき。

「わりい。ちよつと先に行ってくれ。すぐ戻るからよ。」

「どうしたの？新一？」

コナンは走って行ってしまったので、蘭の声はコナンには聞こえなかった。

「ねーちゃん、工藤はあのちっこいねーちゃんにオヤスミのキッスくしに行ったんやで、多分。」

「あーそういうことか・・・ふふ」

蘭は笑っているが、博士は服部の言うことが理解できなかった。

「あーそうや、じーさん。あんたのかわいーかわいいー娘さんの唇は工藤に盗まれてしまうぞ。」

あの2人は今は恋人どおしや。」

「そんな・・・でも、新一には蘭くんがおるじゃろ。」

「新一は哀ちゃんが好きなのだ。哀ちゃんも新一が好き。」

そんな2人の邪魔はできないよ。私は2人が幸せならいいの。」

「ねーちゃんはそういうけど少しは邪魔させてもらおか。」

「そうだね。」

3人ともコナンが行ったところに向かう。

そのころ2人は・・・

「灰原!!！」

「・・・帰ったんじゃないの？何か忘れ物？」

「ああ、ちよつとな」

コナンの顔が灰原の顔に近づく・・・

「ちよつと・・・くど・・・」

灰原の唇がコナンの唇によって塞がれた。

2人の唇があたるほどの軽いキスだったが唇を離れたあとの2人の顔は真っ赤だった。

「おーおー工藤。お前以外に手えはやいんやな。」

「いいもの見せてもらっちゃった!」

「!!なんでお前からここに・・・」

「ちよつと邪魔させてもらおうと思ってな。」

服部と蘭はコナンを冷やかすのを楽しんでいる。

その2人とは逆に怒りを抑えきれない者もいた。

「新一・・・わしの娘になんてことを・・・いくら新一でも哀くんはやらんぞ。」

「博士・・・工藤くんが私をもらってくれたんじゃなくて、私が工藤くんをもらったのよ。」

灰原は普通に言っているが、コナンはまた顔が赤くなった。

「そ・・・そうか。なら、仕方がないのお。」

「なんや、じーさん。このねーちゃんには弱いんやなあ。」

じゃあ、工藤ほんまに帰んで。別に今からいちゃいちゃせんでも

ねーちゃんが退院してからもっといちゃいちゃできるやろ。今日はもう我慢しー。」

「わーってるよ／＼／」

「哀ちゃんもこの狼さんには気をつけてね。もう、2人が元に戻ったら大丈夫なのかなあ。」

そっついながら今度は本当に帰っていった。

哀と有希子（前書き）

組織との戦いから三週間後

哀と有希子

今日は灰原の退院の日。

あれから、コナンは学校帰りに毎日お見舞いに行っていた。

歩美たちが一緒のときもあった。

服部は「和葉が帰ってこい！つてうるさいねん」と言っただ阪に帰った。

今日もコナンは灰原の病室に来た。ある女性を連れて。

「あーいちゃん 久しぶりー」

「工藤君のお母さん!？」

「また、哀ちゃん綺麗になったわねー。新ちゃん?」

「うるせーよ。／＼／＼／」

「ふふっ新ちゃん照れてる。そんなことよりもう身体は大丈夫?」

「はい、もう大丈夫です。」

「じゃあ、着替えて行くかうか。」

「行ってくてどこに・・・」

「哀ちゃんの服を買いに行くのよ。哀ちゃんが元に戻ったとき服がないと困るでしょ?」

「だからって何で母さんが・・・」

「博士に頼まれたのよ。若い女性が着る服はわからないから、ってなぜか《若い》という単語を強調して言う有希子。

「すみません・・・わざわざ。」

「ぜんぜんいいのよ。私だって新しい服欲しかったし。」

それに女の子の服を選ぶのって私の夢だったのよねー。」

「男で悪かったなあ。」

「ふふつ。じゃあ、今日は有希子さんに選んでもらおうかしら。」

「しらねーぞ。母さんがどんな服選んでも。」

(確かに・・・フリルのスカートとかを有希子さんが選んだら・・・)

「やったあ!!哀ちゃんに似合うの選んであげる。」

それじゃあ、私と新ちゃんは退院の手続きしてくるから着替えて待っててね。」

あれからコナンたちは有希子に連れられて米花百貨店に来ている。

「哀ちゃん、これなんかどう？」

そうやって差し出したのはレース生地のピンクのミニスカート。

「そういうのは、私には・・・似合わないと思います・・・」

「えー似合うと思うけどなー。じゃあ、これは？」

次に出てきたのは黄色の短パン。

(やっぱり、有希子さんの選ぶものは派手なものが多いわね・・・)

灰原は自分の言ったことに後悔した。

「だから言っただろ？」

と、コナンは小さな声で灰原に言う。

「なあ、母さん。あんま灰原をいじめんなよ。灰原はもっとシンプルなのがいいんだよ。」

「そうなの？それならこんなのがいいんじゃない？」

有希子が持っているのは白のワンピース。

「灰原、これだったらオメエもいけんじゃねーか？」

「そうね・・・これだったら。有希子さん、これお願いします。」

「OK!!」

それから何着か服を選んで百貨店を出た。

博士の家に着くと博士と蘭が迎えた。

「哀ちゃん、退院おめでとう!!」

「ありがとう。蘭さん。」

「哀くん、お帰り。お気に入りの服は買ったかのお？」

「ええ。有希子さんに選んでもらったわ。」

「へー早く見たいな。哀ちゃんの元の姿

　　そうだ!!私、哀ちゃんの退院のお祝いでたくさん料理作ったの!!食べてくれる？」

「ちょうどおながすいてきた頃だしただこっかしら。」

「「「いただきまーす!!」「」」

「蘭さんこれおいしいわよ。」

「へへ、ありがとう。」

「なんで、料理だけは出来ない英里ちゃんと、不器用な小五郎ちゃんの子がこんなに料理が上手なのかしらね。」

「はは・・・確かに」

「でも、哀ちゃんの料理もおいしいんでしょ？新一？」

「まだ、あんまり灰原の料理食ったことねーからな・・・」

けど、上手いと思うぜ。博士の分はいつも作ってるらしいし。」

「蘭くんの料理もうまいが、哀くんの料理も絶品じゃぞ。」

「博士は余計なこと言わないでいいのよ。」

それと、博士。今日食べ過ぎたら明日のおかずはサラダだけに
なっちゃつわよ。」

「哀くん・・・それは・・・」

ははは・・・と、みんな苦笑いしていた。

早めの夕食を食べ終わり、蘭とコナンは探偵事務所に帰って行った。

コナンは「今日、博士んちに泊まっていいか？」と灰原に聞いたが、「ダメよ。探偵事務所での生活もあと少しなんだから、楽しんできなさい。」

と言って断られた。

2人が帰ったあと、有希子はまだ阿笠邸にいた。

「博士、私はここに泊まらせてもらっわね！」

「ああ、わしはかまわんよ。」

「じゃあ、空いてる部屋借りるから!!！」

「それじゃったら、ほね。哀くん。案内してやってくれんか。」

「ええ。」

灰原は有希子を案内する。

「ここ空いてるので好きに使ってください。」

「ありがとう。哀ちゃん!!！」

有希子は灰原に笑顔を向ける。

だが、灰原にはその笑顔が少しつらかった。

「あの、有希子さん、今ちょっと話いいですか？」

「いいけど、謝るのはなしよ。」

有希子は灰原が何を言いたいのかわかっているようだ。

「新ちゃんのことでしょう？話って・・・」

「はい。」

「新一から聞いているわ。哀ちゃんが新一を今の姿にしてしまったことに自分を責めてるって。」

「だけど、そんなことしなくていいの。あなたはなにも悪くない。」

「優作もね、あなたには感謝してたわよ。」

「新一の命を助けてくれた、って。それに新一はあなたに支えられてきたって言うってたわ。」

「そんな哀ちゃんに謝ってもらうことなんて一つもないの。」

「哀ちゃんには私達がお礼を言うことだけ。感謝してもしきれないわ。」

「そんな・・・感謝なんて・・・」

「本当のことよ。だいたい新一がああ姿になったのだからあの子が余計な事に首をつっこんだからでしょ？」

「もう、自分を責めないで。哀ちゃんは幸せになりなさい。」

「私、ほかの人にも言われたんです。自分をもう許してもっと幸せになっただけ。」

「だけど、自分を許したら自分が弱くなりそうで……」

「大丈夫よ。そうなくても、新一は哀ちゃんから離れないわよ。」

新一は哀ちゃんがずっと我慢して強がってたことも分かってると思う。

「そうゆう哀ちゃんだから新一はほっとけなかったのよ。そして、好きになったの。」

「だからもう謝ったりしないでね！哀ちゃん。」

「はい。」

灰原は笑顔に向けた。

「あと、哀ちゃん……その笑顔、新ちゃん以外の男の子に向けたらダメよ？女の私でもクラッなるから。」

「？」

「どっという意味か疑問に思いつつも灰原は部屋を出て行った。」

（新ちゃん、これから大変ね……）

コナンと灰原との別れ（前書き）

組織との戦いから三週間＋五日

コナンと灰原との別れ

灰原が退院して、3日が立った。

今日もコナンと灰原は少年探偵団の三人と一緒に帝丹小学校に向かっている。

だが、それも今日が最後。

「なあ、オメエら今日帰って時間あるか？」

「ええ。僕は大丈夫ですよ。」「歩美も大丈夫だよ！」

「俺も大丈夫だけど、なんだ？」

「今日、学校から帰ったら博士んちに寄ってほしいんだ。大事な話がある。」

「「「???」」」

キーンコーンカーンコーン キーンコーンカーンコーン

チャイムがなり、みんな一斉に席に座る。

ガラっ。

「はい。みんなおはよう。」

コナンたちの担任が教室に入ってきた。そして、早速話を始める。

「今日は、とつても悲しいお話があります。」

このクラスの江戸川コナンさんと灰原哀ちゃんが別の学校に行くことになりました。

2人とは今日でお別れです。」

その言葉に誰よりも早く反応したのは今まで少年探偵団として

一緒にたくさんのお話を解決してきた、吉田歩美だった。

「コナンくん、哀ちゃん本当なの？」

「ああ。」「ええ。」

「何で言ってくれなかったの？」

歩美の目には涙が浮かんでいる。

「さっき江戸川くんが言ってたでしょ？帰ってから大事な話があるって……」

帰ったらちゃんと話すわ。だから、泣かないで。」

灰原がそう言うと、歩美の表情はいつもの明るい顔になっていた。

学校がおわり、5人は阿笠邸へ向かっていた。

「博士、ただいま。」

「お帰り。哀くん。」

「「「こんにちわー、お邪魔します」「」」

「君たちも一緒じゃったのか。お帰り。」

「お帰り。みんな。クッキー焼いたんだけど味見してくれる?」

奥から蘭もやってきた。

「蘭おねーさん、今日学校なかったの?」

「うん!!今日は学校の創立記念日だから、学校はお休みだったの。」

「よ。それでね、博士の家に来てごちそう作ってみんなを待ってたの。」

「うな重もあるか?」

「残念だけど、うな重は作ってないの。」

「でも、たくさん作ったからいっぱい食べて帰ってね!」

「「「はい！」「」」

ピンポン

「博士、私ができるからいいわよ。」

「スマンな。哀くん」

「よっ！！ねーちゃん。身体はもうええんか？」

「ええ。すっかりよくなったわ。」

「あーいちゃん！久しぶり。」

「和葉さん、相変わらず元気ね。」

「そらそーや。こいつのとりえはこの元気だけやからなー」

「なんやて？平次ー。ほんならあなたのとりえは何があんの？」

「そんなんめっちゃあつて言いきれへんわ。」

服部と和葉は子供のように言い合いをしている。

「そんなところで喧嘩しないで早く入って。蘭さんが待ってるわよ。」

「せやな。ほんならお邪魔しまーす!!」

2人が入って、扉を閉めようとしたときスーツを着た男女がこつちに向かってくるのが見えた。

佐藤刑事と高木刑事だ。

「あ!!哀ちゃん。久しぶりね。」

「ええ。」

「今日ね。目暮警部と白鳥くんは来れなくなっただって言ってたわよ。事件があったらしくてね。」

私と高木くんは非番だったから来れたけど。」

「そう。じゃあ蘭さんに言うておくわ。」

「ありがとう。で、大事な話ってなに？」

「それは、みんなが来てからよ。入って。」

それからしばらくして毛利小五郎とその妻、妃英里、

鈴木財閥のお嬢様、鈴木園子が来た。

工藤夫妻は仕事があるから、と今は海外にいる。

「服部くん、全員そろったわよ。目暮警部と白鳥警部は来れないみたいだけど。」

「そうか。まあええ。そろそろ始めよか。工藤？」

「ああ。」

コナンが返事をするると服部が大きな声で言った。

「今から、この坊主から大事な話があるらしいで。みんな、ちゃんと聞いとときや。」

えらそうに言う服部に和葉は鋭い視線をぶつけたが

この場にいる人全員がコナンを見る。

それを確認して、コナンは話し始めた。

「今から僕が言うことは決してここにいる人以外には話さないでください。」

・・・まずは僕の正体から話します。

僕の正体は・・・

帰ってきた工藤新一

「今から僕が言うことは決してここにいる人以外には話さないでください。」

・・・まずは僕の正体から話します。

僕の正体は・・・

(コナンくん、どうしたんだろう。)

これは歩美だけではなく、この場に集まっている人が思っていることだ。

一部の人たちを除いて。

「・・・僕の正体は、工藤新一です。」

周りがざわざわとなる。

「コナンくん・・・どういうこと？だって、工藤くんは高校生のはずでしょ？」

佐藤刑事が代表してコナンに訊く。

「この話は事実です。僕はある薬で高校生から小学生に身体が幼児化したんです。」

僕が蘭とトロピカルランドへ遊びに行った日、蘭と別れたあと

僕はある組織の取引現場を目撃してしまいました。

その取引に夢中になっていた僕は後ろからのもう一人のやつらの気配に気づく前に

殴られ、気を失いました。そのときにある毒薬を飲まされ、僕が気づいた時には

この今の姿、江戸川コナンになっていたんです。」

ふう、と一息つく。

周りの人達は真剣に話を聞いている。

「僕に毒薬を飲ませたある組織というのは警察の方なら分かると思います。」

今はまだ、FBIがこの組織のことを世間に広まらないようにしていますが、

いつも黒の服を身にまとい、標的と決まった人間をためらいもなく殺すあの組織です。」

「!!その組織って、もしかして・・・」

この間、近くの建物で銃撃戦をして何名かがつかまったって聞いたわ。

私はよく知らないけど、つかまった人たちは全員黒い服だった

とか。」

「それなら、僕も聞きました。はっきりとは分かりませんが。」

「あの組織は世間では一部の人にしか知られていません。」

いえ・・・知られてはいけません。

組織の秘密を知った人はすぐにやつらの標的になり殺される。

だから、僕と灰原は今まで正体を隠し、過ごしてきた、というわけです。」

「でも、もう私達警察だけじゃなく、

蘭ちゃんや子供たちにまでこのことを話したってことはもう大丈夫なの？」

「はい。もう組織の大半は死亡しました。ほとんどが自殺です。」

残りのやつらは、FBIによって日本警察に送られたそうです。」

そこまで聞くと、今度は蘭の父親、小五郎が疑問を口にした。

「おい。さっき、お前はそこの灰原って子も正体を隠していたと言ったな？」

その子の正体はなんなんだ？」

「私の本名は宮野志保。元組織の一員よ。」

「え???嘘でしょ?哀ちゃん!!」

歩美と光彦と元太は嘘だと言って、と言う顔で灰原を見ている。

「私は組織である毒薬を作ってた。工藤くんが飲まされた薬よ。」

私にはおねーちゃんがいたの。私にとって唯一の・・・

そのおねーちゃんが組織に・・・」

灰原はまた泣き出してしまった。

(また、泣かせちゃまった・・・やっぱりおねーさんの話は辛いんだろ
うな。)

「灰原、俺が話す。」

泣き出して、続きを話せなくなった灰原にかわり、コナンが灰原のことをみんなに話した。

話を聞いた人たちは驚きや、悔しさ、寂しさなど、いろいろな気持ちが入り混じった顔をしている。

そんなとき、蘭の母親が灰原の前に座り込んだ。

「志保さん、だったわね。」

「はい。」

「あなたのことを責めるつもりはないけど、あなたがやっていたことは世間的には大きな犯罪よ。」

「はい、わかってます。」

「でも、私達も悪かったのかも知れないわ。」

いくら、知らなかったとはいえ、

組織は今まで何人も殺してきたわけでしょう？

それなのに、逮捕するどころか罪も償わせることが出来なかったなんて。

あなたみたいな子をずっと苦しめていた組織を今まで残しておいたことも。

「ごめんなさいね。それに辛いことまで話させて。」

「いえ……私は……。」

「ねえ、哀ちゃん、コナンくん……。」

横から歩美たちがやってきた。

「どづしたの？吉田さん」

「私達、ずっと友達だよな？」

「当たり前じゃない。あなた達は生まれて初めての私の友達よ。」

「ああ、俺もオメエらとはずっと友達だ。」

「僕もです。」「俺もだぞ！コナン！！灰原！！」

その様子を蘭が見て、笑っている。

「よかったわね。新一、哀ちゃん！

じゃあ、そろそろ新一と、哀ちゃん。行ってきたら？」

「ああ、そうだな。」

「じゃあ、吉田さん、円谷君、小嶋くん、またね。」

それと今まで、《灰原哀》と仲良くしてくれてありがとう。」

コナンと灰原はそれぞれ別の部屋に入っていった。

「え？哀ちゃんどこ行くの？コナンくんも。」

「大丈夫よ。歩美ちゃん。あの2人は変身しに行っただけだから。」

「変身？」

「ちょっと、蘭！！あんた知ってたの？あのガキんちょが新一くんだったこと。」

「うん！！少し前からね。」

「へーほんなら、蘭ちゃん、やっと工藤君と恋人同士やねんな。よかったなあ。」

「えー、蘭はもう、とつくに新一くんの奥様だと私は思ってたけどお？」

「ちょっと、園子！！そんなじゃないから！それにね、新一には今素敵な彼女がいるのよ。」

「え？なに、それ！！だって、さっきのガキんちょが新一くんですよ？あの姿で彼女って……」

「いるじゃない。コナンくんの正体をずいぶん前から知ってて、中身は同じくらいの年のかわいー女の子が。」

「それって……」

「哀ちゃん！？」「」

何人かの声が重なった。その声の主は和葉と

蘭たちの話を横で聞いていた歩美と佐藤刑事だった。

「蘭、いいの？それで。」

「いいの！！お互いに昔の気持ちと今の気持ちを話したから。」

それに、哀ちゃんと約束しちゃったし。新一よりも素敵な人見つけるって。」

「蘭がそれでいいなら、私もあの2人応援する。」

「私も!!」

「そ・れ・と、いい情報があるよ!!聞きたい?」

「聞きたい!!」

「あのね……」

ガチャ。

コナンが入っていった扉が開いた。

中から出てきたのはまさしく工藤新一だった。

「新一!!お帰り。ちゃんと戻れたのね。」

「ああ。ただいま。」

「わー工藤くんかつこえー。でもこうやってみるとコナンくんの面影があるなあ。」

「おー工藤、ちゃんと戻れてよかったやないか!!」

「ああ、サンキューな。」

「平次!!あんた今までどこおったん?こんな大事なときに。」

そういえば、コナンたちが話している間、平次は部屋にいなかった。

「いやあ、俺、しんみりした空気苦手やからな。ちょっとそこからへん散歩してきてん!!」

「あんだ、コナンくんの正体知ってたん？」

「当然やろ。俺は坊主に初めておうた時から知ってんねん!!」

「そういえば、平次、よくコナンくんのこと工藤、ってゆーてたなあ。」

「おい!!探偵坊主!《眠りの小五郎》が登場したのはコナンが家に来てすぐだ。」

「それはお前のせいなのか？」

小五郎も元に戻った新一に近づいてくる。

「あ……いや……はい。そうです。すみませんでした。」

「いや、謝ることはねーよ。」

「え？」

「俺が、少しは名の通る探偵になれたのはお前のおかげだ。感謝してる。」

「だが、これからはお前の力を借りなければいけないこともあるだろう。」

け。そのときは有無を言わず協力してもらっつからな。覚悟してお
け。

そんな話をしているうちに再びドアの開く音がした。

宮野志保とのハツ対面

扉の開く音がした方へ、みんなの目が一斉に向けられる。

「わー！。哀ちゃん、きれー！！」

「灰・・・み・やの・・・？」

「あら、工藤くん無事戻れたのね。」

「あ・・・ああ、ありがとな。」

新一は志保の姿に見惚れている。それは周りにいた人たちも同じだった。

「志保ちゃん・・・すごく綺麗よ。」

男性だけでなく女性までもがその姿を見て赤くなっている。

それもそのはずで、志保の体は誰もがあこがれるモデル体型・・・スラっとした足、くびれのある体、白い肌、大きな瞳、丁度いい大きさの胸・・・

「ねえ、工藤くん・・・何か変？私。」

自分の姿に見惚れられているとは思ってもいない様子。

「ねーちゃん、えらいべっぴんさんやなあ。おんなじ女やのになん

でこーも違つんやろなあ？」

「悪かったなあ。こない美人やのーて。」

「なんやねん！誰も和葉と比べてへんやんけ。」

「じゃあ、誰と比べとつたん？ゆーてみー。」

「あ……いや……」

「それにしても、志保さんに新一くんはもったいなあいんじゃない？ねえ？」

「う……うるせえ。」

「あーそういうば、さっき蘭が言ってたこと……あれ教えなさいよ。」

「ああ、あれね。」

蘭は新一と志保をニヤニヤした顔で見てからみんなに聞こえるくらいの声で話し始めた。

「新一ったらね、病院から帰ろうとしたときに

わざわざ哀ちゃんのところまで戻って行って、オヤスミのキスしてたのよ。」

「「「「えーーーー！！！！！！」」」」

その話の中心となっている2人は顔が真っ赤になっていた。

新一は「おい！！蘭！！」と言って蘭をとめようとするが、蘭は聞こえないふりをした。

「いいわねー志保ちゃん。高木くんなんて自分からしてくれたことないのよ。」

もう、付き合って何ヶ月も経ってるのに！！高木くんも工藤くんを見習ってよ。」

「そうね・・・私なんてこの探偵さんにはそんなことしてもらった記憶さえないけど。」

英里も小五郎を指さして言う。

たくさんの冷やかしの言葉を受けて、志保は

「私、夕食の準備してくるから・・・」

と言って、その場から去った。

「おい！灰ば・・・宮野！一人だけ逃げんなよ。」

「なによ。あなたが勝手にしたんじゃない。」

「なっ・・・それはねーだろ！！」

「ちょっと・・・お二人さんせつかく元に戻れたのにいきなり夫婦喧嘩しないでくれる？」

この言葉にまた、2人は赤くなった。

あれからしばらく冷やかかと談笑がつづき、

みんなで夕食を食べ、それぞれ帰って行った。

もう外は暗くなっていたので新一と志保は子供たちを送っていくことにした。

「ねえねえ、志保おねーさん。」

「なに？」

さっきまでは同じ位の目線だったのに、今は志保がしゃがんだ状態で聞いている。

「前から言おうと思ってたんだけどね、わたしのこと名前で呼んでほしいの。ダメ？」

かわいい顔をしてお願いをする歩美。志保は灰原の時からこの顔・
・というよりこの女の子に弱い。

「いいわよ。歩美ちゃん。」

「へへっ。ありがとう。哀ちゃん。」

「あの・・・灰原さん・・・」

光彦はあえて志保のことを灰原、と呼んだ。

「どうしたの？ 円谷くん・・・」

「あ・・・あの、僕、灰原さんのこと好きでした。」

まだまだ、僕は子供ですけど、もしコナンくんが灰原さんを泣かせたりしたら

大人になったとき僕が灰原さんを守りますから。」

志保と新一は光彦の突然の告白に驚いている。

「光彦、わりーけど簡単には灰原はゆずらねーよ。」

「あら、あなた。大人げないわね。」

そうね、じゃあ江戸川くんが頼りなくなったらそのときは円谷くんをお願いするわ。」

ふふっ、と光彦に笑顔を向けた。

光彦はその笑顔を見て、赤くなった。

その横で次は元太が話始めた。

「俺は、これからも少年探偵団を続けるぜ。コナンと灰原がいなくなってもな。」

2人みたいに頭はぜんぜんよくなーけどよ。

俺達3人だけで出来るだけのことはしよーぜ！な？歩美！！光彦！！」

「うん！」「そうですね。」

「それじゃあ、俺もオメエらに負けねえようにがんばらねーとな。」

そう言つて、少年探偵団は解散した。

空を見上げるとたくさんの星があった。

「なあ、宮野……」

「なに？」

「俺も志保つてよんでいいか？」

「クスつ。そんなこと聞かなくてもいいのに……」

「じゃあ、俺のことも名前で呼んでくれ！」

「それは無理ね。」

「なんでだよ。」

「だって、そのよびかたはあなたの幼馴染さんだけの呼び方よ。」

それに、今更はずかしくてよべないわ。」

「なんだよ、それ。」

「まあ、いつかは名前でもよべるように練習しておくわ。」

志保はクスクスと笑っている。

その笑顔が綺麗で、新一はこの笑顔を独り占めしたいと思った。そして……

志保のあごに手を伸ばし自分の唇を志保の唇に重ねた。

コナンだったときにしたキスよりも長く……

その光景を見ていた4人の影に2人が気づくのはもう少し後のことである。

2人の甘い夜（前書き）

2人の甘い夜

子供たちを無事に家まで送り届けた2人は阿笠邸に帰ってきた。

その2人がリビングに入り、ソファに腰をおろしたとき

隣の部屋からニヤニヤした4人の顔が入ってきた。

「おかえりー新一。」

「何で、あの子たちを送るだけでこんなに時間がかかったのかなー？新・一・く・ん？」

「それにしてもよくやるなー。工藤。道のと真ん中で。」

いくら夜やからって周りに誰もおらんとは限らへんで。」

「なっ！！オメエら見てたのか。／＼／＼」

「ちゃん見とったで。なんや、工藤くん王子さまみたいやったなあ。」

先ほど新一と志保のキスシーンを隠れて見ていた4人は

2人が帰ってくる前に先まわりして帰っていたらしい。

「王子さまやないで。あら、ただの狼や。」

まあ、住宅街やったから少しは控えめにしとったんやろーけど、

あれがもし2人っきりの部屋とかやったらどうなってたんやろなあ。」

ニヤニヤした顔が新一と志保の顔を交互に見る。

「どうもなってねーよ!」

「そうよ。この人に私を襲う勇氣なんてまだないわよ。それじゃあ、私お風呂に入ってくるから。」

工藤くんも明日から学校なんだから早く家に帰って体休めたほうがいいわよ。

久しぶりに元の姿に戻って精神的にも肉体的にも疲れやすくなってると思うから。」

「あ・・・志保。そのことだけど今日俺ここに泊まってもいいか？」

「あなた、隣に自分の家があるじゃない。」

「だってよー、元に戻ったばっかで何があるかわかんねーしよ。」

別に志保が作った薬が信用できないとか、そういうんじゃないけど。」

「そう。まあ、いいわ。でも、博士には自分で言っておいて。空いてる部屋なら使っていていいと思うから。」

「おう!ありがとな。」

志保はリビングを去っていった。

「ほんなら工藤。俺らは毛利のねーちゃんここに帰るわ。」

「新一くん、2人で熱い夜を過ごしてね。」

「んだよ!!博士もいるっての。」

「ん?なんじゃ?蘭くんたちはもう帰るのか?」

今までどこにいたのか、どこからか博士がやってきた。

「うん。これ以上2人の邪魔したくないし。」

そう言われた博士は新一をジト目で見る。

「あ……いや……そうだ!俺、今日博士んち泊まらせてもらっ
ぜ。」

「かまわんが志保くんには何もするんじゃないぞ。」

「わかってるって。」

「それじゃあ、新一。また明日学校でね。」

「おー。またな。」

そして4人は帰って行った。

コンコン!

「はい。」

「志保!。入るぞ。」

志保の部屋の扉が開く。

「どうしたの?もう工藤くんの布団は向こうの部屋に敷いてあるわよ。」

「おう、ありがとな。・・・志保はまだ寝ないのか?」

「今から寝ようと思ってたところにあなたが来たのよ。」

「そっか。わりいな。」

「別に。どうせ布団に入ってもすぐには寝れないし。私、夜行性だから。」

時計を見ると11時を過ぎていた。

しかし、志保にとってこの時間に寝るのはかなり早いほうだった。

「で、どうしたの?まさか私を襲いにきたの?それはやめたほうがいいわよ。」

「この部屋に隠しカメラがあったから。」

「へ？」

「多分、服部くんね。私たちが話しているとき彼、いなかったみたいだから。」

あなたの部屋にもあったわよ。

もしかしたら隣のあなたの家にもあるかもしれないわね。」

「じゃあ、わかっているんならなんで電源切らねーんだよ。」

「別にやましいことがないならいいんじゃない？服部くんは何か期待してるみたいけど。」

「じゃあ、その期待に伝えてやるか。」

「え！？ちょ……とあなた何考えて……」

志保の言葉を遮るように新一は志保の唇を自分の唇で塞いだ。

「ん……」

2人は深く深く、口付けを交わした。

そして、そのまま朝まで同じ部屋で眠った。

その結果、翌日の朝に新一が志保の部屋で眠っていたことが博士に

ばれ、

早朝から博士に怒られた新一だった。

その様子を志保は影からこっそり見て笑っていた。

新一と志保のSTART(前書き)

4月

新一と志保のSTART

「ったく。何で朝っぱらから説教されなきゃなんねーんだよ。別になにもしてないってのに。」

「それはあなたが悪いんじゃないの？博士に言われた約束をやぶったんだから」

新一はブツブツ文句を言いながら帝丹高校に志保と向かっている。

志保も着慣れない制服を着て、少し機嫌が悪かったが

新一から「似合ってる」と言われたので機嫌もよくなっていた。

「それより、あの隠しカメラはどうなったの？」

「あー、あのカメラのテープは俺が持つてるから大丈夫だ。」

「あら、期待に応えるんじゃないの？」

「あいつのわがママを聞いてたらキリがねーからな。」

ふふっ、と新一の横で笑う志保の笑顔がたまらなくかわいい。

「オメエ、最近よく笑うようになったよな。」

「誰のせいだと思ってるの？」

「《おかげ》って言うてくれ。でも、志保は笑ってたほうがやっぱ

いいな。」

「有希子さんには、あなた以外に笑ったらダメって言われたわ。」

「確かに・・・オメエの笑顔は男どもが殺られるからな。特に高校は餓えた男子が多いし。」

「そんなことくらいで殺されたらこの世に男なんていないわよ。」

「ハア・・・と新一は大きなため息をついた。」

（志保は分かってねーんだよな。自分の笑顔で何人の男が殺られてきたか。）

志保は新一のため息の意味がわからず不思議そうな顔をしている。

そんな時後ろから大きな声が聞こえてきた。

「新一いーい、志保さーいん」

「げ・・・まためんどくさいのが来た。」

2人のところに走ってきたのは蘭と園子だった。

「初日から夫婦で登校？やるわねー志保さん。」

「たく、またそれかよ。園子。」

コナンになる前にも蘭と毎朝一緒に登校していると、言われていた言葉だ。

新一はいつも思っていた。

（毎日毎日あきねーのかよ。）と……

「ねえねえ、志保さん。ほんと私達より1つ年上だけど……

今日からは同級生なんだし名前で呼んでもいいかな？私のごことは『蘭』でいいから。」

「私も『園子』でいいわよ。」

「ええ、いいわよ。蘭……園子……」

慣れない名前を呼んで、志保は赤くなっている。

「ふふ、やっぱりこれがいいよね。友達ってかんじ。」

「ずりー。志保、俺のことは名前で呼んでくんないんだぜ。」

「えーなんで？」

「今更恥ずかしいからだってよ。」

「志保かーわーいー。」

蘭と園子は志保に抱きついてる。

「おい、蘭……園子……」

そこに、担任が入ってきた。

「席にすわれー。えーと、今日から工藤が復帰だ。久しぶりだな、工藤。」

どうも、と新一が頭をさげる。

「それと、今日は転校生がいる。」

入ってきたのは志保。クラスの前で先生に紹介されている。

「宮野志保さんだ。」

「宜しくおねがいます。」

「じゃあ、後ろの空いてる席に座ってくれ。」

「はい。」

志保の席は新一の隣だ。

志保が前に立ってから、席につくまで志保から目を離す者は一人もいなかった。

「よかったな。同じクラスで。」

「別にクラスくらい離れててもよかったんじゃない？」

「お前、友達つくんの苦手だろ？このクラスには蘭も園子もいるからいいじゃねーか。」

こうやって新一と志保が話しているところをクラスの男たちは見逃さなかった。

HRが終わったあと、志保の周りに人がたくさん集まってきた。

「ねえねえ、宮野さんと工藤って知り合い？」

「ええ。」

「いいよなあ、工藤。こんな美人と知り合いだなんて。」

「宮野さんってハーフ？」

「ええ。」

「どことどこの？」

「イギリスと日本。」

志保はいきなり質問攻めにされている。別のクラスからも人が集まってきた。

新一の復帰など忘れられているようだ。

その中の一人が誰もが気になっていたことを聞いた。

「宮野さんって、男いるの？」

志保は、これを言っているのかどうか分からず、横の席の新一に助

けを求めた。

新一は志保の顔を見て、志保の代わりに言った。

「志保には男いるぜ。だから、誰も手えだすなよ。」

「なんで工藤がそんなに偉そうなんだよ。」

「なんでって・・・あたりめーだろ。俺が志保の彼氏なんだから。」

その瞬間、志保に質問していた人たちは新一の方へと標的を代え、

次は新一が質問攻めされることとなった。

その間に志保は蘭と園子のもとへ行き、その空間から脱出した。

「高校って面倒ね。」

「大丈夫よ。すぐに慣れるわよ。」

と言いつつも新一と志保の席のまわりを見ると3人は苦笑するしかなかった。

このあとも授業が終わるたびに2人は質問攻めにあい、

新一にとっては久しぶりの、志保にとっては始めての高校での一日が終わった。

服部の嫉妬

新一たちが学校のあと阿笠邸に帰ったとき服部と和葉がいた。

「工藤もねーちゃんらも、わざわざ俺らが大阪からきてやったちゅーのに」

みんな学校行きよって。

俺らだって学校休んで来てるっちゅーねん。」

「ごめんね・・・服部くん、和葉ちゃん。」

「ええねん、ええねん。蘭ちゃん、気にせんといて。」

ちよつと！！平次！あんたがまだ帰りたくないってゆーたんやんか。子供みために。」

それに、今は体育祭の練習ばっかでめんどいとかゆってズル休みしてんの誰？」

「まあまあ、それじゃあ明日はみんなでどこか行こうか。」

「じゃあ、蘭。またトロピカルランドとかどう？」

「いいわね。新一も志保もそれでいい？」

「私はパ・・・」

「ああ、俺と志保もそれでいいぜ。」

「ちよ……工藤くん！？私は行かな……」

「志保も行くよな？な？」

新一が顔を近づけてくる。

「しょうがないわね。行くわ。私も。」

「じゃあ、明日の朝9時に新一の家に向かえにくるね。」

「ああ。」

「それじゃあ、また明日ね。」

そして3人は帰って行った。

「志保、今日の夕飯なんだ？」

「今日はハンバーグよ。って、あなた食べていくつもり？」

「俺、そのつもりだったけど……ダメか？」

「仕方ないわね。まだ、材料はたくさんあるから大丈夫よ。」

新一はハンバーグが好きなのか、喜んでいようだ。

「工藤、ハンバーグ好きなんか。お前も子供っぽいところあるんやな。

まあ、昨日までは子供やったから、子供っぽいところもまだ残ってんのかも知れへんな。」

「服部（くん）！！」

「お前、なんでここにいんだよ。さっき帰ったんじゃないのか？」

「昨日ゆーたで。明日は工藤んちに泊まらせてもらって。」

「俺、聞いた覚えないけど？」

「あんどき、工藤とねーちゃんを冷やかしたあとゆうた！！」

もしかして、ねーちゃんのことと頭いっぱいでなんも考えんと返事したんやないか？

まあええわ。そんなことより、お前に話さなアカンことあんねん。」

「なんだ？」

「それはまた後でゆっくり話そうや。工藤んちで。な？ねーちゃんも呼んで。」

「え？私も？」

「ちょっとねーちゃんの見聞も聞きたいんや。」

「そう。それなら早く夕食食べて行きましょ。幸い服部くんの分も材料が残ってるから。」

「ほな、遠慮なくいただくわ。」

夕食を食べ終わった後、新一、志保、服部は工藤邸に向かった。

「そういえば、工藤。昨日の夜、またねーちゃんとイチャついたよ。たやる?」

「さーどうかね。オメエには教えねーよ。」

「はは、そうか。そんなん教えてもらわんでももう観てもーたし。」

服部はテープを新一と志保に見せて言った。

「残念だけど、服部。そのテープは今日の朝、別のに入れ替えたから何も映ってねーよ。」

「工藤、オマエ気づかへんかったんか? あれは囿の隠しカメラ。本物は別のところに隠しとってんで。」

「な!?! うそだろ?」

新一の横で志保も驚いている。

「工藤やからすぐ見つけてしまっやろ……っっておもたけど、

東の名探偵やばいなあ。ねーちゃんのことになったら周りが見えんようになるんやもんな。

まあ、一応お礼ゆうとくわ。俺の期待に応えてくれてありがとうございませす。」

「お前、そのテープ今すぐ返せ。」

「それはできへんなあ。これはまだ他のやつらには見せへんけど、いつか使うことができるからな。それまで、とっとく。」

「服部、悪趣味だな。」

「はは、そんなこと言われたってなんも思わへんで。」

そもそも探偵やってる時点で周りからみたら悪趣味にしか見えんやろーからな。」

「にやろ……」

新一は諦めた。今、こいつに何を言っても俺は負ける……と。

志保はそんな新一と服部に呆れている。

はあ、と大きくため息をつき工藤邸に入ってしまった。

それから、新一の弱みを握った服部は度々、このテープを持ち出してきたという。

「それで？話ってなんなの？」

3人とも風呂に入り、広いリビングに座っている。

「ああ、その話ってゆうんがな、和葉のことやねんけど・・・」

「和葉ちゃん？」

「最近な、あいつ、男に告白したらしいんや。」

なのに、その和葉が告白した男ちゆうんはな返事するどころか

そんなこと忘れてしもたように自分の前にいつもいてるらしくてな。ほんで、それからずーと暗いんや。」

（和葉ちゃんが告白？和葉ちゃんって服部のことが好きなんじゃなかったのか？）

それとも俺と蘭と同じように幼馴染として好きだったとか・・・

「服部くん。あなた・・・」

「なんや、ねーちゃんどうしたらええか、わかるんか？」

「ええ。」

「さすが、ねーちゃんやな。やっぱ女のことは女にしかわからんか。で？どうしたらええんや？」

志保は、この目の前の男2人に呆れた。特に、この色黒探偵に。

「はあ・・・、どうしたら、って・・・あなたはとにかく女心を知ることね。」

新一も服部も志保の口から《女心》という単語がでてきたことに驚いた。

「じゃあ、服部くんに聞くわ。あなた、和葉さんのことどう思ってるの？」

まずはそこからよ。

そして正直に思ったことを本人に言えばいいの。」

探偵2人はまだ驚いている。

「どづいづいことやねん・・・工藤はわかるか？」

「・・・いや・・・ぜんぜん。」

新一と服部はしばらく志保の言ったことについて考えていた。

すると新一の肩が突然重たくなった。

その原因は志保だ。

志保の頭が新一の肩に乗っている。

「おい！志保！」

志保は眠っていた。

「たく・・・しょーがねーな。」

そう言って、新一は志保をソファに寝かせ、毛布を体にかけてあげた。

「今日は学校で質問攻めにされてたからな。疲れたんだろな。」

「そらそーや。にしても、幸せそーな顔してねむつつとる。」

「ああ、組織がつぶれてから安心して眠れるようになったんだろな。」

前はよくやな夢ばかり見てたらしいけど。」

「そうか。あの組織はこんなところでねーちゃんを苦しめとったんやな。」

「でもまあ、やつらのおかげでっていうのもおかしいけど」

組織のことがなかったら俺と志保は出会えてなかったかもしれないから少しは感謝してるよ。」

「せやな・・・それより、工藤。和葉のことはどうしたらエエんやろ？」

「なあ、服部。」

お前、和葉ちゃんが男に告白したって聞いたときどういう気持ちだった？」

「俺か？俺は、ただなんで？て思った。」

「そのなんで？って思ったのはなぜだ？」

「それは・・・いつも横に俺という男がいながら

和葉の目には俺やない別の男が映ってると思うとな・・・なんでやって思うやる。」

「服部、そういうのをなんていうか知ってるか？」

・・・嫉妬ていうんだよ。お前は、和葉ちゃんが好きになった男に嫉妬してんだよ。」

服部の決意

『お前は、和葉ちゃんが好きになった男に嫉妬してんだよ』

(工藤。悔しいけど、今回の推理お前の勝ちみたいやな。

俺、ほんまにその男に嫉妬してたんや。自分が気づかん間に。

工藤には嫉妬は醜いとかなんとか言うといて・・・アホやな。

俺。

いい加減なさけなくなってくるわ。(

朝、和葉たちが服部たちを迎えにきた。

「平次、用意できたん？はよ行くでー!。」

和葉はとても楽しそうだ。

「和葉ちゃん、昨日の夜から楽しみにしてたの。」

「あいつはいくつやねん。和葉は工藤らとちごて精神年齢が子供になつてしもたんやないか?」

「失礼やな!!私ハちゃんと大人です。」

「どこがやねん。まあええわ。行くで。」

(よかった。和葉も少しは元気になってくれたみたいやな。)

トロピカルランドにつき、和葉、蘭、園子は女3人ではしゃいでいる。

その様子をベンチに座ってみている服部、新一、志保。

「なんで、あのねーちゃんたちはあんなに人前ではしゃげるんやろ。こっちのねーちゃんを見習えや。」

「志保はあっちに行かなくていいのか？」

新一が当然のことを聞く。

「私は無理ね。あなた、今わかって質問したでしょ。」

「だよなあー。」

そんな時、服部がいきなり重々しい口調になって話だした。

「工藤、ねーちゃん。昨日2人が言ってたことやけどな、俺わかったで。」

和葉のゆうてた男に嫉妬してたんがわかった。

けど、あいつがその男と幸せになるんなら俺は身を引くって決めた。」

その言葉に納得のいかなかった志保は服部に言った。

「服部くん、あなた言ってくれたわよね。」

幸せになるのに権利はない。あるのは義務だって。

あの言葉、今の服部くんにもいえるんじゃないかしら。

あなたが幸せになるのはあなたの義務よ。

でも、幸せっていうのはときには何かを犠牲にしなければいけないこともある。

それを私はあなたたちから学んだわ。」

「せやな。・・・よく考えてみるわ。」

「何かを犠牲にしてまで自分の思いと向き合う人は素敵よ。」

「それは工藤のことか？まあええわ。とにかくねーちゃんありがとうな。」

「お礼を言うのは私のほうよ。あなたの言葉で今私はこうして幸せになってるの。」

灰原哀としてすごしてきた、あの時よりも。

あなたと工藤くんのおかげなのよ。」

「志保……」「ねーちゃん……」

「「ありがとうー!」「」

「あ……服部、どんな答えを出したとしても志保だけはゆずらねーからな。」

「それはわからへんな。もうすでにねーちゃんのこと好きかも。」

「あら、ありがとう。でも、ここに独占欲の強い狼さんがいるから

これ以上私ひとりでは無理ね。ほかをあたってくれる?」

「はは、冗談やって。ほんなら俺ももっと幸せになれる道探すわ。」

そんなとき女子3人がやってきた。

「何はなしてんのー?平次?」

「大事な話や。じゃあ、俺らも行くか!あれ乗ろつや。」

服部が指差したのはジェットコースターだった。

「私、パス」

「えーなんで?みんなで乗ろつや。」

「ん?志保どうした?」

「なんでもないわよ。並ぶのが面倒なだけ。」

この言葉が志保の強がりだと言うのが新一にはわかった。

「オメエ、怖いんだろ？大丈夫だって。別に落ちたりしねーから。ほら行くぞ。」

新一は志保の手を力強く引っ張っていった。

その光景を服部はうらやましそうに見ていた。

「ほら、平次も！！何ポーってしてんの。行くぞ？」

和葉も服部の手を引いて歩いていく。

（工藤、ねーちゃん。また一つわかってしもた。

俺は、このつるさいのが横におったら幸せなんや。

ほんで、好きや。どうしようもないくらい、和葉のことが、このうれしそうな顔が。）

服部たちの前では新一と志保が手をつないでいる。

「怖いなら、俺の手ずっとにぎっとけよ。」

「だから、別に怖くないって言ってるでしょ。」

「なめんなよ。俺は探偵だぜ。」

（なんや、工藤。かっこつけよって。

まあ、でも次おうたときには俺も2人に負けんくらい幸せな顔
見せたんで。）

そして、服部平次は新たな決意を胸に大阪行きの飛行機に乗った。

NEWカップル

今、服部と和葉は空の上。

2人はトロピカルランドで遊んだ後、新一たちと別れ、大阪行きの飛行機に乗った。

「……なあ……平次。東京また一緒に行こな。」

そう言った和葉の顔は少し不安そうだ。

まただ。また和葉はこの顔をしている。

服部は、自分が和葉のことを好きだとわかった今、この顔を見るのがとても辛い。

どこの誰かはわからないが和葉の好きな男が、和葉にこの顔をさせている。

「和葉……」

「ん？なに？」

服部は言葉につまってしまふ。でも、今言わなければ。

たとえば、これからは今までみたいに話すことがなくなってしまうとしても……

（俺は自分の幸せのために、少ない可能性にかけて言わなアカン。）

「平次？どうしたん？」

「和葉、俺はお前が好きなやつおるって知ってる。

けどな、お前が誰を好きでも、俺は・・・俺は和葉が好きや。」

服部は怖くて、和葉の顔を見れないでいる。

(情けないな・・・ほんまに。)

「・・・それ、この間の私の告白の答え？」

「え？」

服部はやっと和葉に目を向ける。

「え？って・・・やっぱ、平次聞いてなかったんや。

前に平次と一緒に好み焼き食べに行ったとき、あたしゆーたやん。

『好きや』って。そしたら平次、『そうか』ってだけゆうてお好み焼き

必死になって食べてたやん。」

服部の頭にそのときの出来事が思い出される。

「はいよ。お待ちどーさん。」

「おー、うまそうやな。いただきます。」

服部も和葉も目の前のお好み焼きを食べる。

和葉は何口か食べてから、箸をとめ、服部の顔を見た。

「なんや和葉。食べへんのか？ほんなら俺がもらっで。」

服部はまた自分のお好み焼きを食べる。

「平次、好きや。」

和葉が意を決して伝えた気持ち。しかし服部は

「そっか。」

と言っただけ。そして、何事もなかったかのように食べ続けていた。

「思い出した？」

「ああ・・・思い出した。あんときのあれ、告白やったんか。」

（ ）「じゃあ、今まで和葉を悩ましてった男って、俺っちゆうことか？」

「俺がお好み焼きもらってゆーて、好きやからやらんって言いよるんか思ったで。」

「なんやあ、すまんかったな。」

「そんなん、もう、どーでもエエよ。けど、さっき平次がうちにゆーてくれたことほんま？」

「ほんまや。ほんまはもっと早くからこの気持ちやったんやろーけどいつもお前が当たり前のように傍におって気づかへんかったんや。」

「昨日と今日な、工藤とねーちゃんと話してってやっと気がついた。」

「ほんなら、うち、平次の彼女になってエエの？」

「じゃあ、逆に聞くけど俺がお前の彼氏でもエエか？」

「うん！！うち、彼氏は平次がいい／＼！！平次は？」

「俺も、横にいつもおんのは和葉やないと、なんや、しっくりこんからなあ。」

「しつくり・・・ってあんた・・・」

「それと、俺は工藤と一緒に独占欲が強い男って工藤たちと話とってわかつたんや。」

「せやから・・・」

「チユツ。」

和葉の頬に何か触れた。それはまぎれもなく服部の唇だった。

「え／＼／平次？」

「ゆーたやろ。俺は独占欲の強い男やって・・・」

「だからって今、こんなところでせんでも／＼／」

「だれも見てへんっちゆうねん。さあて、俺は疲れたから寝るわ。」

うるさい女3人とずっとおったからなあ。少しは工藤のねーちゃん見習えっちゆうーねん。」

「うるさい女で悪かったなあ。これからはそのうるさい女とずーと一緒にやで。」

「まあ、そんなの今更やし。気にすることもないけど。俺が寝るときくらいは静かにしとってくれや。」

「分かってるわ！！私だって昨日遅くまで起きてて眠いねん。ほなおやすみ。」

そう言って、和葉は自分の頭を平次の肩に乗せ、眠った。

（工藤、ほんまに俺ら似たもの同士やな。

工藤、ねーちゃん。俺も2人に負けんくらい幸せになったんで。）

服部も和葉の頭に自分の頭を乗せ、眠りについた。

NEWカップル(後書き)

服部くんと和葉ちゃんが珍しく素直!!

書いてて楽しかったです。

ヘルモットとの再会

RRRRRRR・・・RRRRRRR・・・

「お！工藤。俺や。」

「あー服部か。もう大阪着いたのか？」

「ああ。今は家におる。で、工藤に報告や。」

「報告って、お前ら上手くいったのか？」

「まあ、一応な。工藤とねーちゃんには感謝してんで。」

「お前から感謝されるって、なんか気持ちわりい。」

「なんや！俺が素直に感謝してんねん。何がきしょく悪いっつーんや。」

まあ、エエわ。とりあえずねーちゃんに変わってくれ。そこに
おんのやる？」

「あ？志保か・・・今、自分の部屋にいるけど、オメエよけいなこ
と言っんじゃねーのか？」

「なにがやねん。俺はねーちゃんにもお礼言いたいだけや。はよ、
代われ！！」

新一は自分の携帯を持って志保の部屋に行く。

トントーン！

「入るぞ。」「どつぞ。」「

キイツと音を立てながら扉がひらく。

「志保、服部から電話だ。」「

「服部くん？」「

新一から携帯を受け取る。

「もしもし……。」「

「おー。ねーちゃんか。」「

「おめでとつ。」「

「え？なんや、さすがねーちゃんやなあ。分かってんのかい。」「

「で？どうしたの？私に電話代わったのだからこれと言ったためじやないでしょ？」「

新一が志保と服部が携帯で話している光景をジーと見ている。

「ねーちゃんにはなんでもお見通しやな。」「

「それで？なんなの？」「

「まあ、とりあえずはお礼ゆーわ。ありがとう！」

ほんで、本題にはいるけど、ねーちゃんはまだ工藤に遠慮して
るやろ？

今まで見とってよーわかったわ。」

「遠慮なんてしてないわよ。」

「確かに、付き合いだしてから素直になったと思うけど

もつとねーちゃんの弱いとこ工藤に見せてエエんやで。

俺からはそんだけや。工藤と仲良くやりい。それと、工藤にゆ
ーとってくれや。」

「何を？」

「俺も、工藤に負けんくらい幸せになったる、ってな。頼んだで。」
言い終わると服部が勢いよく電話を切った。

「服部なんて？」

「工藤さんに『俺も工藤より幸せになるって伝えて』って……」

「それなら、俺に直接言えばいいのに。あいつ。」

RRRRRRR……RRRRRRR……

再び新一の携帯が震える。画面にはジヨデイの名前が記されている。

「もしもし。」

「ハーイ。私です。」

「ジヨデイ先生。どうしたんですか？」

新一はジヨデイと話終えた後、志保の方を向いた。

「志保、明日学校から帰ってきて時間あるか？」

「ええ。大丈夫よ。けど、なにかあったの？」

「ベルモットの処分が決まった。終身刑・・・だそうだ。」

「そう・・・」

志保は俯く。

「最後に志保に会いたいらしい。俺達が学校から帰ってきたら博士
んちにジヨデイ先生たちと来るって・・・」

ベルモットは新一たちの命を助けた、元組織のメンバー。

新一も志保もベルモットがいなければ2人はこの世にいないかもしれない。

一時はベルモットの存在に怯えたこともあった。

「そう……」

「それと、明日は母さんも帰ってくるってよ。」

「え？有希子さんが？」

「志保が元に戻った姿を見たらしい。」

「じゃあ、明日は学校だし俺は帰るから。志保もちゃんと寝ろよ。おやすみ。」

「おやすみなさい。」

志保は新一が帰ったあと、新一の言った通り布団に入り、体を休めた。

（今日はちょっと疲れたわね……）

布団に入った志保はすぐに眠りについた。

翌日、新一と志保は学校から博士の家に帰ってきた。

「ただい……」「しーんちゃん、しーほちゃんお帰りー！ー！」

「有希子さん……お久しぶりです。」

奥から有希子が玄関に向かって走ってくる。

「え……志保ちゃん？」

「はい。」

「わー！！やっぱ、美人ねー。哀ちゃんの時より更に綺麗になってるわ。」

あ、新ちゃんも元に戻ってる。

それにしても新ちゃんいいわねー。こんな美人の彼女。」

「息子に久々に会ったっていうのに、俺にはそんだけかよー！！」

ピンポン

「新一、志保君おかえり。さっそくじゃがお客様じゃよ。」

「お客様？」

「ベル……シャロンだよ。母さんも知ってるだろ？一緒に来るか？」

「そうね。シャロンは私の友人だし。私も行くわ。」

「ジョディ先生、お久しぶりです。」

「工藤さんと、志保ちゃんね。その姿では初めまして、よね。」

「ええ。」

「よかったわ。アメリカに帰る前に2人の元の姿が見れて。」

そう話していると、車の中から女性が出てきた。

「久しぶりね。クールガイ、シエリー。」

「「ベルモット！」」

「それじゃあ、私は車に乗ってるから。」

ジョディを一瞥して、再びベルモットを見る。

ベルモットの両手には手錠もなにもかけられていない。

ベルモットのことをジョディは信用しているのだろう。

「シエリー、いや、今は志保だったかしら。」

「ええ、宮野志保よ。」

「シャロンー!!」

有希子がベルモットに駆け寄ってくる。

「有希子？そう、あなたもいたのね。」

「シャロン・・・あなたに言いたいことが一つあるのよ。」

「そうね。なんであの組織に入ったかかってことでしょ？」

「違うわよ。あなたはあんな犯罪組織に自分から入る人じゃない。」

殺人をしたのもそれなりの理由があったからだって私は信じてるわ。

私が言いたいのは、あなたを責めることじゃない。

お礼を言いたいのよ。

新一と志保ちゃんと、あと新一のお友達の服部くん。

3人を助けてくれてありがとう。

それと、私が女優だったころからいろいろと助けてもらってたわ。」

「ふふっ。あなたはほんとにお人よしね。」

大好きよ、あなたのそういうところ。そのお人よしなところは息子に受け継がれたのね。」

「お人よしくて、褒められてるようには聞こえないけど？」

ベルモットはふっ、と笑うと志保の方へ顔を向きなおした。

「志保・・・これ、あなたにあげるわ。明美が死んだとき明美の家で見つけたのよ。」

「え？これ・・・」

志保に渡されたのはアルバムだった。

中には10枚くらいの写真がはいっている。

「これ・・・私？」

志保が見ているのは志保が産まれたばかりのときの写真。

「そうよ。これはあなた。あなたのお母さんが撮ったものよ。」

「なんで、お母さんが・・・」

「あなたのお母さんと私は昔から親友だったのよ。」

志保が産まれたとき、私もいたわ。病院に。ほら、これ・・・」

ベルモットが指差した写真を見るとそこには日本人の男性と外国人の女性2人、

産まれたばかりの志保、そしてその横には志保の姉、明美が写っていた。

外国人の女性の一人、子供を抱いているのは志保の母親、もう一人

は・・・

「この2人があなたの両親よ。そして、これは私。」

ベルモットが『私』と言った写真の女性は眼鏡をかけた金髪の40歳代と思われる女性。

新一はこの女性に見覚えがあった。

前に有希子と蘭と海外に行ったときに会った人だ。

「組織には整形したって言ったけど、本当は私もあなたの薬を飲んだのよ。」

アポトキシンを・・・。

組織のボスが私を信用してくれてたみたいだったから疑われなかったわ。

有希子とクールガイは分かってたんでしょ？ 私がその薬を飲んだって・・・」

「ああ、確信とまではいかなかったけどな。」

「あら、私は分かってたわよ。あなたのお葬式の時からあなたは死んでない。」

姿を変えてどこかにいる、って。

実際、新ちゃんと志保ちゃんのこともあったしね。」

やっぱりあなたたちには勝てないわね、と言ってベルモットは優しく笑った。

「志保・・・あなたの両親は凄くいい人だったのよ。」

志保が産まれたときも2人とも凄く喜んでたわ。もちろん明美も。

これは最初で最後のあなた達の家族写真よ。大事にきなさい。」

「ありがとう。」

志保は泣いている。

「私も一緒に写ってるのは私がもらっていくわ。」

家族のいない私にとってはあなたの家族が私の家族みたいなものだったから。」

それじゃあ、私は行くわね。ちゃんと罪を償ってくるわ。」

それと、クールガイ。志保を幸せにしてあげて。」

「わーってるよ。」

「有希子も、旦那と仲良くしなさいよ。」

「分かってるわよ！・・・元気だね、シャロン。」

「あなた達も。」

ベルモットは、車に乗り、3人の前から去っていった。

新一の横で志保は泣いている。ベルモットにもらったアルバムをしっかりと抱えながら。

・ 新一は志保を力いっぱい抱きしめた。志保が泣き止むまでずっと・

ベルモットとの再会（後書き）

なんか・・・原作と離れすぎてしまったような・・・

すみません。

納得のいかない人も多いただろうと思います・・・

本当にすみません。

写真の中の思い出

「志保、落ち着いたか？」

「ええ。ごめんなさい。もう大丈夫よ。ありがとう。」

「新ちゃん、志保ちゃん、とりあえず入ったら？」

有希子は珍しく抱き合っている2人を冷やかさず、博士の家に入っていた。

有希子も友人との別れは辛かったのだ。

彼女の部屋からはすすり泣く声が聞こえる。

志保も自分の部屋に入り、椅子にすわる。

そして、さつきもらったアルバムを最初のページから見ていく。

1ページ目に唯一の家族写真がある。

（この人たちが私のお父さんとお母さん・・・）

志保は幼いときに両親をなくしたため、両親の顔を覚えていなかった。

（おねーちゃんはお父さん似で、私はお母さん似だったのね。

髪の色と顔で私がお母さん似ってというのは確かだったけど・・・

2人とも優しそうな目・・・)

次のページには志保が産まれたばかりの時に母親が撮ったという写真。

その次には無邪気に笑う志保と明美。

その後のページにも志保と明美が映った写真が挟まれていた。

「志保ってこんな風にも笑えるんだな。」

いつの間にか新一は志保の後ろにいた。

「あなた、なんで勝手に・・・」

「ノックしたけど、返事がなかったから入ったんだよ。なにかあったかと思って。」

「それで?どうしたの?」

「いや・・・別に用はねえけど。」

「そう。」

いつもの志保なら追い返すところだが、今は、今だけはどうしても新一にいてほしかった。

「工藤くん、気晴らしに買い物行かない?今日の夕食の材料まだ買ってなかったの。」

「そうだな。じゃあ、行くか。待ってる。着替えてくるから。」

新一は自分の家に着替えに戻り、10分くらいで博士の家に来た。

「よし。志保行くか。」

近くのスーパーについた。店内はいつもお決まりのBGMが流れている。

「今日の夕飯はなんだ？」

「有希子さんのリクエストでグラタンよ。」

「グラタンかあ。たまにはいいかもな。」

そんな会話をしているとき、

ドンっ！！

「キャッ！！」「おっと！」

志保が男とぶつかり、よろけそうになったのを新一が支える。

男は志保を見て一瞬、驚いたような顔をしたがすいません、と言って去っていった。

新一にはなにかひっかかるものがあった。

(あの人、確か帝丹の・・・)

「どうしたの、工藤くん？行くわよ。」

「え、あ、ああ。」

2人は夕食の材料を買い終え、帰っていった。

帰ると博士と有希子がリビングで談笑していた。

さっきまで部屋で泣いていた彼女はどこへ行ったのだろうか・・・

「「ただいま。」」

「あ！！新ちゃん、志保ちゃんおかえり。」

「2人ともおかえり。」

「私、今から夕食作るの、有希子さんはゆっくりしてくださいください。」

「いいの？それじゃあお言葉に甘えてゆっくりしてるわね。」

(母さん、絶対最初から手伝う気なかっただろ。)

「志保、俺なんか手伝おうか？」

「遠慮しとくわ。あなたに包丁をもたせるのは殺人現場だけで十分よ。」

その言葉にどういう意味だよ、とか言いつつ確かにそうだよな・・・
とか思っている新一。

30分後夕食が出来上がり、みんなで集まって食べた。

「志保ちゃん、料理上手いのね。」

「ありがとうございます。」

「志保ちゃんはいいいお嫁さんになるわね。ほんと新ちゃんが羨ましいわ。」

新一と志保の顔が赤くなる。

「ふふつ。2人とも照れちゃってかわいいわね。」

「そんなんじゃないよ。」

「志保ちゃんがうちにくるのはいつかなあつと。」

「新一、志保くんはやらんぞ。」

有希子も博士も言いたいことを次々に言う。

そんな2人を無視して新一と志保は食べる箸を進めた。

写真の中の思い出(後書き)

進展がなくてすみません。

昼休み（前書き）

5月

昼休み

新一と志保が元の姿に戻って一ヶ月が過ぎていた。

毎日、穏やかな暮らしが続いている、と思った矢先……

学校が終わった後、志保が呼び出された。

それは先生からではなく、隣のクラスの男子からであった。

（やっぱりな……そろそろ来るとは思ってたけど。）

新一は志保が気になりながらも、教室に残って志保を待つことにした。

キーー。

扉の開く音が響く。

志保は屋上に呼び出されていた。

「宮野さん……来てくれたんだ。よかった……。」

「あなたが呼び出したんでしょ？来ないわけにはいかないじゃない。」

「

屋上に男と2人きり。

いくら志保でもこの状況は男が何を言いたいのかはわかる。

（はぁ。面倒ね。）

男がなかなか話しださないの少し苛々した志保は自分から口を開く。

「どうしたの？私、急ぎの用事があるから早く帰りたいんだけど。」

「宮野さん……」

志保の言葉で男もやっと話し始める。

「宮野さん。俺、宮野さんが好きです。宮野さんに一目ぼれしました。」

（やっぱり……）

「気持ちはうれしいけど、私好きな人いるから。」

それに、私はあなたを知らないし、あなたも私のこと何も知らないでしょ？」

「好きな人って工藤くんだよな？付き合ってるって噂も聞いてた。」

「そう。それなら……」

「それでも、俺は宮野さんが好きです。宮野さんが俺のことを知らないなら

「これから知ってください。俺も宮野さんのこともっと知るから

「ごめんなさい。私はあなたとは付き合えないわ。

「どんなにあなたが私を想ってくれても私の目はあなたには向かない。」

「そう、か・・・それなら俺は潔くあきらめるよ。

「時間とらせてゴメン。それじゃあ。」

男は帰って行った。その姿を確認して志保は大きいため息をついた。

（ハア・・・疲れるわね。）

しばらくして志保は新一が待っている教室に戻った。

「ごめんなさい。遅くなって。」

「ああ、別に。」

「何があったか聞かないの？」

「俺は志保を信じてるからな。でも、まあ少しは気になったけど。」

「そう。ちゃんと断ったから大丈夫よ。じゃあ、帰りましょう。」

2人は手を繋いで博士の家に帰って行った。

次の日の放課後、志保はまた呼び出された。昨日とは別の男に。

内容は昨日の男と同じことだった。

もちろん志保は断る。

それから、志保は毎日のように呼び出されるようになった。

「志保、大変だね・・・ねえ、新一。新一は心配じゃないの？」

蘭が自分の席に座って本を読んでいる新一に声をかける。

「心配も何も、俺はあいつを信じてるからな。」

「なになに、新一くん。それ惚気てるの？」

蘭の横から園子が冷やかす。

「そんなんじゃないよ。実際、あいつは告白されてもちゃんと断ってくれてる。」

「だから俺は信じるしかねーだろ。」

ガラッ。

志保が帰ってきた。

「お帰り。じゃあ、帰るか。」

4人は教室をでた。

この日、志保は新一の家に行った。

学校に行こうとしたとき、博士の家に有希子から電話で、新一は熱があるから学校は休む、と聞き

心配になった志保は急いで、新一の家に来たのだ。

「ああ、志保か。わりいな。俺、今日は学校休むよ。」

「そうね、そうした方がいいわ。私も今日は休むから。」

「いや、俺は大丈夫だから志保は学校行ってこい。家には母さんもいるし。」

「そうよ。新ちゃんのごことは私に任せて。志保ちゃんが行ってらっしゃい。」

志保は新一が心配だったが、有希子がいるなら大丈夫だろうと思っ

後から志保を迎えにきた蘭たちと一緒に学校に行った。

その日の昼休み、志保はまた呼び出された。

「宮野さん。」

「あ……あなた、確か、この間スーパーで……」

志保を呼び出した男は前に新一と行ったスーパーで志保にぶつかってきた人だった。

「覚えててくれたんだ。」

俺、宮野さんが好き。あの時から宮野さんのこと忘れられなかったんだ。」

もちろん、志保はこの告白を断る。

「ごめんなさい。私はあなたとは付き合えないわ。」

「工藤新一。今の宮野さんの彼氏。頭がよくてスポーツ抜群、おまけに顔もよく有名な。」

俺にはとうてい敵わない。」

「あら、あなた彼のことよくわかってるのね。」

「当たり前だろ？俺が宮野さんに告白する前にいろいろと調べておいたんだから。」

「ただ俺も一つだけ工藤新一に勝るものがあつた。」

「なにかしら。」

「それは、俺の方が宮野さんのことを好きってことだよ。」

そう言った男の目は不気味だった。

ニヤニヤしながら男の顔が志保の顔に近づいてくる。

志保が突き放そうとしたとき、

パシッ！！

男の両手が志保の両腕をつかむ。

そして、男の唇が志保の唇に重なる。

「！！！」

志保は抵抗しようとしても男の力が強くて抵抗できない。

「ん……んん……」

男の舌が志保の口の中に入ってくる。

そんな時チャイムがなった。

男の唇が離れる。

「あああ、チャイムなっちゃったね。どうする？このまま2人で授業さぼる？」

「ふざけないで!!」

志保は緩んだ男の腕を勢いよく振り払い教室に帰っていった。

怒り

志保が教室に戻ってきたとき呼吸が乱れて、顔色も悪かった。

蘭が心配して志保に声をかける。

「志保、どうしたの？顔色悪いよ？」

だが、志保は大丈夫よ、と言うだけだった。

二度目のチャイムがなり、午後の授業が始まる。

志保は顔を机に伏せて、授業も聞いていない。

授業がおわったあと、やはり様子のおかしい志保に蘭と園子がどうしたのか聞いた。

それでも、志保は大丈夫だから・・・と言う。

志保は学校が終わり、すぐに博士の家に帰った。

そして、家に着くなり、まっすぐに自分の部屋に入ってしまった。

博士は心配したが、こういふときの志保は何も話さないということを知っているので

あえて、何も聞かなかった。

(どうしたんじゃないだろうか・・・志保くん・・・

新一は熱があるからこっちに来てほしい、なんて言えんし・・・

)

どうしたらよいか迷っているとき、志保の部屋からドンツ、と大きな音が聞こえた。

博士は急いで志保の部屋の様子を見に行った。

「シェリー、こっちに来て。」

志保は言われたとおりに男の傍に行く。

そして、その男に唇を塞がれ、無理やりベッドに体を押し付けられる。

こんなことをするのは誰か、暗くて顔は見えないが志保にはすぐにわかった。

金色の長髪・・・シェリーと言って自分を呼ぶあの声・・・ジンだ。

志保はもう抵抗しない。いや、できない。

怖い・・・怖い・・・

自然と涙が溢れてくる。

工藤くん、助けて・・・

「くど・・・ん、たすけ・・・て」

「え？志保？・・・志保！！」

「・・・工藤くん・・・」

「大丈夫か？だいぶうなされてたぞ。」

志保の頬には新一の温かい手があった。新一は志保の涙を拭いていたのだ。

「ええ。ちよつと悪い夢を見ただけ。」

（あれは、夢・・・いや、あれは確かあのときの・・・思い出したくない・・・私の過去。

あの昼休みの出来事のせいね。工藤くんへの罪悪感であんな夢・・・）

「どんな夢だよ。」

「別にたいした夢じゃないから、もう大丈夫よ。」

「でも、泣いてたぞ。それに、俺に助けて、って……」

「え？」

「たく……なんにも頼ってくんねーんだな。」

「そういうわけじゃないのよ。でも、本当に大丈夫だから、心配しないで。」

それより、工藤くんこそ熱は？大丈夫なの？」

オメエは大丈夫じゃねーだろ、と思いつつ志保に返事をする。

「ああ、一晩寝たらすっかりよくなった。それで？何があった？」

新一の一晩という言葉聞き、窓の外を見ると空は明るくなっていた。

志保はあれから今までずっと寝ていたのだとやっと理解した。

「博士に聞いた。帰ってくるなり部屋に閉じこもって、大きな音があったと思ったら」

志保が倒れてたって。

お前が倒れるほどのことがあったんだろ？

さつきも蘭に学校に行くの遅れるって言ったら、志保のこと心配しててよ、

昨日の昼休みから志保の様子がおかしかったって教えてくれた。

それに熱でもなく風邪をひいてるわけでもない。だとしたら志保が倒れる理由は……」

「なんでもないわよ。ただ疲れてただけよ。」

志保は新一には言いたくなかった。新一を傷つけたくなかった。

だから嘘をついた。だが……

「嘘だな。志保がなんでもないって言うときは何かあんだよ。」

「つたく、一人で抱えこむな。たまには俺を頼ってくれよ。」

新一の腕が志保の背中に回る。

「……」

「俺に言えねえことか？」

「……』遠慮してるやる？』」もつとねーちゃんの弱いところ工藤に見せてエエんやで。』……」

志保の頭の中に服部が言っていた言葉が浮かぶ。

(工藤くんは遠慮してる？もっと私の弱いところを見せていいの？)

「ただ、今工藤くんは甘えてしまったら、私はきつと、もっと弱くなる。」

志保の目からはとめどなく涙が溢れてくる。志保は耐えていたつもりだが体は嘘をつかない。

いつの間に関自分はこんなに泣き虫になったのだろうか、と考える。

「ほらな。辛いんだろ？言ってみる。」

決心した。

「工藤くん・・・昨日ね・・・」

志保は話した。昨日の出来事を。全て。

志保から話を聞き終わった新一は怒っていた。その男に対して、いや志保を守れなかった自分に対して。

志保を抱きしめながらもその腕には怒りがこもっていた。

「志保。学校行くぞ。」

「でも・・・」

「俺、志保の前でそいつと決着をつける。」

「決着って、喧嘩？」

「いや、ちゃんと言ったよ。志保は俺のだ！って・・・

俺が悪かったんだよ。今まではつきりと言わなかったから。とにかく行くぞ。」

有希子と博士はそんな2人を黙って見送った。

新一と志保が教室についた頃、もう授業は始まっていた。

午前中の授業が終わると、新一は志保の手を引いて《昨日の男》のクラスへ向かう。

そして、勝手にそのクラスへ入り、男を探して男の前に立つ。

「え・・・工藤と・・・宮野さん・・・」

3人の周りの人たちは騒いでいる。

「わー工藤くんだ！！」「宮野さんもいる！！」

だが、しばらくして新一たちの雰囲気を感じ取ったのか、騒いでいた人たちも静かになった。

「なんだ？お前らの教室はここじゃねーだろ？」

「なんだ？じゃねーよ！！お前、昨日志保に何した？」

「何したって・・・ああ、あれ？キスしたんだよ。なにか問題あったか？」

この言葉に新一の怒りは爆発した。

「ふざけんな！！志保は俺のだ！人の女に手ーだしてんじゃねーよ！！」

次こんなことやったやつは俺が絶対ゆるさねー。」

周りは啞然としている。こんなにキレている工藤新一を今まで見たことがなかったのだ。

新一の前にいる男も、新一がここまでキレるとは思っていなかったらしく驚いている。

「こいつに手え出したやつは絶対許さねー。」

新一は言いたいことを言い終わると志保の手を強く握ってその教室を出て行った。

教室の前には多くの人が見に来ていたが気にしなかった。

（工藤くん・・・あなた一人でかっこつけすぎよ。でも、かっこよかったわよ。）

ふふっ、と志保が笑う。

それに気づいた新一は足を止め、志保の顔を見た。

「何笑ってんだよ。」

そう言った新一の顔はほんのりと赤かった。

「ありがとね、探偵さん。まあ、あの台詞はかなりベタだとは思ってたけどうれしかったわ。」

「そうか。それはまあ、よかった・・・」

チュツ。

志保は両手で新一の顔を自分の顔に近づけ、軽くキスをした。

志保からの初めてのキスに照れる新一。

「これは今日のお礼よ。」

その後、新一と志保は教室に戻り、2人のことを一部始終見ていたクラスメイトに冷やかされたのであった。

怒り（後書き）

蘭の幸せ

学校が終わり、新一と志保は阿笠邸に着いた。

「博士、ただいま。」

「邪魔するぜー。」

2人がリビングに入ろうとすると博士ともう1人、女性の声が聞こえた。

「しーんちゃん、しーほちゃんおかえり。」

「なんで母さんがここにいんだよ。」

「だって、家にいても1人で暇で暇で・・・。」

「だったら、父さんのところへ帰ったらいいじゃねーか。だいたいいつまでいんだよ。」

新一は呆れ顔で有希子に言う。

「優作のところにもあの人は私なんかより仕事なのよ。」

それなら、ここで博士や志保ちゃんと話してるほうが楽しいわ。

それとも何？私がここにいちやダメな理由があるの？」

「別にねーけど。」

（早く帰ってくれねーかな。このままじゃ志保と何もできねーじゃねーか。）

新一は本音は言えなかった。こんなことを言ったら余計に冷やかされるのを知っているからだ。

「それより、新ちゃん。ちゃんと言ったの？志保ちゃんは自分の彼女だつてこと……」

「ああ。言ったよ。怒鳴っちまったけどな。はっきりさせておいたぜ。」

「もう。志保ちゃんかわいいんだからすぐに男が寄ってくるの分かってたでしょう。」

いくら自分が志保ちゃんの彼氏だからって油断してたらほかの男の子にとられちゃうわよ。」

「う……」

その2人のやり取りわ横で見ていた志保はクスッと笑っている。

「そうそう、そういえば蘭ちゃん。さっき新ちゃんたちが帰ってくる前に」

買い物に行ってたんだけど、帰ってくるのときに見かけたわよ。男の人が横にいたみたいだったけど

蘭ちゃんもついに彼氏ができたのね。」

「「え!?!」」

「ほー蘭くんもか。志保くんも新一くんも蘭くんもそういつ年頃なんじゃないー。」

若いつていつのはうらやましいのー。」

新一と志保は顔を見合わせた。そんなこと、蘭から一言も聞いてなかったのだ。

「明日、蘭に聞かなきゃ。」「そだな。」

「蘭、おはよう。」

「おはよう。志保、新一。」

「ちょっと、私たち蘭に聞きたいことあるんだけど・・・。」

「え?何?」

「蘭、彼氏いるってほんとか?」

新一、志保、蘭は今学校に向かって歩いている。

そこで、昨日の有希子の話から早速聞きたかった質問をした。

「……うん。昨日からだけど。今日、学校で言おうと思ってたのに。」

でも、なんで知ってるの？」

「昨日、母さんが蘭が男と歩いてるのを見たって言ってたから……」

なあ、それより蘭。その彼氏ってどんなやつだ？高校の奴か？」

「え……と、新出先生だよ。新一も知ってるでしょ。」

「え？ええええええ！？新出先生ってあの？」

「そうだよ。そんなに驚かなくても……」

新一が驚いている横で志保も驚いている。

(新出先生つてたしか……前にベルモットが変装してた人よね？)

「前からたまに会ってたんだけどね、昨日偶然お店で会って告白されたの。」

蘭は顔を赤く染めながら言う。

「じゃあ、蘭も幸せなのね。」

「うん！！幸せだよ。これからは志保たちに負けなくらいもって幸せになるんだから！」

「そう。よかった。」「よかったな、蘭。」

「うん！ありがとう。あつ！！園子だ。園子にも報告してくるから。」

そういうと足早に蘭は2人のもとから去っていった。

数メートル先で蘭と園子が騒いでいるのが見える。

学校についたあとも4人の話の内容は新出先生と蘭のことでもちきりだった。

そこでふと園子が言葉を漏らした。

「私たちって、なんだかんだで青春エンジョイしてるわよね。」

私は真さんと、蘭は新出先生と、志保は新一くんと・・・

ついこの間までは考えられなかったわ。」

「そういえば和葉ちゃんも服部くんと恋人になったらしいよ。」

「なんだか、うまくいきすぎてて怖いわね。」

「そうだな・・・」

ははは、と4人は苦笑する。だが、その顔にはどこか幸せな表情があった。

この幸せが続きますように・・・

蘭の幸せ（後書き）

今回は短めです。

蘭ちゃんやっとなんか幸せになりました。よかったよかった。

でも、最後の終わり方、どうしようか迷った結果

あぁなりました。ちょっとおかしいような・・・

謎の男（前書き）

8月

謎の男

「ねえ、新ちゃんと志保ちゃん。ちょっとお願いがあるんだけど・・・」

新一は嫌な感じがした。

「今日さー・・・」

「今日は俺と志保は出かけるから無理だ。」

有希子の言葉を予想したかのように新一が話を遮る。

「何よ。いつもデートしてるじゃない。たまにはいいでしょ？」

それに、志保ちゃんも一緒に行けばあの子たちも喜ぶわよ。」

「あの子たち？」

「そう！この間ね、小さな探偵くんたちと約束しちゃったの。」

今度、海に連れて行ってあげるって。

で、約束した日が今日なんだけど

昨日、優作から電話があって今日、日本に帰ってくるって言うのよ。」

だから空港まで向かえに行かなくちゃいけないって。」

「え？父さんも帰ってくんの？」

「そうなのよ。ほんと勝手よね。帰ってくるならもっと早く言ってくれないと。」

ね？だから、お願い！！送り迎えは私がするから。」

勝手なのは母さんだろ・・・と、心の中で新一は突っ込む。

「まあ、いいんじゃない？私も歩美ちゃんたちに会いたいし。」

「そうだな。じゃあ行くか。」

「ありがとう。2人とも。」

そして、2人は少年探偵団の3人と一緒に海に行った。

蘭と園子も誘ってみたが蘭は新出先生と付き合って3ヶ月の記念と
いうことでデートらしく、

園子はおねーさんと買い物に行く予定がある、ということ断られた。

「志保おねーさん、ちょっとここにいてもいい？」

ビーチパラソルの下にいる志保に歩美が話しかけてきた。

「いいけど、どうしたの？歩美ちゃん。」

「久しぶりに2人で話したくて・・・会うのも久しぶりだし。」

「そうね。私も歩美ちゃんたちに会いたかったわ。」

志保の言葉を聞いて満足そうな歩美。

「志保おねーさん、新一おにーさんに好きって言ったことある？」

「え？そういえばないわね・・・でも、どうして？」

「だって、志保おねーさん、哀ちゃんるときから全然素直じゃなかったから。」

それに周りからみたら哀ちゃんがコナンくんのこと好きなんだってすぐ分かるのに

コナンくんだけは哀ちゃんのキモチ知らなかったんだよ？

それくらい鈍感なんだから、志保おねーさんもちゃんと好きって言わないと

新一おにーさん不安になっちゃうよ？」

志保は10歳も年下の親友の言葉に驚いた。なんでこんなに自分達のことをわかってるのだろうか。

歩美と志保は海の中で光彦と元太と遊んでいる新一を見ている。

「志保おねーさん。歩美、わかるんだよ。2人とも大切な友達だから。」

ほら、今言ってきたら？」

「今？言えないわよ。そんなこと・・・」

「それなら歩美が代わりに言っただけよ？」

「え？それは・・・」

「嫌でしょ？ほら！」

「わっ！！」

歩美が志保の背中を勢いよく押したせいで志保の体が自然と前に進む。

足が絡まり志保は転びそうになる。

「おっと・・・、大丈夫ですか？」

転びそうになった志保をギリギリで支えたのは新一・・・ではなく、

新一とそっくりの顔をした男だった。

志保はその顔を見て一瞬驚いたが、すぐに小さな笑みをこぼした。

「あ……ありがとう。それにしても久しぶりね。怪盗さん？」

『怪盗』と呼ばれたこの男は全く驚いた様子もなく、落ち着いて返事をする。

「久しぶりだね。志保ちゃん。よかった。ちゃんと戻れたんだ。」

「ええ。あなたのおかげでね。もう一人、元の姿に戻った人があそこにいるわよ。顔でも見てきたら？」

「やめとくよ。あまりあの名探偵に深く関わるとこっちの身も危ないしね。」

おっ！やばい。こっちに気づいた。それじゃあ、またね。志保ちゃん。」

「ええ。助かったわ。ありがとう。」

そこへ新一が志保のもとへとやってきた。少し威嚇するような表情で。

「あの男知り合いか？」

「少し会ったことがあるだけよ。」

「そうか。」

新一は心配そうな顔をしている。

「大丈夫よ。前にも言ったようにあなただけで精一杯だから、

みんなが言う『浮気』なんてことしないわよ。」

「わーってるよ。」

「そう。それじゃあ、そろそろ帰る準備しましょう。有希子さんが迎えにくるわよ。」

「そうだな。オメエら、片付けるぞ。」

そんな中、志保と歩美はみんなと少し離れたところで話していた。

「どうして言わなかったの？」

「あんなこと恥ずかしくて言えるわけないじゃない。」

「だけど、志保おねーさんが言ったら新一おにーさんも凄く喜ぶと思っのに……」

「いつか言っわよ。」

「ほんとに?」

「ええ。じゃあ、有希子さんも来たみたいだし帰るわよ。」

「はい。」

それから新一と志保と少年探偵団の3人は有希子の車で帰っていた。

謎の男（後書き）

この話のタイトルが謎の男ってなってますけど・・・
全然謎じゃないですよね。
ははは・・・

疑い（前書き）

9月

疑い

みんなで海に遊びに行った日から二週間がたったこの日。

志保は朝から少し体がダルくて自分のベッドの上でゴロゴロしていた。

今日は博士は学会、新一は目暮警部からの呼び出しで、有希子は夫の優作と出かけている。

もう、外を見てみると空が暗くなってきている。

「そろそろ、博士も帰ってくる頃ね。夕食の買い物しなきゃいけないわね……」

工藤くんも有希子さんたちも夕食はどうするのかしら。」

一人、今日の夕食のメニューを考えつつ、出て行った。

買い物を済ませ、阿笠邸に向かって歩き出す。

そのとき、誰かに名前を呼ばれた気がしてその方向へと目を向けると笑顔で志保の方へと近づいてくる人を見つけた。

「しーほちゃん。お買い物？」

「ええ。あなたは愛しの彼女とお出かけかしら？」

「違うよ。俺は一人でブラブラと歩いてただけ。家にいても暇だったから。」

それに彼女なんていないしね、と言いながら志保の横を歩く。

「いいわね。暇があるなんて。それにしても、次の獲物は決まったの？」

すると、男は真面目な顔つきになった。

「俺、もう怪盗キッドは辞めたよ。父さんの仇の組織は志保ちゃんたちがつぶしてくれたし。」

いくら理由があったとしても人のものを盗むのは立派な犯罪だからね。」

「そうよね。どんな理由があっても犯罪は犯罪。それは私もちゃんと分かってるわ。」

志保は悲しそうに言う。

「だけど、あなたがそんなこと言ったら探偵や警察にとっては少し寂しいかもしれないわよ？」

「探偵って……あの名探偵のこと？」

「そうね。少なくともあの探偵さんはあなたとの勝負が楽しかったみたいだから。」

「はは・・・俺もあいつがいるとやる気が出てきて楽しかったぜ。」

「あなた達ってほんと悪趣味よね。」

それじゃあ、そろそろ探偵さんも帰ってくるころだと思うから私は帰るわ。」

「うん！今度また会おうね。」

志保は男に背を向けて歩き出した。それを男は黙って見送っていた。

しかし・・・

ガシャ！！

男も志保に背を向けて歩きだそうとしたとき後ろで何かが落ちるような音がした。

振り向いてみると、そこには倒れている志保がいた。

「志保ちゃん！！！」

走って志保に近づく。志保の息は荒い。

額を触ってみるとかなり熱かった。

「志保ちゃん・・・凄い熱・・・」

男は志保を抱きかかえ、阿笠邸に向かって行った。

2人が阿笠邸についたとき家にはまだ誰もいなかった。

そんなときに勝手に家に入るの少し躊躇われたが、志保をベッドに寝かせるだけ……と思い

志保のカバンに入っていた鍵でドアを開け、入っていった。

「黒羽くん……ありがとう。私はもう大丈夫だからあなたは帰って。」

「うん。そうするよ。それじゃあ、ちゃんと眠ってね。また今度。」

「ええ。」

バン!!

男が帰ろうとしたとき勢いよく志保の部屋の扉が開いた。

その瞬間、部屋の空気が冷たいものへと変わった。

志保の部屋に入ってきた新一が男をにらんでいる。

「……誰だ？」

「俺？俺は志保ちゃんの知り合い・・・みたいなものだよ。」

志保ちゃん、さっき道で倒れて。凄い熱だったから家まで送ったんだよ。」

「熱？そうか、サンキューな。もう多分大丈夫だから、後は俺に任せろ。」

「あ、ああ。それじゃあ、志保ちゃんお大事に。」

「ありがとう。」

その男は静かに帰っていった。

(工藤がまさか来るとはな・・・焦ったぜ。にしても、あの名探偵と志保ちゃんってもしかして・・・)

もしそうだったらやばくねーか？志保ちゃん、大丈夫かなー)

その頃新一と志保は・・・

「志保、大丈夫か？こんな熱があんのに、外にでるなよ。」

「夕食を買いに行くだけだから大丈夫だと思ったのよ。」

「そうか。それなら、ゆっくり休め。俺はオメエに聞きたい事があ

るからな。

志保が起きた後話を聞かせてもらっぞ。」

「そうね。」

志保は心配だった。さっきの出来事を新一が誤解してたら・・・

それからしばらく眠れなかったが新一が傍にいてくれてようやく眠ることが出来た。

喧嘩

「で？あの男は誰なんだ？」

1時間後、志保が眠りから覚め、体調も少しよくなったところで新一は先ほどの男の話を書く。

「彼はただの知り合いよ。あの人も言ってたでしょ。」

私が道で倒れてるのを見て、ここまで運んでくれたのよ。」

「あいつ、高校のやつか？」

「違うわ。でも、昔からの知り合いよ。」

「昔から？それって、灰原になる前からか？」

志保はこの言葉でしまった、と思った。

新一は志保が幼いころから組織に入ったのを知っている。

組織以外に知り合いなどほとんどいなかったのだ。

「とにかく、彼とは何もないから。この間海に行ったときにも言っただじゃない。」

そんな関係じゃないって。」

「あいつ、あのとときのやつか！？」

「ええ。・・・話は終わり？私もう少し眠ってもいいかしら？」

「え？ああ、悪かったな。じゃあ、俺も帰るよ。またな。」

志保は新一が去ったあとの扉を見つめる。

（はぁ・・・工藤くん、いつも私のこと信じてるって言うてくれるけど

やっぱり不安なのかしら。

歩美ちゃんの言うとおり、言葉にしないとダメね。）

新一は阿笠邸を出たあと、志保の部屋にいた男のことが気になっていた。

（あの顔・・・知らないはずなのに知ってる気がするんだよな。

志保が灰原になる前から知ってるってことは・・・

組織にかかわりのあるやつか？

志保は子供のときから組織以外の人間と関わることはなかったらしいし。

それに、あの男、みよーに志保に慣れなれしかったし。

まあ、志保が浮気なんかするわけねーし。あんまり気にすることでもねーか。

けど・・・やっぱり不安なんだよな。志保が俺に好き、なんて言ってくれたことないし。

ああークソツ！！俺があいつを信じねーでどーすんだよ！！

！！そういえば、俺あいつにプレゼントとかあげたことねーな。

明日にでも探してみるか。)

新一は志保の喜ぶ顔を想像しながら自宅へと帰っていった。

次の日、新一はクラスの女子たちと話していた。

「なあ、もしプレゼントもらうとしたらどんなのがうれしい?」

新一は志保や志保の親友の蘭・園子に見つからないように

何人かの女子に同じ質問をしていた。

しかし、志保は気づいていた。

その日新一は先に一人で帰ってしまった。

「どうしたのかな、新一。志保にも何も言わないで先に帰るなんて」

「もしかして、新一くん浮気？」

園子が笑顔で冗談を言うのを蘭がフォローした。

「それはないよ。新一、志保にぞつこんだもん。もう！園子もそんなこと言わないの。」

「冗談よ。志保もそんなことないって新一くんを信じてるんだから。」

私はただ、ちょっとアツアツな2人をからかっただけよ。」

蘭と園子はそう言うが、志保は少し寂しそうな顔をした。

周りの人はその志保の表情の変化に気づかなかった。

志保は蘭と園子と買い物をしていたため、少し帰りが遅くなった。

園子と蘭とも途中で別れ、一人で阿笠邸に向かう。

もうすぐで着くというとき、ポンっと肩に手が置かれた。

振り向くと昨日の男がいた。

「志保ちゃん。お帰り。もう風邪はよくなったの？」

「ええ。昨日はありがとう。ゆっくり寝たら一日で治ったわ。それで？今日はどうしたの？」

「ん？今日はね、昨日のこと言い訳してきたんだけど。」

「言い訳？」

「うん！あの名探偵・・・工藤って、志保ちゃんの彼氏でしょ？」

昨日、あのタイミングでアイツ帰ってきたから変な誤解して喧嘩になってたらどうしよう

って思ってる・・・」

「じゃあ、またこんなところで話てるのが彼に見られて誤解されないように」

あなたは帰ったほうがいいんじゃない？それと・・・

新一は学校が終わった後急いである店に行った。

そこにはかわいらしいアクセサリーがたくさん売っているところで、

買い物している客は女性ばかりだった。恥ずかしいというキモチを抑え、目当ての商品を探す。

その店で、なんとか気に入った商品を見つけプレゼント用にラッピングしてもらい店をでた。

店を出た頃空はもう暗くなっていた。

(志保、家にいるかな?)

新一は先ほど買ったプレゼントを大事にカバンのなかにしまい阿笠邸へと足を進める。

あと、この角を曲がれば阿笠の家だということで話声が聞こえた。声の主はすぐにわかった。

間違えるはずもない。あれは志保だ。そしてもう一人は昨日のあの男だ。

こっそり見てみると、男は学ランを着ている。

「・・・は帰ったほうがいいんじゃない?それとバレないようにね。

あなたはもう顔を見られてるんだから。バレるのも時間の問題よ。」

「大丈夫だよ。そんな簡単につかまらないよ。だって俺はあの組織にも見つからなかったんだよ?」

志保ちゃんには見つかったけど。」

新一は隠れて2人の会話を聞いていた。

(バレる?あの組織?志保に見つかったって事はアイツの言っているのはやつらのことか!!)

なんでアイツがやつらのこと知ってた!?やっぱり関わりあるのか?)

「それより、早く帰ったほうがいいわよ。」

もうすぐあなたの天敵の名探偵さんも帰ってくると思うから。」

(天敵?俺が?)

「そうだね。それじゃー志保ちゃん、またね。」

「ええ。もう会わないと思うけど。」

「まだそんなこと言ってんの?変わらないね。志保ちゃんは。」

哀ちゃんの時きもずっとそんな感じだったよねー。」

「ごめんなさいね。可愛げのない女で。」

「そんなこと言ってないじゃん。ただ、素直になっただらもっと可愛いのにって思っただけ。」

「はいはい。じゃあね。」

志保は冷たい一言を残して家に入っていった。

男は志保が家の中に入ったのを確認してから去っていった。

(クソ!! ということなんだよ!)

新一は頭を抱え込む。

(とりあえず、志保に聞くしかないか・・・)

何も話さないだろうけど、聞かねーと。

もしあの男が組織の残党とかだったら志保の命があぶねーし。(

新一は阿笠邸の玄関の扉を開けた。

(げ・・・工藤?もしかして話聞いてたか?やべー・・・)

男は自分が志保と別れた後、新一が阿笠邸に入っていくのを見ていた。

(昨日に引き続きなんなんだよ、あの探偵は・・・)

「志保」

志保が夕食の準備をしているとき新一が帰ってきた。

とは言っても、自分の家ではないのだが・・・

「お帰り。遅かったのね。どこ行ってたの？」

「んなことよりお前に話がある。そこに座れ。」

新一は自分が座っているソファの向かいにあるソファを指さした。

志保は言われたとおり座る。

「さっき、お前と昨日の男が話してるのを聞いた。」

「!?!」

「あれはどういうことだ？あいつは何で組織のことを知ってる？あいつは何者なんだ？」

「・・・」

「あの話の内容からして組織に関わりのあるやつだということには分かった。」

それで志保の前からの知り合いというのも納得がいく。」

「盗み聞き？悪趣味ね。」

「俺の質問に答える。ちゃんと話せ。」

新一が急に声を荒げたので、志保はビクツとなったが、冷静に口を開く。

「・・・あなたは、彼が誰なのか知ってどうするの？」

「俺は、お前が危なくないようにいつからお前を守る。」

「工藤くん、あなた何か勘違いしてるみたいだけど彼は危険な人物じゃないわ。」

「・・・これ以上、私の口から彼のことについては何も言えない。」

「なんでだよ!!！」

「人の秘密を私が勝手に話しちゃいけないじゃない。」

それに、あなたにだって秘密の二つや三つあるでしょっ?」

「ねーよ!!--」

「そう。それじゃあ今日の昼休みのあの行動はどう説明できるの？」

それと、今日私達に何も言わずに帰って

今までなにをしてたのか、言える?」

「クツ・・・」

その新一の反応に志保はまた少し寂しそうな顔をした。

「私は何をしようが、誰と話そうがあなたに関係ないじゃない。」

「関係ないだと？」

「ええ。それに、あなただって・・・」

もういいかしら？夕食を作ってる途中なの。工藤くんも食べていく？」

「いや、今日は帰る。」

「そう。」

新一は黙って阿笠邸を後にした。

志保は新一が帰ったあと、博士の分の夕食だけを準備し、自室に戻った。

（私・・・最低ね。なんであんなこと・・・）

悪いのは工藤くんを不安にさせてる私じゃない。私が悪いのに。

男と男の話

次の日、志保は新一とは別々に学校に行った。

待ち合わせの時間に新一が来なかったのでまた朝から目暮警部にでも呼び出されたのだろうと思ひ

後から来た蘭と園子と一緒に登校したのだ。

しかし、新一は事件があつて遅れるときや休むときは必ず志保に連絡をする。

なのに、その連絡は学校の授業が3時間目の授業になつてもこなかった。

志保は新一が風邪でも引いたんじゃないかと心配になり携帯に電話をしたが

携帯からはずっと同じ女の声が聞こえるだけだった。

『ただいま電話に出ることができません。ピーとなり・・・』

次に工藤邸にもかけてみたが有希子が電話にでて

さっき出て行ったわよ、と言われた。

志保の頭の中は嫌な事ばかりが思い浮かぶ。

そんなとき授業中で静まり返った教室に音が響いた。

ガラっ！！

志保の目に入ったのは疲れた顔をした新一だった。

「先生、すいません。ちょっと、呼び出されて・・・」

「そう。お疲れ様。」

志保は自分の隣に座ろうとする彼にいつものように挨拶をしようと
思ったが

昨日、気まづくなったのを思い出し、俯いた。

そんな志保を新一も一目見て黙って自分の席に座った。

新一が席に座ったあとも2人は一言もしゃべらなかつた。

目線を合わせることも全然なかつた。

（あの2人どうしたんだろうね・・・）

（なんか、やな雰囲気な気がするけど。もしかして喧嘩？）

蘭と園子は2人の様子を見て心配している。

窓際の席の新一はボー、と窓の外を見ているようだ。

（！！！！）

いきなり新一の顔が変わった。

そして、先生に、また呼び出された、と一言言って教室を出て行った。

新一は教室を出て、急いで校門の前まで走っていった。

さつき窓の外を見ていたら校門の前に今まで考えていた人物が立っているのが目にはいった。

「よう……」

「あ、工藤くんだよな？」

「ああ、さつき教室で外眺めてたらお前を見つけた。

……ちよつと話してーことあんだけど、今から大丈夫か？」

「うん。俺もそのためにここに来たし。」

「じゃあ、あの店でいいか？」

新一が指さしたのはファミリーレストラン。

男は新一の言葉に頷き、新一の後ろを黙ってついていく。

「いらっしゃいませー」

定員の声が店全体に響く。

新一と男は店の一番奥のに席に座る。

「それで？わざわざ俺の学校に来てまでどうしたんだ？」

新一が話し始める。

「んーまあ、あの学校まで行ったのは志保ちゃんの様子を見るためでもあったんだけど・・・」

志保ちゃんどう？」

「なんで、お前にそんなこと言われねーといけねーんだ？」

それに、んなことよりお前のこと教えてほしいんだけど。」

「ああ、そうだね。俺の名前は黒羽快斗。高三だから一緒だね。」

「黒羽か。俺は工藤新一。」

「知ってるよ。志保ちゃんからいろいろ聞いてるから。志保ちゃんの彼氏なんだよね。」

新一は黒羽の口から『志保ちゃん』と言われるたびに眉がピク、つとあがる。

「そうだけど。黒羽、志保とどういう関係だ？」

「ただの知り合いだよ。」

「知り合いならどうしてあの組織とかいう言葉が出てくるんだ？それにバレないようにって、」

「なにか隠してるだろ。」

「え……やっぱり昨日の話聞いてた？」

「ああ。」

「そつかあ。それで聞いても何も言わない志保ちゃんと喧嘩になって志保ちゃんがああ常態か……」

新一はじつと黒羽を見る。

「志保ちゃんは優しいね。そんなことなら言っちゃってもよかったのに。」

「はあ？なにを……」

「俺の正体。」

「お前の正体？」

「あなたも知ってるはずですよ。白い服を着た……」

新一は首をかしげ、少し考えこむ。

「名探偵。少しは分かりましたか？私の正体。」

この声、この口調、すぐに新一はピン！ときた。

「お前……もしかして……」

怪盗キッドと志保の秘密

「お前……もしかして……キッドか？」

しばらくの沈黙。そして黒羽が口を開いた。

「ご名答。さすがですね、名探偵。」

「その声とその嫌なしゃべり方は忘れたくても忘れられねーぜ。」

「ははは、そうだよな。それは俺も一緒。工藤の俺を追い詰めるときの顔と声だけは」

ものすごく恐ろしかったから忘れられないよ。子供のくせに迫力あんだよな。」

黒羽は口調を元に戻し、苦笑する。

「それで、俺の正体を知った君はどうする？俺を警察に突き出す？」

「それはオメエの話を聞いたあとで考えるよ。」

「そうか。それじゃあ、全て話すしかないみたいだね。」

新一と黒羽は注文した飲み物を何口か口に入れたあとお互いの目を見た。

「じゃあ、まずは俺がキッドになったわけから話す。」

新一は黙ってうなずく。

「俺がキッドになったわけは親父の死が関係している。

俺の親父は有名なマジシャンだった。だが、あるとき殺されたんだよ。」

警察の発表では事故死ってことになったが、後で俺が一人で調べると

親父は何者かに殺されたことがわかった。

それからも調査を続けていくうちに親父を殺したのはある組織だということもわかった。」

新一は黒羽の言う『ある組織』にすばやく反応した。

その新一の表情を見ながら黒羽はまた話続ける。

「調べていくうちにその組織はかなりの強敵だと知った。

それでも俺は黙って見ているわけにいかなくて組織のアジトへ乗り込んだ。」

とりあえずは探りのつもりで。

だが、アジトへ潜り込んだとき黒い服を着た男たちを見かけたんだ。」

その男たちは全員手に拳銃を持っていた。見つかったら俺を待

っているのは《死》。

いそいで隠れようとしたときに俺の腕は引っ張られた。そして、部屋の中に無理やり入れられた。

俺はそこで本当に死を覚悟したよ。

だけど、俺の腕を引っ張ったやつは俺の顔を見て静かに言った。

『早く逃げなさい。ここは戦場よ。あなたが誰か私には分からないけど』

少なくともあなたが来るべき場所じゃない。』

って……」

「……それが志保……か？」

「ああ。でも、俺は諦められなかった。それに志保ちゃんは気づいたんだ。

『そんなこと言っても無駄よね。あなたは死ぬのも覚悟でここに来たんでしょうから。』

でも、今日は帰りなさい。

そんな白い体では目立ちすぎるわ。こここの人間は見た目も中身も真っ黒なの。

また来るなら次はなるべく地味な色の服を着てくることね。

そして、俺は気づいた。この女性は組織の一員じゃない。

一員なのは形だけで、心は違うんだと。

瞳を見ると、どこか悲しそうで、怯えているようだった。

俺はそんな彼女を守ってやりたくて、自分の命よりも・・・

それから何度か会いに行った。

けど、最後に俺が会った志保ちゃんは今まで見たことないような表情をしていた。

何があったのか聞くと、お姉さんが組織に殺された・・・って。

涙も流さず、じっと床を見つめて・・・

俺は志保ちゃんにかける言葉もなくて、俺はただただ見守るしかできなかった。

そんなとき、扉の向こうから足音が聞こえ、志保ちゃんの部屋の前でとまった。

俺はとっさに隠れた。

そしたら、黒い服を着た男2人が志保ちゃんをどこかへ連れて行ってしまった。

拳銃を志保ちゃんの頭に突きつけたまま・・・

俺は助けたかったけど、今行ったら志保ちゃんは拳銃で殺されるかもしれない。

だけど、そのときに気づくべきだったんだ。

志保ちゃんが男に連れて行かれる直前に机の上にあった薬をポケットに入れたことに・・・」

「それって、もしかして・・・」

「・・・そう。工藤も飲まされた薬。アポトキシン。」

「!?!」

「志保ちゃんが連れて行かれたあと、俺も気づかれないように男達の後を追った。」

志保ちゃんは別の部屋に入れられた。2人の男のうち1人の長い髪の男の方が

志保ちゃんに話してた・・・

『お前はまだ殺すわけにはいかない。薬の研究を進めてもらわねーといけねーからな。』

だが、自分の子供と姉が死んだ今、お前にはできないだろう。

しばらくはここで体を休めておけ。』って……」

話を聞いていた新一も話をしていた黒羽も唇をかみ締めている。

「それから何日か後にまた行ってみると、組織の人間がよく《シェリー》の話をしていた。

シェリーが逃亡した、と。

俺は志保ちゃんにコードネームのことも聞いていたから

そのシェリーというのが志保ちゃんだってことがすぐにわかった。

そして、俺は必死で志保ちゃんを探した。どれだけ探してもいなかった。

俺は諦めた。でも、何日か後にまた会えたんだ。もうそのときは《志保ちゃん》から

《哀ちゃん》に変わってたけど。

再開してから哀ちゃんに聞いた。薬を飲んで工藤も志保ちゃんも幼児化したって。」

「なるほどな。キッドがコナンの正体を知ってる訳がやっと分かったぜ。

それと、志保がお前のことを全然話さないわけも。

『俺はキッドを捕まえる』ってずっと言ってたからな。

俺が黒羽の正体を知ったら、お前を捕まえるって思ったんだろ
うな。」

「で？どうする？俺を警察に連れて行く？」

「いや、そんなことしねーよ。志保も嫌だろうし。」

「ほんと、志保ちゃんは優しい人だよね。」

だから俺は志保ちゃんを好きになっちゃったんだよ。」

「はあ？」

新一は思いっきり機嫌悪そうな顔で黒羽を睨みつけた。

黒羽はそんなこと気にすることもなくへラへラしている。

「志保だけはお前に盗ませねーぞ。」

「もう怪盗キッドはやめたよ。組織もつぶれたわけだし。」

だから、今度は黒羽快斗として盗みに行こうかな。」

「オメエにはやらねーよ。志保だけは俺が命に代えても守るからな。」

「分かってるよ。わざわざ志保ちゃんのやっとな手に入れた幸せを奪
うわけないじゃん。」

それより、喧嘩したまんまなんだろ？

早く帰って仲直りしたほうがいいんじゃない？」

2人は窓の外を見る。もう日が沈みかけている。

「そうだな。早く帰って志保に会いたいし。」

「そうしてあげて。じゃあね。」

「ああ。ありがとな。また今度会おうぜ。」

「じゃあ、志保ちゃんも連れてきてね。」

「わーってるよ。それと、ありがとな。認めたくはねーけど

アイツが組織にいるころアイツの心を少しでも救ってたのはお前だ。感謝してる。」

「そうだったらいけど・・・って、そんなこといいから早く帰れ
つてー！」

黒羽に礼を言い、新一は自分が注文した分の料金を払って急いで帰って行った。

志保は今日一日暗かった。下校中、そんな志保を心配した蘭と園子が話しかける。

「志保、新一くんと何かあった？今日新一と話してなかったし、目もあわせなかったよね。」

喧嘩でもしたの？」

「・・・」

「そう。もしよかったら話聞くよ。」

「ありがとう。でも今は大丈夫よ。」

私が悪いの。今日時間があれば話してみるわ。それでもダメだったら話聞いてくれる？」

蘭と園子は志保の様子を見ると、今すぐ聞きたかったが

それ以上は何も聞かなかった。

3人はそれぞれ自宅へと帰って行った。

志保が阿笠邸に向かってしていると新一の姿が見えた。

新一は工藤邸の門の鍵を開けて中にはいるうとしてしている。

志保は新一に向かって走り出す。

ぎゅっ！！

「おわっ！」

志保は新一に後ろから抱きついた。

「志保？」

仲直り

一瞬、何が起こったのかわからなかった新一だが

ゆっくりと後ろを振り向くと特徴的な赤みがかった髪が見えた。

「志保？」

新一が声をかけても返事はない。

しかし、顔は見えないが肩が揺れているのを見て泣いているのだとわかった。

「志保、どうした？」

「……ないで。」

「え？」

「行かないで。お願いだから……傍にいて……お願い。」

志保は弱弱しく言った。

それから、少しの間2人とも声を出さなかった。

しばらくして志保が新一を抱きしめていた手を離す。

「ごめんなさい、わがまま言って。」

そうやって新一に背を向け、帰ろうとしたとき

パシー!!

新一が志保の手を掴み、自宅へと引っ張っていった。

ボタン、と音を立てて玄関の扉が閉まる。

それと同時に新一は志保の体を抱きしめる。

「工藤くん……」

「志保、ゴメン。信じてあげられなくて。勝手に嫉妬して。」

「くど……くん?」

「今日、黒羽に全部聞いた。志保たちがいつ知り合ったのか、どう
いう関係なのか、

それと黒羽がキッドだったって事も。

志保が俺に黒羽のことを何も話さなかったのも

何も知らない俺が黒羽の正体を知って、警察に連れて行くって
思ったからだろ?」

「……」

「ゴメンな。」

2人は黙り込む。志保は新一の顔を見たいが、抱きしめられて見ることができない。

「黒羽くんも重要なことあなたに言っていないようね……。」

あの薬……アポトキシンの資料を研究所から持ってきてくれたのも彼なのよ。

危険を冒してまで。ベルモットと一緒に探してくれたそうよ。

だから、彼がいなかったら今も私達は小学生だったかもしれない。
「」

「そうか……アイツに感謝しねーとな。」

「私は黒羽くんにも工藤くんにも助けられっぱなしね。」

「志保？俺はどこにもいかねーぜ。ずっとお前の傍にいて守るんだからよ。」

「私も……ごめんなさい。あなたを不安にさせてしまって。」

でも、工藤くんは何も心配しなくていいの。

私には……私の目にはあなたしか映ってないのよ。ずっと前から。
「」

「それは俺も一緒。」

新一はやっと志保の体を離し、自分のカバンに手をやった。

「はい、これ。プレゼント。開けてみ。」

目の前に出された綺麗にラッピングされた小さな長方形の箱。

志保は新一から受け取り、ゆっくりと丁寧に包んであった紙をはがす。

「え……これ……」

開けてみると、そこに入っていたのはリングがついたネックレスだった。

「どつだ？」

「……」

「気に入らなかったか？」

志保がなにも反応を見せないので気に入らなかったのか、と新一は考えたが

すぐに左右に首を振ったので安心した。

「ほんとは指輪にするつもりだったけど、サイズが分からなくてよ
い。」

びっくりさせたかったから志保に聞くわけにもいかなーし。

でも、これなら指輪もついてるしいいかなって……」

そこでいきなり志保が顔をあげた。

「ありがとう。大切にするわ。」

綺麗な笑みを新一に向ける。

「おう！なくすなよ。アクセサリーショップに男一人で入っていくの恥ずかしかったんだぜ。」

その様子を想像してクスツ、と笑う志保。

「見てみたかったわね、あなたが恥ずかしそうに店に入るところ。」

でも、どうしてネックレスにしたの？」

「え？あー、クラスの女子に聞いたんだよ。」

プレゼントでもらってうれしいのは何かって。俺、女子の好みとかわからねーし。

それで、指輪とかネックレスとかとにかく身につけられるものがうれしいって言うから。」

「なるほどね。あのときあなたがコソコソしてたのはそれを聞くためね。」

「ああ。蘭たちに言ったら、口がすべって志保にバレるかもしれねーから」

あんまり志保と関わりのなさそうなやつに聞いたんだよ。」

「そういうことだったの。納得。」

新一は志保が何に納得したのかは分からなかったが、

うれしそうにネックレスを眺める志保を見て自分もうれしくなった。

「志保、つけてやるよ。」

「これくらい自分でできるわよ。」

「いいから、貸せって。」

志保から無理やりネックレスを取り上げ、志保の背後に回った。

そして、志保の体を自分に向かせる。

「うん！似合ってる。」

「ありがとう。・・・じゃあ、私はそろそろ帰るわ。」

「今日はうちに泊まっていけよ。俺、朝から志保が話してくんねーし

目も合わせてくれなくて結構傷ついてたんだぜ。

だから、その分・・・」

「襲わないでしょっね。」

志保は新一をジト目でみる。

「それは約束できねーかも・・・」

「なにそれ。それなら私は帰るわ。」

「冗談だって。なんもしねーよ。」

「それじゃあ、博士に電話したあと夕食つくるから手伝ってくれる？」

有希子さんたちは夕食どうするのかしら。」

「母さんたちは外で食べてくるらしいよ。遅くまでかえらねーって。」

「

「そうなの？それなら私、やっぱり帰るわ。狼さんと2人なんて恐ろしいもの。」

「なんだよ、それ。なんもしねーって。オメエ信じてねーな。」

「そのことに関しては信じられないわ。」

「おい・・・」

「冗談よ。」

結局、志保は一日工藤邸に泊まることになり、

2人は安心したようにぐっすりと眠りについた。

寝る間際、新一は聞き逃さなかった。

「工藤くん、私あなたのこと誰よりも好きだから。」

と、志保が言ったのを。

仲直り（後書き）

志保ちゃん、素直！！

招待状

チュンチュン、という鳥の鳴き声がして新一は目が覚めた。

久しぶりにすつきりした朝だ。

横では志保が気持ちよさそうに眠っている。

新一は志保を起こさないように静かにベッドから出てリビングへと向かった。

リビングには誰もいなかった。

テレビをつけても朝から流れているのはニュースばかり。

せっかく気持ちよく目が覚めた朝に事件の話など聞きたくなかった。

テレビを消し、家の外に出ようとしたとき

玄関には男ものの靴と女ものの靴が二足ずつあった。

（父さんと母さん、帰ったのか。）

玄関の扉を開ける。

そこには青い空が広がっていた。

すると、赤いバイクに乗った人がポストに何か入れていくのが見えた。

ポストの中には新聞と封筒が入っていて、それを持って自宅に入っていた。

リビングに戻り、先ほどの封筒を丁寧に開ける。

封筒の中身は招待状だった。

招待状に書かれてある名前を見たとき新一はフツ、と微笑んだ。

「() やつとか。」

「おはよう、工藤君。」

志保が階段から下りてきた。

「おはよう。」

「どうしたの？朝からニヤニヤして。」

「ニヤニヤなんかしてねーよ。これ。」

そう言って新一は志保に招待状を見せる。

「あら、やつとね。」

「志保も行くだろ？」

「ええ。あの2人にはいろいろとお世話になったし。」

「3月10日・・・俺達が卒業する5日前か・・・」

「見てみたいわ。あの人が女らしいことするところ。」

・・・それじゃあ、私朝食作ってくるわ。キッチン借りるわね。」

志保は勝手に人の家のキッチンを使うのは悪いと思い、一言言ってから去っていく。

そこに、おはよー新ちゃん、と目をこすりながら下りてくる有希子。キッチンにいる志保にも挨拶をしてソファに座る。

「昨日いつ帰ったんだ？」

「昨日はねーえっと・・・覚えてないわ。家にいるって気づいたのはさっき・・・」

(昨日はだいぶ飲んだんだな。)

「新ちゃん、だるいんだけどお。頭も痛いよ。」

「ただの2日酔いだろ？水持ってきてやるよ。」

(はぁ・・・世話の妬ける母親だ・・・)

有希子が起きてきたせいで重くなった足をキッチンへと運ぶ。

キッチンには味噌汁を作っている志保がいた。

「どうしたの？」

「んー母さんが二日酔いだって言うから水取りに来た。」

「大丈夫かしら。有希子さん。」

「大丈夫だろ。いつものことだし。」

水をコップに注ぎ、キッチンを出ようとしたが新一は持っていたコップを置き、

志保を抱きしめた。

「工藤くん、私、今包丁持ってて危ないから離してくれない？料理が出来ないわ。」

「いや」

（結婚したら毎日こんなことできるんだよな。）

はあ、とわざとらしくため息をつく志保に新一は志保を抱きしめる腕の力を強める。

「新一、朝からそんなにくっついてたら志保くんが迷惑だよ。」

2人が声のしたほうに振り向くとそこには優作が立っていた。

「父さんも起きたのか。」

新一は優作にこの場を見られて頬を染め、ゆっくりと志保の体を離れた。

「おはようございます。」

「おはよう。志保くん、すまないな。手伝いもせず。」

優作が有希子の代わりに謝る。

「いえ。」

「で？父さんはどうしたんだ？」

「いや、ちよつと頭痛がしてな。水と薬を取りにきたんだが……。」

（たく……父さんまで二日酔いかよ。昨日はどうやって帰ってきたんだ？）

「あーそれなら、はい。母さんにも渡しといてくれ。俺は志保の手伝いすつから。」

「そうしてやってくれ。」

優作がリビングへと戻った後、志保は新一に冷ややかな言葉を放った。

「あなたが手伝えるようなことないわ。余計に出来上がりが遅くなるから何もしないでいいわよ。」

結局、朝食は新一の手が加わることなく完成した。

朝食を食べ終わったあと、4人はリビングに集まっていた。

新一は何度も読み返している推理小説を、志保は面白くもないテレビを見ている。

「へーあの刑事さんたち結婚するのねー。羨ましいわ。」

もう一回くらいはウェディングドレス着たいわねー、優作。」

有希子と優作はテーブルの上においてあった招待状をまじまじと見ている。

「若い人はいいな。」

と優作は笑っているが、有希子は優作の言葉を聞いて表情を変えた。

「何？優作。私は若くないっていつの？」

「そういうわけじゃないさ。ただ、俺達にもこういうときがあったなーと思って。」

「そうね。はあ、志保ちゃんのウェディングドレスはいつ見れるのかしらね。」

「ちかぢか見れるかもしれないぞ。」

話に入ってこない新一と志保をよそにこの夫婦は2人してからかいモードに入る。

新一と志保は2人の話を聞いてはいるが聞いていないふりを続ける。

「私達が次来るときまでにはプロポーズくらいしといてほしいわね。」

「え？次来るときって……」

今まで聞いていないふりをしていた新一が口を開いた。

横ではテレビを見ていた志保も顔を有希子と優作にむける。

「私達、明日帰るのよ。優作は仕事もあるし。」

これ以上、優作をほったらかしにしてたら好き勝手するでしょ？

だから私も一緒に帰ることにしたのよ。」

「そうですね。」

有希子の話を聞いて志保は少し寂しそうだった。

「それじゃあ、今夜は出かけましょうか。博士も連れて。」

「出かけるって……明日帰るんだろ？」

それならゆっくりしたほうがいいんじゃないのか？」

「いいじゃない。最後までいい日本で楽しんだって。」

「いつも楽しんでただろ？」

「もー新ちゃんは厳しいんだから。志保ちゃんもいるんだからいいじゃない。」

そして、その日の夜は博士も含めた5人で出かけ、

次の日優作と有希子は無事に飛行機に乗り、帰っていった。

招待状（後書き）

久しぶり？いや・・・初めてですか？

優作が登場したのは。

あの刑事さんたち、ってわかりますよね？

ちなみに3月10日っていうのはその新婦さんのゴロあわせです

（笑

かなりはやくに招待状でしたんですね・・・

一応今回の話は9月ごろのつもりだったんですが・・・

Wデートinn大阪(前書き)

12月

Wデートin大阪

「志保ー、冬休み大阪行かねーか？」

「大阪？」

「ああ。服部と和葉ちゃんが久しぶりに会おう、って……」

「そう。私は特に予定はないから大丈夫だけど。」

「じゃあ、久しぶりにあのうるさいやつに会いに行くか。」

「そうね。」

「よおー、工藤。久しぶりやなあ。」

「久しぶり。」

「志保ちゃんやー。元気しとった？」

「ええ。和葉ちゃんも相変わらずね。」

新幹線を降りると、新一と志保は大阪の元気な友人から歓迎を受けた。

「和葉ちゃん、久しぶりに会えたのはうれしいけど、受験は大丈夫なの？」

「大丈夫やって。これでも今までちゃんとやってきてんから。」

心配なのは平次や！平次、全然、受験勉強せーへんねん！」

「工藤くんもしてないわよ。」

「2人ともちよつと人より頭工工からって、受験をナメすぎや。」

志保と和葉の後ろで話を聞いている男2人は苦笑している。

「志保ちゃんはちゃんと勉強してんの？」

「私は大学に行くつもりはないから。」

「そーなんや。工工なあ。勉強せんで工工やん。」

「おーい、和葉あ、ねーちゃん。行くでーい。」

数メートル離れたところで服部が手を振っている。

「ほな、行こか。」

4人は大阪を観光した。

服部が、『大阪は食い倒れの町や』と言つので、日が沈むまで食べ歩いた。

「ふー、よお食ったなあ。」

「平次は食べすぎや！それより、はよ行かんとゆっくり見れへんで。」

「せやな。そろそろ行こか。」

「行くてどこに？」

「内緒や。」

新一と志保は自分達がどこに連れて行かれるのか少し不安だったが黙ってついていくことにした。

電車に乗り、駅から歩くこと20分。目的の場所に着いた。

「着いたで。海遊館や。」

「海遊館？」

「せや。世界最大級の有名な水族館やで。夜の魚も見れんねん。」

今日のメインはココやで。」

カラフルな建物で、壁には魚の絵が書かれている。

確かに水族館のようだ。

「工藤君にな、志保ちゃんも動物が好きやって聞いてたから」

動物園にしか、思たんやけど、もう真冬やし寒いやん。

だから中で楽しめる水族館にしてんけど・・・」

「ありがとう。私ココでよかったわ。夜景も綺麗だし。」

見渡してみると、いろいろなところでイルミネーションが光っている。

「せやろー。ココは最高のデートスポットやで。」

「服部くんと何回か来たのね。」

「へ？う・・・うん・・・」

暗いので表情はよく見えないが、きっと照れているのだろう。

「和葉ー寒いからはよ入んでー。」

和葉は平次に呼ばれ、平次のもとへ走っていく。

そして、2人は自然に手を繋いだ。

「あの2人、ちゃんと恋人同士ね。」

「そうだな。」

新一と志保もお互いの手を温めるように優しく指を絡めた。

「せっかく夜の魚が見れるっちゅうから来たのに、寝てる魚ばっかやんけ。」

「いいんじゃない？ココにいる魚たちもみんな生き物ってことよ。」

ただ泳ぎ回っている魚たちよりもこっちのほうが生きてるって感じがするわ。

私はこっこのも好きよ。」

新一は志保らしいな、とつぶやき、

服部と和葉はさすがやな、と感心した。

次に見たのは大きな水槽。

この水槽の一番の見所は甚平ザメだが、他にも綺麗な魚がたくさん泳いでいる。

「でっかいなー。すごいわー。」

「和葉の感想は小学生並やな。もっと宮野のねーちゃんみたいなのと言ってみ。」

「そやかて、そう思てんもん。ほんなら平次もカツコエエ感想言っ

てみいよ。」

新一と志保の横でいつもの言い合いが始まった。

恋人という関係になってもこれだけは変わらないようだ。

志保がそんな2人を気にせず水槽を眺める。

「サメ・・・サメでも愛されることってあるのね。」

新一は志保のこの言葉で、志保が灰原哀だった時に言っていたあの言葉を思い出した。

『相手はイルカ・・・そう・・・海の人気者・・・』

暗く、冷たい海の底から逃げて来た意地の悪いサメなんかじゃとても歯が立たない。』

志保の顔をのぞいてみると、切なそうな、でもどこかつれしそうな顔をしていた。

「志保はただのサメじゃねーぞ。」

オメエはイルカと同じくらい人気のある甚平ザメだ。」

「覚えてたの？私が言ったこと・・・」

「ああ、今思い出した。しばらくはその言葉の意味がわからなくて考えてたからな。」

結局、今まで分からなかったけど。」

「あなた鈍感だから。」

「うるせー。」

クスッと声を出して笑う志保。

この笑顔は本当に何度見ても可愛いと思う。

「蘭がイルカで志保が甚平ザメなら、俺はあの魚か？」

新一が指差したのはさっきからずっと甚平ザメの横を泳いでいる魚だ。

「それで、あの小さい魚達が元太たちかな。」

小さい魚たちは甚平ザメの回りを自由に動きまわっている。

「そうね。でも、工藤くんは魚っていうより飼育員じゃない？」

甚平ザメ（わたし）の命を守ってくれる飼育員。」

「はは、そうかもな。」

2人は長い間、この水槽を見ていたのか

気がつくとも横に服部も和葉もいなかった。

少し離れたところで新一と志保を呼ぶ声がする。

ゆっくりとその声の主のところまで歩いていく。

「志保ちゃん、さっき工藤くんと何話してたん？」

「工工雰囲気やったから話かけへんかったけど。」

「何も無いわよ。ただの昔話。」

「えー、聞きたい！」

「あなたはアシカね。」

和葉の頭に？が浮かんだ。

そんな和葉を置いて志保は次の水槽を見る。

（ハハ・・・アシカが手を叩くところが漫才してるように見えるっ
てか？）

和葉には志保の言った言葉の意味が分からなかったが、

新一には分かったようで苦笑している。

「せや！志保ちゃん。お土産買お！」

平次、あたしら、あそこのお土産屋さん行ってくるわ。」

「おー走ってこけんなや。」

「アホ。こけるわけないやん。バカにせんといて。行く、志保ちゃん。」

和葉は志保の手を掴んで走っていく。

その様子を新一と服部は見ていた。

「工藤。」

ふと、新一の名前が呼ばれた。

そう新一を呼んだ服部の表情は和葉たちと別れる時とは違い、

かなり真剣になっていた。

「なんだ？」

新一も服部の表情を見て、真剣な顔つきになる。

「悪いけど、明日のねーちゃんとのデートはキャンセルしてもらおうで。」

「何でだ？」

「依頼や。明日行かんとアカンねん。」

ほんまはこれが目的で工藤を呼んだんや。」

「俺もか？」

「いや、依頼されたんは俺一人や。でも、俺のただの勘かもしれへんけど」

「なんや、嫌な感じがするんや。」

「探偵の勘ってわけだな。」

「そうや。すまんけど手貸してくれへんか？」

「わかった。志保たちはどうすんだ？」

「ねーちゃんのこととは和葉に任せたらエエ。大阪やから和葉でも案内くらい出来るやろ。」

そこに、買い物を終えた志保と和葉がやってきた。

「平次ー買い物終わったでー。はい、これあんたの分。あたしとおそろいやで。」

平次に渡されたのはアシカのキーホルダー。

「志保ちゃんがあたしらはアシカに似てるってゆーたからアシカにしてん。」

「なんでアシカ？」

平次も先ほどの和葉同様、頭に？を浮かべた。

「志保は何買ったんだ？」

「甚平ザメのキーホルダー。これ、工藤くんの。」

「おそろいか？」

「ええ。嫌だったらお店に返してくるけど。」

「嫌じゃねーよ。」

「そう。」

志保は迷いもなくそう言ってくれたことがうれしかったが

照れてるのがバレないように、いつものようにそっけない返事をした。

そして、その後、4人は服部の家へと帰っていった。

Wデートin大阪（後書き）

大阪と言ったらなんだろうと考えると

出てきたのが海遊館でした。

平次が魚が寝てるって書いてますが、本当に寝るのでしょうか……

依頼

翌日、服部と新一は依頼主のもとへ行った。

「ほんなら、俺ら行ってくるわ。何かあったら電話してくれ。」

「わかった。行ってらっしゃい。」

和葉は今日も服部たちと一緒に遊びに行ける、と楽しみにしていたので

昨夜の夕食時に「明日は依頼されたところに工藤と行って来る。」

と聞いたときはかなり怒っていた。

今は、仕方ない、とは言っているが少し落ち込んでいる。

「和葉ちゃん、ごめん。志保をよろしく。」

「しゃーないな。」

あなたの大事な彼女はあたしがちゃんと見ときます。せやから
ご安心を。」

「ハハ、任せた。じゃあ、行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

ピンポン

依頼のあった家に着いた2人。表札には『伊藤』という文字。

家の中からは「い」と女性の大きな声が聞こえてくる。

そして、その家の扉が開いた瞬間、服部がハッ、とした。

「平次くん、久しぶりやなー。ごめんな、今日は。」

彼女とデートやったやろつに。静華さん（平次の母）が名探偵が2人もおったら

なんの心配もないやろ、って言いはってな。

ほんで？この人がもう一人の探偵さんなん？」

「え……ああ、せやで。」

「工藤新一です。」

ぺこり、と頭を下げる。

それから、服部に向きなおした。

「服部、知り合いか？」

「おかんの友達や。」

（あんのババア、このおばちゃんの依頼ってたいていあれしかないやんけ。

どうせ今回の依頼も探し物やる・・・）

服部は子供の頃から何度かこの女性の探しものを探すのを手伝っていた。

はっきり言って、服部にとって面倒な仕事だった。

「それで、今回の依頼は？」

新一が尋ねる。

「最近な、ものがよくなるんよ。」

ほら来た、と服部の顔は引きつっていく。

「例えば？」

新一は真剣に女性の話を聞く。

服部は話をききながらも別の場所を見回している。

「えつとなー、イヤリングとかネックレスとか・・・」

あと、靴下とハンカチも。

ほんで、泥棒とかやたら怖いから静華さんに相談したんよ。

そしたら、平次くんに言ってみるってゆーてな、ほんまに心強いわ。

女性は依頼の内容を服部と新一に話しながら2人を家に入れる。

すると、リビングから一匹の猫が3人のもとに歩いてきた。

「伊藤さんって猫飼ってた？」

「最近飼い始めたんよ。散歩してる途中で見つけてね。

ほんでかわいそうで、思わず連れて帰ってしもた。

でもなー、えらいんやでこの子。ちゃんと自分が出したのもおもちゃかごになおすんよ。」

女性は猫を抱き上げ、優しい目をして頭をなでる。

「もしかして、ものがなくなり始めたんはその猫が来てからとちやうか？」

「うーん、そういえばせやねー。」

服部と新一は心の中でやっぱり、とつぶやく。

そして女性にことわってから、ある所を探し始めた。

依頼（後書き）

変なところで切ってますいません。

というか、あまりオリキャラは使いたくなかったんですけど・・・
自分で書いておきながら・・・

ショッピング

和葉と志保は用意を済ませ、服部邸を出た。

「もう、2人ともこんな日くらい仕事断ったらエエやんか。」

和葉は自分の手をこすりながら愚痴を零す。

「あら、いつも自分の手を温めてくれる誰かさんがいなくて寂しいのかしら?」

「ちゃ・・・ちゃうよ! いい加減あの自分勝手なとこやめてほしいなって思っただけや。」

そんなことを言っているが、これは照れ隠しだと志保には分かっている。

口にも顔にも出さないが、実は自分も新一が横にいらなくて寂しいと感じているからだ。

2人は今、ショッピングモールに向かっている。

目的は洋服だ。

昨日は、食い倒れツアーだったので、

今日は女の子らしくショッピングを楽しむことにした。

目的地に着くと早速自分達の洋服を選び始めた。

「なあなあ、志保ちゃん。これかわいいと思わへん？」

「そうね。あなたにはとても似合うと思うわよ。」

志保にそう言われて和葉はうれしそうだ。

この服を買う、と決めたようでしたっきりと抱えている。

(いいわね。 あんなかわいい服が似合うなんて。)

志保が選ぶ服はどれも黒やグレーのものばかり。

ピンクやオレンジなど、明るい色の服を選ぶ和葉とは正反対だ。

すると、突然横から声が掛かる。

「ええな、志保ちゃんは。こんな大人っぽい服似おつて。」

「え？」

「だって、あたし子供っぽいじゃん？」

だから志保ちゃんみたいな大人っぽい服着られへんねん。」

「そんなことないわよ。私はあなたみたいな可愛い服着てみたいわ。」

でも、私には可愛いのは似合わないから。

和葉ちゃんはせっかく似合うんだから、着ないと損するわよ。」

和葉は笑顔になり、うん、と頷いた。

そして、2人はそれぞれ三着ほど買って店を出て行った。

「志保ちゃん、昼ごはんあの公園で売ってるハンバーガーでもエエ？」

「ええ。私はなんでも。」

「よかったあ。」

あのハンバーガーめっちゃおいしいから志保ちゃんにも食べてほしかったんよ。

ほな、私買ってくるからそのベンチに座っていい。」

和葉はハンバーガーを売っている大きな車のほうに走っていった。

和葉にハンバーガーを買うのを任せて志保は1人、公園を歩く。

公園といっても、子供たちがサッカーや、鬼ごっこなどできるようなところではなく

たくさんの木や花が植えられていて、散歩などにちょうどいい場所

だ。

園内はとても静かで人も2・3人見かける程度。

午前中に行ったショッピングモールは人が多かったので人の少ないところへ来て

志保は少し落ち着いていた。

「しいほーちゃん。買ってきたで。食べよ。」

ありがとう、と言って志保は和葉の手からハンバーガーを受け取る。

そのとき、事件はおきた。

嫌な予感

「しーほーちゃん。買ってきたで。食べよ。」

ありがとう、と言って志保は和葉の手からハンバーガーを受け取る。

そのとき・・・

ドサッ。

何かが崩れるような、鈍い音がした。

志保がその音がしたほうへ目を向けると、

その目に映ったのはベンチに倒れこんでいる和葉だった。

「和葉ちゃん!？」

急いで、和葉の体を起き上がらせるため手を伸ばすと黒いものが志保の頭に向けられた。

それは拳銃だった。もう一方の手にはスタンガン。

和葉が気を失ったのはこれのせいだろう。

拳銃を志保に向けているのは20代半ばと思われる男。

その男が口を開いた。

「おい、この女を殺されなくなかったら黙って俺について来い。」
そう言われ、志保は仕方なく男についていく。

公園内の誰かがこの状況に気づいて警察を呼んでくれればよいのだが
誰一人志保たちの方へ目を向けず、気づく者はいない。

男は志保が自分の言うとおりにすることが分かると

眠っている和葉を抱きかかえすぐ傍にとまっている車へと

無理やり押し込めた。

そして、車は志保と和葉を乗せて走っていった。

「平次くん、工藤くんありがとうな。これで安心や。助かったでー。」

新一と服部は依頼された仕事もほんの数分で終えた。

その後お礼に、と出された昼食を食べ終わり、伊藤邸を出た。

今回の『ものがなくなる』という事件の犯人は

最近、飼い始めたという猫だった。

妃英里が飼っている猫と同様、

この猫もなんでもかんでも片付けてしまう癖があるらしく、

依頼主が探していたものも全て自分のおもちや箱に片付けていた。

結局、なんの事件性もなくこの日の依頼された仕事は終わりを告げた。

「お前の嫌な予感はかなり外れてたな。」

「すまん。けど、ある意味嫌な予感当たったんとちゃうか？」

「ハハ、そうかもしれねーな。」

2人は寒い中、住宅街を歩く。

そのとき、新一の脳裏に志保の顔がよぎった。

助けを求めているようなそんな顔が……。

(志保……)

何か嫌な予感がして、服部を見ると服部も新一と同じ顔をしていた。

「工藤、今回の依頼の犯人はあの猫で工工よな？」

「ああ。それはあつてると思うぜ。たいして事件が絡んでそうない

とでもない。」

「せやけど、なんかまだ嫌な予感がすんねん。」

「やっぱりお前もか。俺もそんな気がしてた。」

「なんか、和葉らが危ないんじゃないかって・・・」

俺が心配しすぎなんかもしれへんけど。とりあえず、連絡してみよか。」

そういつて、ポケットから携帯を取り出す。

RRRRRRR・・・RRRRRR・・・

なかなか繋がらない。服部が切ろうとしたとき声が聞こえてきた。

「服部平次だな？」

服部は和葉の声じゃなく男の声が聞こえたため

掛け間違えたか、と思い携帯を耳から離して画面を確認するが

表示された番号は間違いなく和葉のものだった。

そして、再び携帯を耳に当てる。

「あんだ、誰や。」

「・・・」

相手からの返事はない。そこで服部が再び同じ質問をする。

「誰やっちゅーてんねん！これ、和葉の携帯やろ？」

するとやっとなんが口を開いた。

「そこに工藤新一はいるか？」

男は服部の質問を無視して、服部に問う。

「なんやねん！俺が質問しとんじゃ！俺の質問に答えんかい！」

「俺のことはお前が知る必要はない。」

それより、工藤新一はそこにいるんだろ？」

「おったらなんやねん。」

「それなら、やっに言ってやれ。お前の女の死に様を見なければ

俺達を探し出して見にいってな。

幸い、もう一人の女には顔は見られてないから目的の女を殺した後で逃がしてやるよ。

まあ、それもこの宮野志保が俺の質問にどう答えるかによって決まるがな。」

「おい！なに言うтонねん！！！」

「ヒントは廃工場。タイムリミットは今から一時間後の2時だ。

警察は呼ぶなよ。

警察の存在が確認された時点で2人の命はないものと思え。」

それだけ言うと、男は一方的に携帯を切った。

「どうした？」

新一が心配そうな顔で服部の顔を覗き込む。

「工藤、俺らの嫌な予感当たってもーたわ。

和葉とねーちゃんが……つかまった。」

「なっ!?!」

「目的はねーちゃんを殺すことらしいわ。

和葉は人質や。

ヒントは廃工場、タイムリミットは一時間後。」

「なに!?!」

「はよ、探さんと……」

でも、ヒントは《廃工場》だけや。手がかりが少なすぎる。」

「・・・いや、それは大丈夫かもしれねー。」

新一はジャケットの内ポケットからあるものを取り出した。

それは黒いふちのめがね、新一が江戸川コナンだったときにつけていたものだ。

「多分志保は探偵団バッジを持つてる。」

あれに発信機がついてるからここから半径20メートル以内
いれば

このめがねに反応がある・・・あった！

ここから南西に15キロ・・・」

「ほんなら、はよ行くで。」

2人はタクシーを呼び、志保と和葉のもとに向かった。

志保と和葉は無理やり男にある所に連れてこられた。

それは廃工場だった。

和葉は目隠しをされ、口にはガムテープ。そして両手両足をロープで締められている。

志保は片手を手錠で手すりにつけられている。

この状況、嫌でも思い出してしまう。

そう、あの組織にいたころ・・・

ガス室に閉じ込められたあの日のことを。

「それで？私たちを無理やり連れてきてどうするの？」

すると、男はニツと不敵な笑みを浮かべて志保に拳銃を向ける。

「そうだな。最終的には死んでもらうよ。親父の仇だ。」

「仇？」

「俺の親父はお前のいた組織に殺された。」

だからお前から組織の居場所を聞きだし、やつらを潰してくる。

この女が生きるか死ぬかはお前の答え次第だ。」

「そう、組織が・・・

でもどうして私が組織の人間で

あなたのお父さんを殺したのがあの組織って分かるの？」

「お前はもう死ぬんだ。知る必要はない。」

「もうすぐ死ぬからこそ知らないといけないわ。」

なぜ自分は殺される対象なのか。」

男はそれもそうだ、と言って志保に近づいてくる。

「俺は聞いたんだよ。」

親父が殺される直前に親父と組織のやつが話しているのを。

親父は警察で、一つの殺人事件を担当していた。

だが、証拠も何もなくて捜査は打ち切り。

それでも親父は諦めきれずに一人で調べたんだ。

その結果、たどり着いたのがあの組織。

俺はその殺人事件が組織に関係がある、とだけ親父に聞いた。

そして親父が組織のことについて調べているのを

やつらが知って、家までのりこんできやがった。

俺は自分の部屋で隣の親父の部屋から聞こえてくる話を聞いていた。

組織の男は『データをよこせ』と言ったが当然親父は拒否する。

その後、聞こえてきたのは親父のうめき声。

やつが俺の部屋の前を走っていく足音。

やつが家を出て行ったのを確認して親父の部屋に行こうと

自分の部屋の扉を開けたとき、一枚の紙が落ちているのをみつけた。

そこに書かれていたのは『宮野志保』、お前のデータと写真だった。

俺はそれを持って親父の部屋に行った。

そこで見たのは心臓を押さえて倒れている親父の姿。

俺が見たときには死んでいた。

そのときだよ。お前を見つけて親父を殺した何かの組織を全員殺して

親父の仇を討つ、と決めたのは。

でもお前がどこにいるのかなんて情報は全くなかった。

探しようもなく、諦めようとしたときにTVでお前の姿が映ったんだ。

工藤新一の横で高校の制服を着たお前がな。

それで、やっとお前の居場所が分かって東京へ行くため新幹線に乗ろうとしたとき

お前と工藤新一が東京からの新幹線から降りてきたのが見えた。

まさかそんな偶然があるとは思わなかったぜ。

こんなに上手くいくなんてな。

昨日は一日お前たちを張っていたんだよ。

そして、工藤新一と服部平次とかいう探偵がお前から目を離れた隙に

今まで考えてきた作戦を実行しようとしているわけだ。」

志保は男の話に口を挟まず、黙って聞いていた。

話終えた男の目にはものすごい殺気が感じられた。

志保は思わず男から目をそらしてしまう。

そして、弱弱しく言った。

「・・・そう。ごめんなさい。いくら謝ったって許されることではないけど。」

「今更謝ったってもう遅い！お前が謝ったからって親父が帰ってく

るわけじゃねえんだ。

早く、組織がどこにいるのか教えろ。そのあとお前を殺して・

「・

RRRRR・・・RRRRRRRR・・・

男の言葉を遮って、誰かの携帯がなった。

それは和葉のカバンの中から聞こえてくる。

志保も和葉もとることはできない。

代わりに男が和葉の携帯を手に取り、何かを思いついたように笑みをみせる。

そして、携帯を耳に当てた。

「服部平次だな？」

そう言うと、しばらく男は黙り込んで再び口を開いた。

「そこに工藤新一はいるか？」

「俺のことはお前が知る必要はない。

それより、工藤新一はそこにいるんだろ？」

「それなら、やつに言ってやれ。お前の女の死に様を見たければ

俺達を探し出して見にいってな。

幸い、もう一人の女には顔は見られてないから目的の女を殺した後で逃がしてやるよ。

まあ、それもこの宮野志保が俺の質問にどう答えるかによって決まるがな。」

「ヒントは廃工場。タイムリミットは今から一時間後の2時だ。

警察は呼ぶなよ。

警察の存在が確認された時点で2人の命はないものと思え。」

男は自ら携帯を切った。

「いいの？ 私達の居場所彼らに教えて。あの2人は探偵よ。」

「分かっている。だがいくらあいつらが世間では有名な名探偵と言われていても

あれだけのヒントじゃ分かるわけねーだろ。」

「そうね。けど、あれは本当なの？

私がちゃんとあなたの質問に答えて、私が死んだらこの人は助けてくれるって言うこと。」

「ああ。目的は親父を殺した組織の居場所を知って、お前を殺すこと。それだけだ。」

だから、早く俺の質問に答えろ。

そうでないとお友達が死ぬことになるぜ？」

男がそう言つと志保はゆっくりと話し始めた。

「……残念だけど、あなたのお父さんを殺した組織は今もうな
いわ。」

「どづいつことだ？」

「潰れたのよ。組織の大半は死に、他のメンバーは全員牢屋に入っ
てるわ。」

バンツ！！

志保がそう言つと、男は銃を発砲した。

その玉は志保の肩に当たり、志保は小さな声で呻きながら撃たれた
部分を手で押さえる。

「ふざけるな！！組織を庇ってんだろ？」

大体、そんなことがあつたらニュースで大きく取り上げられる
はずだ。」

「……本当のことよ……。今年の春、組織は潰れたわ。」

FBIにも協力してもらつて……

TVでその話が出されないのはFBIが全国に組織のことが広まるのを

阻止しているから・・・」

バンツ！！

また、男が志保に向かって発砲した。

今度は足に当たった。

「う・・・」

「本当のことを言わねーと約束の時間より前にお前を殺してしまうことになるぜ？」

俺はできれば約束は破りたくねーんだよ。

早く本当のことを言え。」

「あなたが私を殺せば、あなたの目的は終わるわ。

組織の中で生き残っているのは私だけ。早く私を殺しなさい。」

「死んでも口はわらねーってか。それなら、言われなくてもそうさせてもらっよ。」

組織のことはお前が死んだ後、じっくり調べる。

「じゃあな。死んで、罪を償え。」

「バンツ！！」

音が部屋に響き渡った。

嫌な予感（後書き）

前の2話が短かった分、今回はかなり長くなってしまいました・・・

救出

音が部屋に響き渡った。

それは、志保の前の拳銃ではなく分厚い鉄の扉が勢いよく開く音だった。

「工藤・・・新一？」

「え？」

自分に拳銃を向けられ、死を覚悟した志保はぎゅっ、と目をつぶっていたが

男から発せられた名前を聞いてゆっくりと目を開ける。

「ずいぶん早かったな。姫を助けにきた勇敢な騎士ってどこか？」

笑っちゃうね。

だが、お前たちを呼んだのはこいつの死を見届けさせるため。

お前らちょうどいいときに来たな。

じゃあ、見物客もそろったようだし遠慮せずに目的を晴らさしてもらおうよ。」

男は再び志保の方へと体を向ける。それと同時に銃口も志保に向けられる。

「んなことさせつかよ。」

バン！！

ドサツ。

大きな銃声があった。

男が倒れこんだ。

新一が時計型麻醉銃で男を眠らせたのだ。

志保に向けられていた拳銃は男がふらついたせいで玉がはずれ、

志保の体の横を通りぬけていった。

「ふう、なんとか間に合ったな。さすが工藤や。」

服部は急いで和葉のもとに駆けつけ手や足を縛り付けていたロープを取り、

そのロープで次は男の手と足を縛り付ける。

新一も志保のもとに駆け寄る。

「大丈夫か？怪我してんじゃねーか。」

「大丈夫よ。このくらい。かすり傷程度だから。」

「そうか。もう少しで警察がくるから待ってる。その手錠外してもらおう。」

「ええ。それより服部くん、和葉ちゃんは大丈夫？」

すると、和葉の口を塞いでいたガムテープと目隠しをとっていた服部が志保を見た。

「和葉は大丈夫や。今はまだ気イ失って寝てるけど。どこも怪我してへんし。」

「そう、よかった・・・」

「ごめんなさい。またあなた達を巻き込んでしまつて。」

「謝るな。オメエが悪いわけじゃねーんだろ？」

でも、志保が探偵団バッチを持っててよかったよ。

あんな《廃工場》ってだけのヒントじゃいくら俺や服部でも短時間じゃ探さきれなかつただろうから。」

「あなたが前にこのバッチを常に持つておけつて言うからじゃない。」

「でも、そのおかげで助かつたわけだ。」

それより志保、この男は誰なんだ？何で志保が狙われた？」

新一の質問に、さつき男が言っていたことを話す。

「この人は組織に、お父さんを組織に殺されたらしいの。」

それで、お父さんの仇を討つために……。」

志保は新一と服部に男が言ったことを全て話した。

和葉も服部に起こされて話を聞いていた。

そのとき、ハハ、と感情のない笑い声が聞こえた。

「なんや、もう起きたんか。」

「なんで、こうなんだろうな。犯罪者が幸せになって、遺族が苦しむ。」

ほんと、不公平な世の中だよな。」

男は志保を見てそう言った。

「東の名探偵もそんな犯罪者が女なんてな。笑えるぜ。地位も名誉もあつたもんじゃねえ。」

志保はハッ、として俯く。

新一は男が言った言葉に怒りをおぼえた。

沸々と湧き上がってくる怒りを口に出した。

「っざけんな!! 志保は犯罪者なんかじゃねえ。」

オメエは何も知らねえくせに、んなこと言っんじやねえよ!!

志保が今までどんな気持ちで過ごしてきたかわかるか!?

組織を抜け出してから組織の存在に怯えて、

組織を潰したあとでも自分が生きることには罪悪感を持って・・・。

志保に謝れ!!」

「だれが謝るかよ!そんなやつに。たとえ組織から抜け出そうが

人を殺したことにはかわりねえんだろ?

そのくせ、自分だけ幸せになりやがって・・・

唯一の家族だった親父を殺された俺の気持ちができるか!？」

「そんなこと、志保が一番分かってんだよ。

幼いときに両親が死んで、組織に姉を殺されて・・・

志保はやつと幸せだと思える生活を過ごせるようになったんだ。

罪を償うために一生懸命生きてんだよ!

それに、人殺しなんて志保はしてない。

人殺しをしようとしたやつにそんなこと言われたくねーよ。

新一は今にも男に殴りかかりそうだ。

そんな新一を服部がおさえる。

「工藤くん、もういいわ。」

怒りがおさまらず、男に怒鳴り続ける新一を志保が止めた。

「よくねえ。俺は、オメエがそういうふうに思われるのが嫌なんだよ。」

「ありがとう。でも、もういいの。」

家族を殺されたときの気持ちはよく知ってるから。」

新一は志保にそう言われ、黙り込んだ。

それから5分ほどで警察が到着した。

志保は警察に手錠をはずしてもらい、4人は廃工場を出て服部の家へ帰った。

「工藤、ほんまに今日帰るんか？」

「帰るならまた明日でもエエんとちゃうか？」

服部の家に着き、帰る準備をしている新一に服部が声をかけてきた。

「いや、帰るよ。」

これ以上、服部の家に世話になるわけにいかねえし、

新幹線のチケットも明日取れるかわかんねーし。」

「そうか。俺んちはエエんやけど、帰りのこともあるしな。」

でも、無理すんなや？

きつかったらまだ泊まってエエんやで？」

「心配すんなって。俺は大丈夫だよ。心配なのはアイツだ。」

「せやなあ。怪我はあんまり心配ないけど心の問題やな。」

和葉と話してる今も無理してるのが分かるわ。

あんだだけ、言われたらなあ。やっぱ考えるで。

とくにねーちゃんは自分のせいでお前とか周りの人が傷つくのが耐えられへんからな。

けど、工藤、何言われても絶対ねーちゃんの手え離すなや？」

「ああ。わーってるよ。それより服部、今から時間あるか？」

「え？あ、ああ・・・どうしたんや？」

そこで、新一は服部にしか聞こえないように話す。

服部は時計を見る。

「けど、あと三時間しかないで。」

「大丈夫だつて。それに、あんなところに俺が一人で入っていくのはキツイからよ。」

「そんなところに俺ら二人で入っていくほうがキツイわ。」

まあ、今日ぐらいお前のゆうーこと聞いたるわ。

訳の分からん依頼にも付き合わせてしもたし。

ほな、行くならはよ行くで。」

志保と和葉は出掛けようとする2人にどこに行くのかたずねたが

新一と服部は質問に答えず、すぐ帰ってくる、と言って家を飛び出していった。

それから二時間後、2人は帰ってきた。

そして、全ての荷物を持ち、服部の両親に挨拶をして新大阪に向かった。

「じゃあな、志保ちゃん。今度はあたしらが東京行くわ。」

「楽しみに待ってるわ。今日はごめんなさい。私のせいで。」

「もう、そんなことエエねん！！って何回言わせんの！」

志保ちゃんのせいやないんやから。次会ったときはめっちゃ楽しむで。」

和葉は笑顔を向ける。

それに志保も笑顔を見せる。

「そうね。ありがとう。受験もがんばって。」

「あたしは余裕やって。」

2人はくすくすと笑う。

「ほんなら、またな。」

「ええ。服部くんとも仲良くね。」

志保は赤くなつた和葉の顔を一瞥し、新幹線に乗った。

それから、新一と志保が乗った新幹線は東京へ走っていった。

救出（後書き）

訳わかない話ですいません。

とにかく新一が志保を助けるところを書きたかったんです。

愛の日

新幹線に乗った新一と志保は無言で自分達の席に座っていた。

2人の間では今のような無言の時間はよくあること。

それは嫌なものではなく、むしろ落ち着くものなのだ。

しかし、今のこの時間は新一にとっては居心地が悪い。

志保もそう思っているのか、志保が新一に話かける。

「ねえ、どうして私たちのいる場所がわかったの？」

「愛の力だな。」

新一はこの嫌な空気をかえようとこのような言葉を口にしたが

志保はただ、そう、と言って窓の外をみつめる。

照れているようでもなく、怒っているようでもなく、ただ寂しそ
うに。

再び無言の時間。

そして、志保が新一に顔を向ける。

「ねえ、明日どこか出掛けない？」

志保は笑顔で言ったつもりだったが、新一には無理して笑っているのが分かった。

だがそのことには触れず、じゃあトロピカルランドにでも行くか、と言った。

その後2人は目的地に着くまで眠った。

翌日、志保は朝早く目を覚まし、準備に取り掛かった。

いつもより明るめの服に軽くメイクをして

新一との待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所とは言っても、阿笠邸の前だが・・・。

待ち合わせ場所に行くと、もうすでに新一はいた。

「おはよう。」

「おはよう、工藤くん。」

志保は笑顔であいさつを返す。

「じゃ、行くか。」

そう言つて、新一は志保の手を取り2人は歩いていく。

今日の2人は昨日のように暗い雰囲気ではなく、とても明るかった。

トロピカルランドに着くと、新一と志保は早速ジェットコースターに乗った。

何度かこのジェットコースターに乗ったが、乗る前の緊張感は何度も乗っても変わらない。

ジェットコースターが頂上に到達し、一気に下る。

志保は思わず目をギュっとなつぶつてしまう。

それを新一に見られてジェットコースターから降りた後、軽くバカにされる。

ジェットコースターの後はお化け屋敷に入った。

新一は志保がこんなところで怖がる女じゃない、と分かっているながら

以外な一面が見れるかもしれない、とかすかな希望をだいて無理やり連れて行った。

「俺が守つてやるから、心配すんなよ。」

と、いつか聞いたお決まりの台詞を言う。

それに対して志保は

「何から守ってくれるのかしら？」

いくら名探偵さんでもお化けには手も足もでないでしょう？」

と、クールに返す。

結局2人は何事もなかったかのように出て行った。

その後も、昼食を食べたり、ほかのアトラクションを楽しんだりした。

最後はカップルならば当然、と言われるであろう観覧車に乗った。

新一たちが乗った時間は丁度、夕日が沈む頃でとても綺麗だった。

志保はじっとその夕日を見る。

それを見ている目は潤んでいて、今にも涙が溢れそつで。

新一はそんな志保の様子に気づいていたが気づかないふりをした。

15分ほどの2人きりの密室空間を出て、自宅に帰る。

しっかりと手を繋いで。

もう空は日が沈み、街灯もついている。

阿笠邸の近くに来たとき、志保の足が止まる。

それにあわせて新一の足も止まる。

「工藤くん・・・話があるの。」

「・・・じゃあ、うちの中でいいか？」

志保は黙って頷き、新一の家に進める。

ギィ、と重そうな音を立てて工藤邸の門が開けられ中に入っていく。

新一が家の鍵を開け、志保に入るよう促した。

家の中に入り、リビングにあるソファに向かい合わせに座る。

「工藤くん・・・あのね・・・」

ソファにつくと早速、志保が話し始める。

それを新一が自らの言葉で遮った。

「その前に、俺から話す。」

そして、机の上に小さな箱を置く。

中は見えていないが、志保はこれが何なのかわかったよう

いきなりすることに驚いている。

「ちよっと・・・これ・・・」

「開けてみる。」

新一に言われ、中身を確認する。

中身を確認した志保は自分の予想通りだったのか、やっぱりという顔で新一を見る。

新一は少しうれしそうだ。

だが、志保は今から自分が目の前の彼に言おうとしている言葉を考えると

その顔を見るのが辛かった。

「工藤くん……」

「これな、昨日服部と一緒に買ってきたんだぜ。」

新一は笑顔で言う。もう、これ以上、この顔を見たら気持ちが揺らぐ。

そう思って、志保は昨日から考えていたことを言うことに決めた。

「工藤くん！あのね……」

「別れ話は聞かねーから。」

「え？」

先ほどとは正反対の真剣な顔で、少し怒りを含んだような口調で言

う新一。

「話って、俺と別れるってことだろ？」

昨日のあの男の言葉を聞いて決めたんだろ？」

「な・・んで」

「わかんだよ。オメエの考えてることは。」

今日のデートだって、最後の思い出作りとかそういうやつだろ
「？」

「だったら、話さなくてもわかるわよね。」

私と・・・私とわかれ・・・」

「嫌だ。」

新一は志保の言葉を遮る。

「だって、あなた、犯罪者の私といたら」

あの人の言ったとおり地位も名誉もなくなるのよ？

せつかく今まで努力してきたのに。

私は私のせいでこれ以上工藤くんにツライ思いはさせたくない
のー！」

「そんなことで俺の地位も名誉もなくなるくらいならんなものい
ねえ。」

俺は、志保が俺の横からいなくなるほうがよっぽどツレエよ。

それに、何回も言っただろ。

お前は犯罪者なんかじゃねえ。

幸せにならねえといけねえ、って。」

「だけど、あの組織のせいで、私のせいで死んだ人がいるのに

自分だけ幸せになんてなれるわけないじゃない！

それに、また昨日みたいなことがあるかもしれない。

もう私のせいであんなことにはなりたくないの！」

志保は声を荒げる。

すると、新一が志保の前に来て

パチンッ！！

乾いた音がリビングに響いた。

志保は自分の頬を触る。

しばらくして志保は新一に頬を叩かれたのだと気づいた。

「いい加減にしろ！オメエはいつもいつも自分のせいであって！

幸せになつたらいけないだと！？

ふざけるな！！

お前の幸せを心から願ってたやつのこととも考えろよ。」

志保は必死で目から流れてくるものを止めようとするが、瞬きをするたびに大粒の涙が流れてくる。

「そんなことわかってるわよ。」

でも、私は人を傷つけてまで幸せになんかなりたくないのよ。

唯一、私の幸せなことは私の大事な人が幸せになること。

工藤くんが幸せになること。

「幸せになれって言うならその幸せくらい叶えてよ。」

志保は涙を流しながら新一にむかって怒鳴り返す。

そんな志保を新一はぎゅっと抱きしめる。

腕が折れるのではないかというくらい力強く。

「俺の幸せは志保が俺の横でいつも幸せそうにしてくれること。」

ただそれだけだ。

地位や名誉なんか捨てたっていい。

俺に必要なのは志保だ。

ずっと、言ってきただろ？守ってやる、って。

もし、また昨日みたいなことがあってもオメエを守ってやるから。

俺が死ぬまでずっと守ってやるから。

俺に任せるよ。俺に頼れ。

それでも、俺と別れたいって言うならちゃんとした理由を言うてくれ。

俺のことが嫌いだとか、ほかに好きなやつがいるとか。

そういう理由じゃねーと俺は別れねえから。」

「嫌い・・・なんて・・・」

「言えねーか？」

「そんなこと嘘でも言えないわよ。」

「じゃあ、ほかに好きなやつは？まあ、いるって言ったならそいつ一発殴りに行くけどな。」

新一はそれはない、と信じているようで小さな笑みを浮かべている。

「残念だけど、いるわよ。ほかに好きな人。」

その言葉を聞いた瞬間新一の顔が青ざめる。そして、一気に怒りの表情へと変わる。

新一は志保を自分の体から離し、視線を志保に合わせる。

志保はさっきまで泣いていたが今は新一の反応を楽しんでいるようだ。

「誰だよ。」

「内緒。」

「おい！！まさか快斗とか言うんじゃないーだろーな？」

新一が志保の両肩を掴み、勢いよく揺さぶる。

「違うわよ。」

「じゃあ、誰だ？クラスのやつか？」

「……博士よ。私の大事なお父さん。」

新一からのしつこい質問にふう、とため息をついて

仕方なく答える。

志保の答えを聞いて、新一はなんだ、と一言。安心したようだ。

「博士を殴りにいくのかしら？」

「んなことするかよ。オメエの大事な父親を。」

それに、好きの意味が違うだろ？

俺の方は《愛してる》のほうだろ？」

「ずいぶん自信過剰じゃない。でも、そうね。」

私の工藤くんへの想いはいつの間にかそんな言葉で表せるほどになったのね。」

志保は寂しそうに微笑む。

「それじゃあ、俺ともう別れられねーな。理由がないわけだし。」

俺のこと愛してくれてるし。

だから、俺と結婚してくれ！」

「は？」

「俺たちが高校卒業したら、結婚してくれ。」

とつぜんのプロポーズに戸惑う志保。

そして、さつき渡された小さな箱を見る。

（あれってもしかして婚約指輪だったの？）

「そうだよ。あれは婚約指輪だ。もらってくれるか？」

志保の思ったことを読み取るかのように新一は言った。

その新一はさっきの自信過剰な新一ではなく、不安な顔をした新一だった。

（この指輪をもらって事は工藤さんと結婚するってことになるのよね。

それで本当に彼は幸せになるのかしら。）

「俺の幸せが志保の幸せだろ？叶えてほしいんだろ？」

「だったら俺を幸せにしてくれよ。これはお前しかできねーよ。」

「ほんとに私でいいの？後悔するわよ。絶対。」

「なんで言い切んだよ。俺は後悔なんてしねーよ。」

今までだって志保と付き合ってから後悔したことねーし。

俺はお前じゃねーと嫌だよ。

「だから、一緒に幸せになるっぜ。」

志保は新一の言葉に涙を流す。さっきとは違う嬉し涙を。

そして・・・

「これからも私を幸せにしてね。探偵さん。」

と言って、泣きながら微笑んだ。

プロポーズの返事を聞いた新一は指輪が入った箱を開け、

志保の薬指に指輪を通した。

その瞬間、2人の唇が合わさった。

長く、長く。愛を確かめるように。

愛の日（後書き）

サブタイトルを『プロポーズ』にしようと思ってたんですが

それじゃあネタバレだろ・・・

という事で愛の日にしました。

そろそろこの話も終わりかな。

旅行？

RRRRRRR・・・RRRRRRR・・・

AM6:35

新一の携帯の音が部屋に響きわたる。

「ん？誰だ・・・こんな朝早く。」

目をこすりながら携帯の通話ボタンを押し、耳に当てる。

「はい。」

すると、電話のむこうから賑やかな声が聞こえてきた。

「おおー、工藤。俺や俺。」

「ゲッ！服部！？」

「せや。久しぶりやのー。」

「久しぶり、って2日前に会ったばかりじゃねーか！！

しかもなんなんだよ。こんな朝早く・・・」

服部のせいで貴重な睡眠時間を失って機嫌の悪い新一。

しかし、そんなことは気にせず服部は話続ける。

「機嫌悪いやつちなあ。なんや、やっぱりねーちゃんとアカンか
つたんか？」

ほんなら俺が話聞いて慰めてやるさかい。

ん？ゆーてみ、工藤。」

「俺が機嫌わりいのはお前のこの電話のせいだ！

それに何で俺が志保と別れたことになってんだよ。

ちゃんと昨日話してこれからのことも……。」

「これからのこと？」

「結婚だよ。」

「は？け……けけけけ結婚やと!？」

とてつもない大きな声が新一の耳に入ってくる。

服部に言ったあと、こいつに言わなければよかった……と後悔し
た。

服部の声が携帯を通して部屋中に広がる。

「うるせーよ。」

たく、お前もこの間指輪買いに行っただろ？

あの時ちゃんと婚約指輪買って言ったじゃねーか。」

電話のむこうではあのとときの指輪が・・・と、なにやらブツブツ言っているのが聞こえる。

そのとき新一の横で小さな声がした。

「工藤・・・くん？」

志保は布団の中で体を丸めて新一の様子を見ていた。

「え？あ、はよ。わりい。起こしちまったみてえだな。」

志保に一言言って再び携帯を耳に当てる。

「オメエのせいで志保まで起きたじゃねーか。」

「起きた・・・って、お前ら一緒に寝とったんかい！」

いやらしいことでもしとったんか？」

「してねーよ。」

「ほんまか・・・？」

で、結婚ってなんやねん。なにがどうなってそんなところまで話が進んでんねん。」

「別に何も問題ねーだろ。」

俺らだつてもう結婚できる歳だし、いつかは結婚するんだから
わざわざ遅くする必要ねーだろ。

あ、志保……」

志保は朝食を作ってくる、と言って部屋を出て行った。

「ん？ねーちゃん、どないした？」

「なんでもねーよ。で、もういいか？言うことは言ったから切るぞ。」

「まつ、まま待てや。俺、まだなんも聞いてへんで。」

式はいつや？結婚して大学はどうするんや？」

「まだ決めてねーよ。まだ父さんや博士にも言ってるねーから。」

決まったらまた知らせる。」

「そうか。まあ、よかったやないか。おめでとう。」

「ああ。ありがとな。問題は博士だけだよ。」

志保のこと本当の娘のように思ってるからな。

反対されなきゃいいけど……。」

「せやなー。あのじいさん、ねーちゃんのことほんまに好きやからなあ。

工藤も一発殴られるかもしれへんな。」

「おい・・・こえーこと言つなよ。」

「ハハ、ほながんばれやー。またな。」

そう言つて、服部は電話を切つた。

新一は携帯を閉じ、朝食を作っているであろう志保のもとへ向かった。

リビングに行くと、テーブルの上にはすでに朝食が並べられていて

志保はいすに座りテレビを観ていた。

「あら、もう終わったの?」

「ああ。アイツ、結婚のこと言つたら大騒ぎしやがってよ。」

朝っぱらからうるせーんだよ。」

「ほんと朝から元気だったわね。服部くんのおかげで目が覚めたわ。」

新一も志保の向かいのいすに座る。

そして、いただきます、と言い味噌汁に箸をつける。

布団からでてすっかり体は冷えてしまったが、温かい味噌汁を飲んであったまる。

（うめーな。）

結婚したら毎日志保の手料理が食べられると思うと、思わず顔がにやける。

「何よ。ニヤニヤして。」

「いや、うめーなと思ってよ。」

結婚したら、毎日食べられるんだよな。」

「今までだってほぼ毎日食べてたじゃない。」

「けどよ、やっぱり夫婦になるとちがうんじゃないか？

俺が仕事から帰ってきたら夕飯が出来上がってて、志保の料理を食べて

一日の疲れをとる、みたいなの。

早く結婚してーな。

そうだ。今日、博士んとこ行くか？俺、やっぱり殴られたりするのかな？」

新一は一人で浮かれている。

いつも推理しているときの顔とは大違いだ。

そんな新一に対して志保はどこか暗い。

「どうした、志保？」

「ねえ、工藤くん……」

「ちょちょ、ちょっと待てよ。」

志保は首をかしげる。

「なに？」

「ちょ……やめてくれよ。その『ねえ、工藤くん……』ってゆーの。」

志保がそうやって話し始めるときの話ってあんまりいいことねーんだよ。

もしかして、結婚はしない、とか言っくんじゃねーだろうな。」

「そうよ。」

「あたりかよ。で？理由は？」

「イギリスに行きたいから。」

「え？イギリス？旅行か？」

そこで、志保は一つため息をつく。

「旅行くらいならこんなこと言わないわよ。」

「じゃあ、旅行じゃねーってことはあつちに住むってことか？」

「ええ。」

この間、ジヨデイ先生から電話がかかってきたの。

私たちが昔住んでいた家が見つかった、って。

それで、最初は行くかどうか迷ったけど、シャロンにもらった写真を見て思ったの。

幼いころの私があんなに無邪気に笑えるくらい家族に愛してもらってたのに

私はそのことをほとんど覚えてない。

だけど、私たちが住んでいた家や街に行ったら何か思い出せるかもしれないって。

大切にされてたのに何も覚えてないなんて両親に悪いでしょ？

それに両親のお墓はあつちにあるらしいし。

だから、決めたの。私はイギリスに住むわ。」

新一は志保の話を黙って聞いていた。

志保の目はしつかりと一点を見つめている。

志保に、迷いはないようだ。

それを確認して新一は残った味噌汁を飲みきる。

「それはずつとか？」

「何年かしたら帰ってくるわ。博士もほっておけないし。」

「だけど、どれくらいいるかは決めてない。」

「それなら、結婚してからでもいいんじゃないの？」

「だめよ。いつ帰ってくるか分からないのよ。結婚してあなたを縛りつけたくないわ。」

「俺に志保の帰りを何年も待たせる気がよ。」

「だから、結婚は出来ないって言ってるのよ。」

「そーじゃなくて！！俺もオメエと一緒に言って言ってるんだよ。」

「あなた、大学があるでしょ？それに一人前の探偵にもなるんですよ？」

「私のせいで工藤くんが夢を諦めるなんて嫌よ。」

「だれが諦めるんだよ。」

俺は大学はそれほど行きたいとは思ってなかったし

探偵なら海外でもできるだろ。

それに、日本だけでなく世界でも通用する探偵になりてーし。

あと、なんといつてもオメエと離れたくないっていうのが一番の理由だな。」

新一はニツ、と歯を出して笑う。

「あなた卑怯ね……。」

「そつだよ。俺は卑怯な男だからどんな手を使っても志保と一緒に行くぜ。」

というわけで結婚は卒業後でいいな。」

「ほんとにいいのね？それで。」

「ああ。だから早く用意して博士のところ行くつぜ。」

話が一段落したところで新一は残りの朝食を勢いよく腹にいれ込んだ。

その様子を志保はうれしそうに眺めていた。

旅行？（後書き）

全然話が思いつかなくて、久しぶりに書きました。

私的にはこの話満足してません・・・

いつか大幅に編集するかもしれない。

報告（前書き）

12月～1月

報告

「「「.....」」」

広いリビングに静かな空気が流れる。

どれくらいの時間が経ったのだろうか。

ソファには白髪頭の老人とその向かいに黒いスーツを着た若い男性、

その横には綺麗な花柄のワンピースを着た女性がいる。

長い沈黙の後、白髪頭の老人、阿笠博士が口を開いた。

「今の話は、本当かね？」

その質問にスーツ姿の男性、工藤新一と

その横に座っている女性、宮野志保はゆっくりと頷いた。

「じゃが、その歳で結婚となると大変なことがたくさんあるんじゃないか？」

そう。今、新一と志保は志保の親と言っても過言ではない博士に

結婚の許しをもらおうと阿笠邸に訪れているのだ。

2人は慣れ親しんだこの家も、今日ばかりは中に入るのにかなり勇気がいった。

しかし、これはいつかは通らなければならぬ道である。

新一はこれからも志保と一緒に生きていくために勇気を振り絞って言った。

「確かに、まだ俺らは若いし大変なこともあると思う。

けど、そのときは2人で乗り越えるさ。

今までだってたくさんの試練を俺達は乗り越えてきたんだ。

だから大丈夫だよ。」

そうは言ったが博士の表情はまだ硬い。

「志保君はどうなのかね？新一君と結婚する、ということとは

なにかを犠牲にすることもあるじゃろう。その覚悟はあるのかね？」

「ええ。」

「志保君が大丈夫と言うのなら大丈夫じゃろうが、

君達2人はおとなでもあり、子供でもある。

時には人を頼ることも大切じゃぞ。

特に志保君は何でも1人で抱え込む癖があるからのお。

新一君がちゃんと助けてやってくれ。」

「ああ。約束する。」

「それじゃあ、いいの？博士？」

「わしは構わんよ。2人が決めたことなら何も文句は言わん。

その代わり、新一君が嫌になったらすぐにこの家に帰ってきなさい。」

「ふふっ・・・そうさせてもらっわ。」

「おい。」

1人、焦った顔をした新一の横で博士と志保はその様子を楽しむかのように笑っている。

「あ、博士。あともう一つ言わないといけないことがあるんだ。」

「ん？なにかね。」

「実は、俺達結婚したらすぐイギリスに行こうと思う。」

「??それは新婚旅行かね？いいのお、イギリスか。わしも一度は行ってみたいのお。」

羨ましいの、と言う博士を横目に新一は首を横に振る。

「まだどれくらいいるかはわかんねーけど、しばらくは向こうに住むつもりだ。」

「何！？イギリスに住むつもりなのか？」

そうか……。寂しくなるがこれも2人で決めたことなら仕方なからう。

わしは何も口出しはせんぞ。」

寂しそうな博士を見て志保が言った。

「博士、私達と一緒に暮らさない？」

それなら私達も安心だし、

向こうにはお父さんが研究に使っていた部屋や器具も残ってるみたいだし……」

すると今度は博士が首を横に振った。

「志保君たちの気持ちはうれしいんじゃないが、わしは長い間この町に住んでいたからのお。」

この町から離れたところで暮らすというのは勇気があるもんじや。

だからその話は気持ちだけもらっておくよ。」

「でも……」

「大丈夫じゃよ。わしはわしで楽しくやるつもりじゃ。」

そんな心配してないで新一君の両親にもこのことを言わないといけないんじゃないかね？」

「博士、ありがとう。」

そう言った志保は綺麗に微笑んだ。

その後、新一は海外にいる両親に電話で話した。

新一の母親である有希子は「志保とけっこ……。」

まで聞くと、新一の言葉を遮りおめでとぅー！と祝福の言葉を贈った。

（つたく、最後まで言わせるよな……）

「やっぱり優作の言うとおりだったわね。」

近々志保ちゃんのウエディングドレス姿が見れるっていうのは。

とうとう私にも娘ができるのねー

ふふふ。次は孫かしら？でも、まだこの歳で『おばあちゃん』なんて呼ばれたくないわ。」

有希子は一人で勝手に盛り上がっている。

新一は電話に向かつてはえーよ、と言いながら顔をほんのり赤く染めていた。

ようやく有希子が落ち着いてきたところで電話の相手は優作に代わった。

優作は「幸せにしてあげなさい。おめでとう。」

と一言言っただけだった。

(サンキュー、父さん。)

博士と新一の両親への報告から三週間が過ぎた。

その間に新しい年を迎えたが、新一達は結婚式の式場や衣装、

日取りを決めるのに忙しく、なかなかゆっくりとすることが出来なかった。

そして、今日からは残り少ない高校生活が始まる。

それぞれ家を出た新一と志保は挨拶を一言交わし、横に並んで歩く。

すると、後ろからバタバタと大きな足音が2人に近づいてくる。

「しんいちー！！しほー！！」

名前を呼ばれた2人が後ろを振り向くと、息を切らした女子高生2人がいた。

「蘭、園子・・・おはよ。久しぶり、だな。2学期以来・・・」

「あー！ー！ー！！！！ほんとだったんだ！和葉ちゃんの言ったこと！！」

「はあ？」

「ちよつと！なんで私達に言わなかったのよ！！新一君も志保も！」

園子が新一と志保を交互に睨む。

「なんだよ。朝っぱらから・・・しかも新年そつそつ。」

新一がそう言うと、園子の横にいた蘭も2人に詰め寄る。

「なんだよ、じゃないでしょ？」

どうして、私達に2人が結婚するってこと言わなかったのよ。

昨日の夜に和葉ちゃんから電話で聞いたんだから！

その指輪だって婚約指輪でしょ？」

（服部・・・勝手に言いやがって。）

そして、その日一日は蘭と園子にプロポーズの言葉や

冬休みの出来事など質問尽くしの新一と志保だった。

報告（後書き）

久しぶりで、自分が今までなにを書いていたか忘れました。

この話も前回同様、あまり気に入ってないです。

復活！ 探偵団

「あーいちゃん！明けておめでとう。」

「あら、歩美ちゃん。」

「灰原さん、お久しぶりです。」

「よ！元気だったか？」

「円谷君も小嶋君も久しぶりね。」

志保が学校から帰っている途中、子供達3人に声をかけられた。

その3人は今でも、志保のことを『灰原哀』と呼んでいる。

周りに彼女の事情を知らない人がいるときは『志保おねーさん』と器用に使い分ける。

ちなみに新一のことも志保同様、『江戸川コナン』と呼ぶことがある。

歩美いわく、

哀、コナン、と呼ぶと少年探偵団が5人だったころに戻る様で

見た目が変わってもこの呼び方が自然なんだ、と言う。

志保も灰原哀から宮野志保に戻り、

小さな探偵たちから灰原哀の名前が呼ばれなくなることに少し寂しさを抱いていたため

今のようにたまにでも昔の名前で呼ばれるとうれしくなるのだ。

「今日はどうしたの？3人でどこかへお出かけ？」

志保がそう問うと、自称少年探偵団のリーダー、小嶋元太がニヤツと笑って

一枚の紙を志保に見せた。

そこには《僕の家で飼っている猫をさがしてください。》と書かれていた。

「少年探偵団の俺達に依頼がきてんだ！今は捜査中なんだぜ？」

「そつだ！！哀ちゃんも一緒に探して？」

いつもこういう探し物の依頼は結構すぐに見つかるんだけど

今回の依頼のワンちゃんはなかなか見つからないの。」

お願い、と両手を合わせて志保に頼む歩美の姿はかわいらしい。

こんなことをされるとどうしてもいいわよ、と答えてしまう。

「よしー！じゃあ、少年探偵団復活ー！ー！」

「復活！って……今までも続いてたじゃないですか。」

「ちがうよ。哀ちゃんを含めた探偵団だよ！」

「なるほど。それならコナン君も必要ですね。」

「そうだな、灰原。今日コナンはいねーのか？」

「今日は学校が終わった後、いつもの探偵さんにお呼び出しもらってたわ。」

志保の言ういつもの探偵さん、とは一年ほど前に《眠りの小五郎》と世間を騒がせた？

あの探偵のことだ。

新一は度々目暮警部や毛利探偵に呼び出しを受ける。

今日も、授業終了のチャイムが鳴ったと同時に教室を出て行った。

「コナン君、姿は変わっても中身は全然変わりませんね。」

「ったくよー、事件ばっかだなあいつは。」

「でも、哀ちゃんはそんなコナン君を好きで結婚するんだよね？」

「この指輪は婚約指輪でしょ？」

「結婚！？指輪！？」

光彦と元太は驚いて自分達よりも背の高い志保の顔を見上げる。

「灰原さん、コナンさんと結婚するんですか？」

「そうだぜ！おめーらも見に来いよ。灰原のウェディングドレス姿。」

「

「あー！！」

彼らのもとへやってきた人物は志保の目を後ろから隠した。

「だーれだー！！」

その人物は子供達にシー、と人差し指を自らの唇にあてている。

志保はあきれつつ

「黒羽くん。」

と、冷めた口調で言った。

子供達3人はえ？と首をかしげる。

「おい。」

「冗談よ。こんなことするのはあなたしかいないでしょう。江戸川くん？」

「正解。」

そう言って新一は志保の目を開放する。

「よ!!!オメーら久しぶりだな。」

「コナン君!!!」

「事件は解決したんですか?」

「ああ。サクサクつとな。」

「それじゃあ・・・」

「少年探偵団、完全復活ですね!」

「だな!」「だね!」

(俺らはもう少年じゃねーよ)

「それにしても結婚ですか。いいですね。」

「ほんとだよ。コナン君と結婚するのは歩美だと思ってたのに。」

「歩美ちゃんにはもっと素敵な人がいいわよ。ほら、円谷君とか小嶋君とか。」

(俺は光彦や元太以下かよ・・・)

赤くなる光彦と元太とは逆に何かを睨むような目をした新一。

「じゃあ・・・」「少年探偵団、出発!!」「」

それから1時間後、犬は無事見つかったのであった。

復活！ 探偵団（後書き）

ほんとすいません・・・
全く文章能力がない。。。

ウェディング(前書き)

3月10日

ウェディング

「誓います。」

そう言ったのは警視庁刑事部捜査第一課強行犯捜査三係の警部補であり、

捜査一課のアイドル的存在である佐藤美和子だ。

仕事の時はたいていキチツとしたスーツを着こなしているが

今日、目の前にいる美和子は大きな花が胸元についた真っ白のウェディングドレスを着ている。

その姿にその場にいる男性達はもちろん、女性まで目を奪われていく。

そんな彼女のお相手といえば、言わずと知れたあの高木渉だ。

こちらの男性も立派な白いタキシードを着ているがどこかパツとしない。

式の雰囲気緊張しているのか、ただ美和子と結婚することがうれしいのか、

なんともいえない表情をしている。

お互いに誓いの言葉を言い合い、指輪を交換するなど一通り式が終わり、

渉の周りには同僚の男の刑事たちが、

美和子の周りには結婚を夢見る女の子たちが集まる。

「佐藤刑事、本当におめでとうございます。」

「ありがとう、蘭ちゃん。みんなも今日は来てくれてありがとうね。」

「ほんま綺麗やったで。あたしも早く結婚したいわあ。」

「じゃあ、服部くんに言ってみたら？私を平次のお嫁さんにしてー、
つて。」

いつものごとく、からかいモードに入った園子。

その後ろでうん、うん、と頷く蘭、歩美、美和子。

和葉は真っ赤になっている。

「／／／何言ってるの！！園子ちゃん！

別にあたしらは結婚なんて・・・

それにプロポーズはされる側がエエねん。

「せや！佐藤刑事は高木刑事になんて言ってるプロポーズされた
ん？」

「え？」

「それ、私も聞きたい!!!」「私も!!!」

「歩美ちゃんまで……」

美和子は周りから責められ、頬を染めながらも困った顔をする。

「それは私も興味あるわね。あの頼りない高木刑事がどんな言葉で佐藤刑事を落としたのか。」

今までの会話を黙って聞いていた志保が横から口を挟む。

「落としたって……あのねえ……。」

「教えてよ!!!佐藤刑事!」

「普通よ、普通。出掛けたときに指輪を渡されて、結婚してくださいって……」

けど、顔真っ赤にして言うもんだから私もついOKしちゃってね。

その後は私も恥ずかしくなってお互い無言になって……」

「それで、そこでキスつと。」

「ちよつと、そんなことして……ない……」

美和子は否定するも、志保を除いた女子高生3人と歩美はキヤーカーと盛り上がっていて

美和子の言葉など全く聞いていない。

もう夫婦になるわけだからそのようなことをしていてもおかしくないのだが、

美和子は恋愛に関しては中学生と同じかそれ以下のレベルなので

からかわれることになれておらず、真っ赤になっている。

そんな美和子とは対照的に渉はというと、先輩刑事にいろいろと責められ顔を真っ青にしていた。

「もう！大人をからかわないでよ。それより、志保ちゃんはどんなのよ。」

どんな状況でどんな風に言われたの？」

「新一のことだからいちいち格好つけて言ったんじゃないの？」

「でも、以外と照れ屋なところあるからねー。」

「叩かれたわ。平手打ちよ。」

蘭たちが騒いでいるのを遮って志保が淡々とした口調で言った。

その言葉を聞いた5人は思わず、え？と聞き返した。

「私がいつもの自虐的な言葉を言ったら思いっきり叩かれて。」

言い合いになって、プロポーズされたわ。」

「「「「「「「「「「」

「なんか、プロポーズに至るまでの過程がよく分からないんだけど・・・」

「いろいろあったのよ。話すとき長くなるから言わないけど。」

「じゃあ、プロポーズの言葉は？」

5人の顔が志保にギリギリまで近づいてくる。

志保は後ろに一歩後ずさる。

「志保ちゃん？私にも聞いたわよね？次はあなたの番よ。」

「別に聞いたって面白くないと思うけど・・・」

『俺が死ぬまでずっと守ってやるから。』

『俺たちが高校卒業したら、結婚してくれ。』

『俺を幸せにしてくれよ。これはお前しかできねーよ。』

『一緒に幸せになろうぜ。』

『みたいなこと言われたわ。』

志保は何事もなかったかのようにいつものどおりの口調で話した。

しかし、それを聞いていた蘭たちはそうもいかないようで・・・

「きゃーーーーー!!! 新一、そんなこと言ったの!?!」

「さすが新一くんね。平手打ちからの巻き返し!?!」

「やっぱり工藤くんはちゃうな。平次なんかよりめっちゃ大人!?!」

「そんなかつこいいこと高木くん、一生言ってくれないわね。」

「うー、私もコナンくんにそんなこと言われたかった!!! 哀ちゃん、ずるーい!?!」

5人は口々に言う。

そのころ、新一、服部、渉はくしゃみをしていたという・・・

こうして、高木渉と佐藤美和子の結婚式は無事に終わった。

ウェディング（後書き）

なんだっただ？自分でも分かりません・・・
ただ、前に高木刑事と佐藤刑事の結婚式の招待状についての話を
書いたので一応、この二人の結婚式のこと書きましたが・・・
ただのガールズトークになってしまった！！
しかも、今更なんです、高木刑事は『渉』なのに、
服部は『平次』じゃなくて『服部』なんですよね。

お粗末様でした。

ウェディング

帝丹高校の卒業式から二週間がたった。

志保は鏡に映る自分の姿を見ている。

鏡に映る自分は純白のドレスを着ていて、つい先日見た光景がそこにあっただ。

コンコン

「志保くん、わしじゃよ。入ってもいいかね？」

「ええ。」

ゆっくりと扉の開く音がして、それと同時に入ってきたのは博士だ。

「おー、志保くん綺麗じゃぞ。」

「ふふ、ありがとう。博士。」

「博士、当たり前でしょ？私達が着付けたんだから。」

そう言ったのは園子。

「でも、志保の場合は元がいいからかなり薄めのメイクだけだ。」

これは蘭。

ちなみに今日の結婚式の会場は鈴木財閥の貸切の船で行われる。

招待されたのは江戸川コナンと灰原哀の正体を知っている人だけで、進行役は多少、心配なところもあるが蘭と園子だ。

「わぁー、哀ちゃんきれい!!この間の佐藤刑事と同じくらい素敵だよ!」

「ほんとですね。こんな綺麗な方をお嫁さんにできるなんてコナンくんが羨ましいですよ。」

「で、そのコナンはどこだよ。」

扉の前に立って入り口を塞いでいる博士の大きな体の横から部屋の中に入ってきた探偵団の3人。

「江戸川くんは隣の部屋で準備中よ。」

「じゃあ、歩美たち後で行ってみる!!」

「そうしてあげて。あの人、あなた達に会つのが楽しみにしてたから。」

志保は優しく微笑む。

その笑顔はドレスのせいだろうか、メイクのせいだろうか。

いつもにまして綺麗に見える。

「本当に綺麗じゃ……。志保くん、幸せになるんじゃない。」

博士の目にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「博士には感謝してるわ。お礼なんか何度言っても足りないくらい。」

今まで、お世話になりました。お父さん。

それと、これからも夫婦ともども宜しくお願いします。」

「志保くん……」

博士はついに泣いてしまった。志保もそれにつられて泣きそうになる。

「ほらほら、博士。泣くのは早いわよ。」

せつかく志保のメイクが終わったところなのにまたやり直しさせる気？」

「そうじゃな。それじゃあ、わしは子供達と新一くんのところへ行ってくるから。」

博士は目に残った涙をぬぐい、3人の子供達と一緒に部屋を出て行った。

「じゃあ、私たちも会場の準備行ってくるから。私か園子が呼びに来るまでココで待機してて。」

「ええ。ありがとう。」

蘭と園子が部屋を出ようと、ドアを開けたとき

部屋の前にニット帽をかぶった男が立っていた。

「どちらさま？」

園子が尋ねる。

招待状を出したのは新一と志保のため、出席者の中には新一と志保以外知らない人もいる。

蘭と園子の前に現れたその男は結婚式に着るような服ではなく

黒いロングのコートを着ているので、園子が怪しく思っても仕方がない。

「招待された者だが、志保はココにいるか？」

「あ、はい。どうぞ。」

男のことを怪しむ園子の横で蘭が言った。

「ちょっと、今の人がかなり怪しかったじゃない。勝手に入れてよかつたの？」

園子は男が部屋に入ったのを確認し、男の背中を睨みつける。

「あの人はFBIの人よ。多分、あのときに一緒に戦った人だと思

う。

ほら、早く行って会場の準備しないと時間に間に合わないよ。」

蘭は、園子の背中を押して、2人、会場へ向かった。

蘭と園子が部屋を出て行き、志保はドレスにしわがつかないよう気を配りながら

いすに座りなおした。

そのとき、扉の方から名前を呼ばれた。

「志保。久しぶりだな。」

「赤井さん。」

「まさか、お前が結婚するとはな。招待状が来たときは驚いたよ。」

「私も最初は信じられなかったわ。黒い服しか着なかった私がこんな白いドレスを着るなんて。」

志保が着ているドレスは、新一の母、有希子が自分の結婚式に着たもので

志保にしては少し派手なものであった。

「でも、お前は黒より、白が似合う。明美のその姿も見たかったな。」

「そうね。」

「志保、明美の分まで幸せになれよ。」

「ええ。あなたも仕事ばかりしてないで新しい恋人でも作ったら？」

「フツ、そうだな。」

「あ、それと・・・これ・・・」

志保は自分のカバンの中から一枚の写真を取り出した。

そこに映っているのは小さい女の子が一人。

「それ、おねえちゃん。シャロンに返してもらったの。」

あなたに一枚渡しておくわ。」

「大切にするよ。じゃあな。外でジョディーたちが待ってる。」

「また。」

赤井が部屋から出ていく。

その頃新一の部屋では、博士や子供達が出て行った後、

服部、和葉、黒羽、瑛祐がいた。

「工藤くん、めっちゃ決まってるやん。」

「まあ、似おつてるんとちゃう？それなりに。」

「俺は工藤のタキシード姿より、花嫁さんのウェディングドレスが見たいんだけど・・・。」

「そうですね。僕も蘭さんのウェディングドレス姿、早くみたいですよ。」

きつとすごく似合ってますよね？」

その場の空気が一瞬とまった。

新一がその沈黙を破り、恐る恐る瑛祐に聞く。

「お前、もしかして招待状ちゃんと見てない？」

「ちゃんと見ましたよ。だからアメリカから飛んできたんじゃないですか。」

「いや、あんたはちゃんと見てへんで。招待主の所・・・」

よく見てみる、と言って自分の招待状を英祐に渡す。

英祐は言われたとおり招待状に目を通す。

すると、驚いたように目を見開き、新一の方を見る。

「誰ですか？この宮野志保というのは……。」

「やっぱり見てなかったんだな。その宮野志保が俺の嫁になる人。」

「えっ！！ええええええええ！お相手は蘭さんじゃないんですかあ？」

「ちげーよ。ったく、お前のドジっ子は今だ健在か？」

「瑛祐だっけ？本当にCIAか？」

「ええ……一応。」

初対面の黒羽にもきつい言葉を言われ、歯切れの悪い言葉になってしまった。

しかし、そこで何か思いついたように、満面の笑みを瑛祐は浮かべた。

「ということは蘭さんはもう僕に任せる、ということですか？」

「あ……いや……。」

新一は笑顔の瑛祐とは逆に困った顔をした。

それは、蘭には今、新出先生という恋人がいるからだ。

それに、新一は瑛祐が蘭を好きだということもコナンだったときに聞いた。

だからなおさら本当のことが言いにくいのだ。

しかし、大阪人というのは回りくどいことが苦手なようで……

「アカンよ。今、蘭ちゃんには素敵な彼氏がおんねん。」

「にいちゃん、ちょっと帰ってくんのが遅かったなあ。」

新一は服部たちの言葉で肩を落としてしまった瑛祐を見て、わりいと心の中で謝った。

「まあ、俺も工藤に志保ちゃん取られてしまったわけだし、これから失恋仲間としてよろしくなー。」

「……あまりうれしくないですが……。よろしくおねがいします。」

それからしばらくして園子が新一を、蘭が志保を呼びに来て

式が始まった。

ウェディング（後書き）

お知らせ

新しい小説を書き始めました。

タイトルは『腕時計』です。芦原妃名子さんの『砂時計』を

新志風にアレンジしてみました。

快志の部分も出てきます。

ぜひ読んでみて下さい。

にじファンの検索欄に『腕時計』と入れたら多分一発で出ると思います。

明美（前書き）

10年後、5月

明美

「パパ、ママ、はかせ、いってきまーす!」

「「「いつてらっしやい。「「「

新一と志保の結婚式から10年とちよつとが過ぎた。

阿笠邸の玄関を勢いよく飛び出したのは真つ赤なランドセルをかつた少女。

阿笠邸の門の前にはその女の子と同じくらいの少年が立っている。

「おせーよ。」

「ごめんね、智樹くん。ちよつと寝坊しちゃって。」

「よし!じゃあ、行くか。早くしねーと遅刻するから。」

「うん!」

そう言つて、小学生の2人は走つていった。

そんな様子を大人3人は阿笠邸の窓から眺めていた。

キーンコーンカーンコーン

学校のチャイムが鳴ると同時に教室から生徒が続々と出て行く。

「はぁ・・・やっと試験終わったな。」

「やっと、って。私達はこれからが本番なんだよ、元太くん。」

「そうですよ。僕たち三年生には『大学受験』があるんですから。」

「わかってるけどよー、せっかく一つの試験が終わったばかりってーのに

帰ってからも勉強なんてやってらんねーよ。

「そうだ！今日は久しぶりに博士んちにでも寄って行こうぜ！たまには息抜きも必要だろ？」

「そうだね！！試験勉強もあつてしばらく行ってなかったもんね！

これからも受験勉強とかで博士の家に寄っていく機会も減ると思うし。光彦くんも！！ね？」

「（元太くんは息抜きするほどがんばってなかったと思いますけど・・・）

仕方ないですね。さすがに僕も試験が終わった日に勉強なんて集中できそうにありませんし。」

歩美、元太、光彦は机の横から自分のカバンを取り、学校を出た。

「あれ？」

「どうしたんですか、歩美ちゃん？」

もうすぐで阿笠邸だといつところで3人は足を止めた。

「今、博士の家に女の子が入って行ったのが見えただけど。」

「女の子ですか？」

「なんだ？また博士、灰原みたいなやつ見つけて一緒に住んでんのか？」

元太がそう言うと、歩美は阿笠邸に走っていった。

元太と光彦もその後を追う。

ピンポン

歩美が阿笠邸の呼び鈴を鳴らした。家の中に響く音が外にまで聞こえてくる。

しばらくしてドアが開いた。

が、誰もいない。

と思っただが……

「おにーちゃんたち、誰？」

声のした方へ視線を下げると、先ほど歩美が見たという女の子が出てきた。

その女の子と目が合って3人は3人とも驚いた。

「……哀ちゃん？」「……灰原さん？」「……灰原？」

「？私、あけみだよ。」

あけみ、と名乗った少女は不思議そうな顔をして高校生を見上げる。

あけみの言葉に、歩美たちは戸惑う。

「え……あ、そっか。あけみちゃん？博士いるかな？」

「うん。いるけど、おにーちゃんたち、はかせの知り合いなの？」

「そうだよ。私たちがあけみちゃんと同じくらいの時からの知り合いなの。」

中、入ってもいいかな？」

「うーん……知らないひとは勝手に入れちゃダメだっていつもパ

パが言うから・・・」

あけみは困ったように言う。

そんなとき、玄関の奥から聞き覚えのある声が聞こえた。

「ふふつ。明美。この子たちは悪い人じゃないからお家に入れてあげて？」

その声の主の方に3人は目を向ける。

「志保おねーさん!!」

「久しぶりね、あなたたち。」

博士は今研究室で実験してて少し時間かかりそうだからあがって？」

志保は前と変わらない優しい笑顔で挨拶を返す。

「う、うん・・・」

「」「おじゃまします。」「」

「それで、いつ帰ってきたの？」

リビングに入って、ソファに座ると歩美が志保を見てからずっと気

になっていたことを聞いた。

新一と志保は結婚して二週間ほどしてイギリスへ渡った。

それから志保と歩美はちよくちよく電話をかけていたが、海外なのでお金もかかる。

それに、歩美たちは中学生になり、部活にも入ったので

なかなか連絡をする時間が取れなくなった。

それから高校生に上がり、部活も勉強も大変になってここ二年ほど連絡せず、

志保も歩美が大変なのを分かってか、自分からも連絡はしなかった。だから、志保たちが日本に帰ってきたなんて当然知らなかったのである。

「私達が帰ってきたのは一ヶ月ほど前よ。家の引越しも終わって、落ち着いたから

そろそろ挨拶にでも行こうかな、って思ってたんだけど。

先に見つかっちゃったわね。」

「見つかった……って？」

「江戸川くんと言ってたのよ。今度一緒にあなたたちの高校に行くって。」

それで、驚かすつもりだったみたいよ。」

志保の言葉に、そんなことしなくてもさつきは十分驚きましたよ、と光彦は言う。

「で、さつきの子は誰だあ？」

さつきの子、とはあけみの事だろう。

あけみは志保に『宿題してきなさい』と言われて、今は別の部屋にいる。

「あの子は私たちの子供よ。明美って言うの。」

「どつりで灰原さんにそっくりなわけですよ。」

「髪の色と性格と笑った顔は江戸川くん似ただけだね。」

それにしても本当に久しぶりね。あなた達の性格は変わってないようだけど。」

志保は微笑む。歩美たちも志保につられて笑う。

「それで、今日コナンくんは・・・」

「また、いつものよ。」

「ああ、今でもですか。」

「まあ、アイツから事件をとつたら何ものこんねーからな。」

そんなとき、タイミングよく玄関からただいま、と声が聞こえた。

志保は、ちよつと待ってて、と歩美たちに一言言つて玄関の方に向かった。

「おう！オメエら、久しぶりだな。」

「「「コナン（くん）！！」「」」

「10年たつても元気だな！」

「コナンはちよつと老けたんじゃないの？」

「・・・おい・・・」

「ふふつ。そろそろ運動もしないと足腰が弱くなるかもしれないわね。」

「オメエらなー・・・。」

新一がジト目で元太と志保を見る。志保はそんなことお構いなしといった様子だ。

「それにしても、博士遅いね。」

「そうね。遅くなりそうだから夕飯でも食べていく？」

「うん！―！歩美も手伝う！―！」

「ありがとう。じゃあ今夜はハンバーグでいいかしら？」

「はい。」

その後、博士と明美も交えて久しぶりに賑やかな夕食の時間となった。

明美（後書き）

次話で終わりかな？

終わればいいけど・・・

それより！！もう一つ掛け持ちで書いている《腕時計》！

全然進みません（ー；）

漫画を見ながらだから、すぐ書ける！！とか思ってたんですけど

何処を抜粋するか、とかココの台詞は新一だったらなんて言うんだろっ、とか

以外と難しかったです。

次話の投稿を待つて頂いている方、

もうしばらくお待ちください。

探偵たちの幸せな人生（終）（前書き）

この話で一応終了です。

今まで、閲覧してくださったみなさま、
本当にありがとうございました。

探偵たちの幸せな人生（終）

「ほんまによかったわ。平次の仕事の休みがとれて。」

平太も東京に来んのずっと楽しみにしとったから。」

「せやなあ。それにしても、工藤もねえちゃんも日本に帰ってきたんやったら」

さつさと連絡くらいせーっちゅうねん。」

「しゃーないやん。引越しの片付けとかいろいろ大変なんやから。」

それに、ゴールデンウィークみたいに連休がないと平太の学校もあるし」

どっちにしたって東京には来れへんかってんから。」

今日はゴールデンウィークの初日。

服部たちは朝早くに飛行機に乗って大阪から東京に来ていた。

今は待ち合わせ場所のミラクルランドの入り口ゲート前にいる。

服部と和葉は高校を卒業し、無事に大学も決まって四年間キャンパスライフを楽しんだ。

その後、2人は結婚し、服部は警察官になった。

そして、息子の平太が生まれ、その息子も現在は小学生だ。

見た目は母親似だが、やんちゃなところと危険をかえりみないところは父親似だと思う。

「あつ、蘭ちゃんや。」

「和葉ちゃん！！久しぶり。服部くんも平太くんも元気だった？」

かわいらしい笑顔を見せるこの女性は毛利・・・いや、新出蘭だ。

彼女も高校を卒業したあと、看護学校へ入学し、

看護学校を卒業後、高校時代から付き合っていた新出智明と結婚した。

そしてこの夫婦にも一人、智樹という息子が誕生した。

蘭は、智樹が小学校へ通うようになり、旦那の下で看護師として働き始めた。

ちなみに、明美、平太、智樹はみな、小学一年生である。

「蘭ちゃん、久しぶりやなあ。一年ぶりくらい？」

智樹くんもおつきなつたなあ。」

「平太くんも。子供の成長は早いから。」

「で？ねーちゃんの旦那さんは来てへんのか？」

「今日も診察の予約が入っちゃって。病院は他の看護師さんに頼んで来ちゃった。」

「病院は大変やおお。」

「せや！蘭ちゃん、蘭ちゃんはもう工藤さんと志保ちゃんには会おうたん？」

「うん。2人とも元気だよ。あと、明美ちゃんもね！」

「あー、工藤んとこの娘か……。」

「智樹と明美ちゃん、凄く仲が良くて、よく家で遊んでるの。」

「へー、うちら明美ちゃんのこと写真でしか見たことないからな……。」

「会えるん、楽しみやわ。」

親がこうして会話している横で子供達も仲良く会話している。

「あけみってどんなやつなん？」

「ん？どんなって……普通の女子だぜ？」

「なんや、普通かい。」

「でも、アイツは俺が守ってやる、って決めてんだ！」

「ほー、カッコええな。智樹は。」

「バカにすんなよな。」

「別に誰もバカにしてへんやん。」

小学一年生にしては大人な会話のようだが、

智樹は両親には内緒で明美と一緒に新一の事件現場についていったり、

高校生の探偵団たちとたまに遊んだりするので他の子に比べると知識が豊富である。

平太の方も、祖父や父親が警察で、よく事件の話聞くので智樹と同じレベルの会話が出るのだ。

「あ！！明美だ！！」

「アイツか。」

智樹は明美におーい、と言って手をふる。

手をふる智樹に明美も気づいたようで、明美が走って2人のところにやってくる。

「智樹、おはようー！」

「おお。」

「あんたが明美か・・・」

「?この子だね?」

「平太ってゆーんだ。大阪の友達。」

「そっか。よろしくね、明美っていうの。」

「お!!あんたが工藤の娘か!!」

明美と平太が挨拶をしているのを割り込んできたのは服部だ。

「宮野のねーちゃんにそっくりやなあ。」

「ほんまや、可愛エエ!!初めまして。明美ちゃん。あたしは平太の母親やねん。」

で、こっちが平太の父親。よろしくなあ。」

「うん!よろしく!」

「なんや、笑ったら工藤そっくりやんけ。」

服部が明美の頭をなでる。

そのとき・・・

「よっ!」

「久しぶりね。」

そこにいるみんなの顔が一斉に声のする方へ向いた。

「く、工藤!!」「志保ちゃん!!」

「よー久しぶり。」

「何が『よー久しぶり』じゃ。連絡もろくにせーへんかったくせに。」

「わりい、わりい。やっと落ち着いたと思ったら、警察に呼ばれるようになって」

連絡するにも時間がなくてよ……。」

「ほんまに考えられへんわ。俺から連絡せんかったら一生あえへんかったかもしれんで。」

「わるかったって……」

「もう!!平次!久しぶりに会って喧嘩せんとして。」

「そつだよ。ほら子供たちもう行っちゃったよ。行く、志保。」

「ええ。」

「ママ、私コーヒーカップ乗りたい！！乗ってきてもいい？」

「いいわよ。パパと乗ってくる？」

「ううん。智樹と平太くんと乗る！」

「そう。じゃあ、いつてらっしゃい。」

「うん！！智樹、平太くん、行こ？」

明美は智樹と平太の手を引っ張ってコーヒーカップの入り口に並んだ。

智樹と平太はしびしびという感じだが、それでも嫌とはいわずに三人仲良く順番を待っている。

大人の方かというと、父親は父親同士、母親は母親同士で

子供達を気にしながらも会話を楽しんでいる。

「びっくりしたわ。」

いきなり、服部がしゃべりだした。

「ん？何が？」

「いや、俺、工藤んとこの子はもっと推理小説とか薬学の本とか読むような子とか想像しとったけど、

全然ちゃうやん。」

「そりゃ、まだ小学一年生だし。」

「それでも、お前ら二人の血混じってんやつたらそれもありえるやろ。」

まさか、あんな元気な子やとは思わなかったわ。」

服部も新一もハハツ、と笑う。

「多分、名前を《明美》にしたからだな。」

「明美、ってねーちゃんのねーちゃんの名前やろ?」

「ああ。名前を決めるとき、俺も志保も最初から同じ意見でさ。」

それで、名前を明美にしたら、性格までそっくりだって、志保が言ってたな。

まあ、蘭のときの智樹と一緒に事件現場に内緒でついていくよ
うなところは

俺がコナンだったころとそっくりらしいけど。」

「なるほどな……。」

新一たちが話していると、いつの間にか子供達はコーヒーカーップを
乗り終えたようで、

次は、どこに行くか話している。

「次、あれ行こうや。お化けやしき！」

「えっ……」

「おう！いいぜ。明美も行くだろ？」

「私は……」

困っている明美を見ながら、志保が新一と服部が座っているベンチに座る。

「アイツ、暗いところ苦手じゃなかったっけ？止めなくていいの？」

新一が今にも泣き出しそうな明美を見て、志保に言う。

だが、志保は笑顔でその成り行きを眺めているだけだ。

「あの子は大丈夫よ。ちゃんと、いるから。」

「え？」

「……ほら。」

「ああ。たしかに。」

「何かあったら俺が得意の空手でお前を守ってやっから。」

『……やばくなったら、俺がなんとかしてやっから。』

「なあ、工藤。」

「ん？」

「俺らの人生って幸せやんな？」

「……ああ。ほんと、すごく幸せな人生だぜ。」

探偵たちの幸せな人生（終）（後書き）

やっと終わったー

こんな変なところで終わり！？って感じもしますが・・・

物語を書くって、大変ですね。

探偵たちの幸せな人生はこれで終わりですが、
腕時計、ひたすら・・・のほうはこれからも宜しくお願いします。

咲蘭保^{サクランボ}でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6636w/>

探偵たちの幸せな人生

2011年12月11日22時48分発行